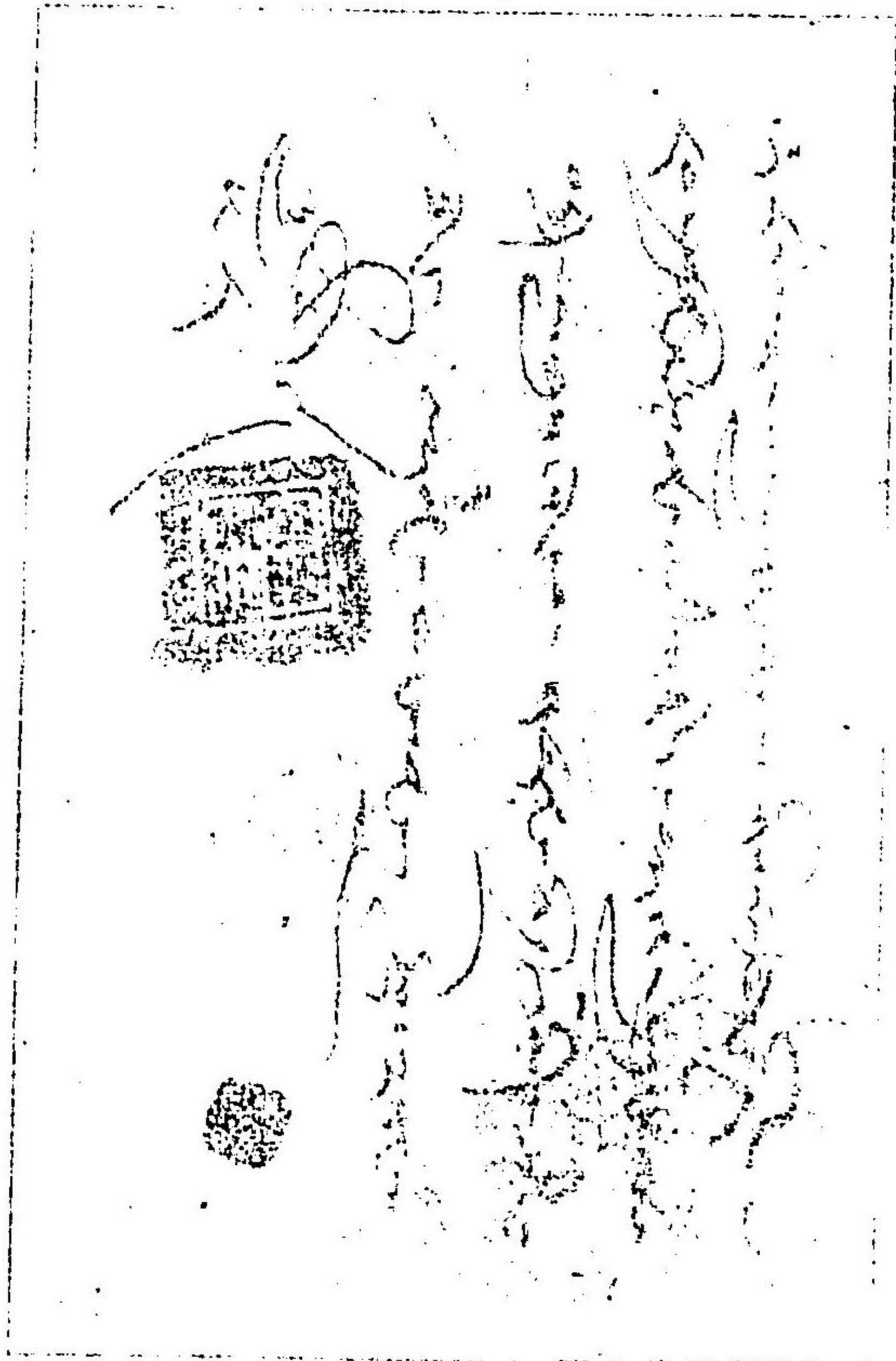


河口慧海著

西藏旅行記
下卷

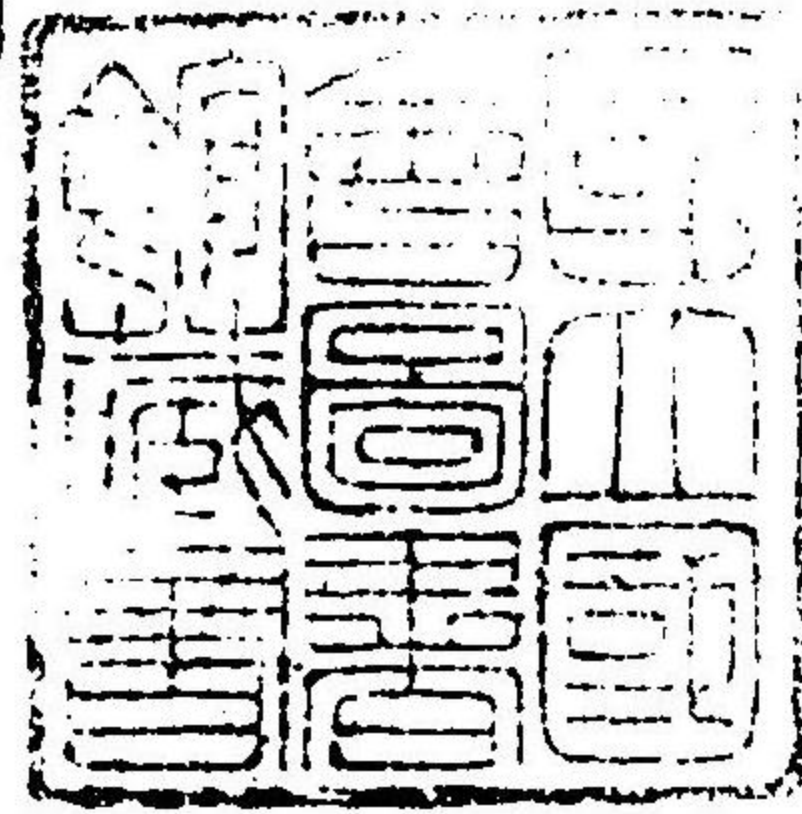
東京博文館藏版

三三三三三三
二二二二二二
三三三三三三



三三三三三三
二二二二二二

292.29
Ka 754t



237916



311 (2)

ニヤント守關長がセラの慧海と
其僕と二人にカレンゴッまで往



くどを得るの證明書を興ふ
壬寅五月八日
書記印



下殿ルーセムサ、ムーピ官長令司國爾巴泥



下殿ルーセムサ、ラドンヤチ臣大理總權執國爾巴泥



西藏喇嘛正装ノ慧海師

(明治三十五年十一月一日ニテ撮影)

西藏旅行記下巻目次

| 目次 | |
|--|----|
| 第七八回 西藏人の誓言 | 一頁 |
| 機先の計畧——四蔵の誓の種類——藥師様か老婆 | |
| 第七九回 僧侶の目的 | 五 |
| 三種族の性質——僧侶及び學者の理想——肉粥の供養——一生自分の借金済し | |
| 第八〇回 婚姻(其一) | 一〇 |
| 奇怪なる多夫一妻——妻の權力——正式の結婚——結婚は父母の隨意——縁談は秘密 | |
| 第八一回 婚姻(其二) | 一六 |
| 不意のお化粧——送嫁の宴——兵式體操——結婚玉璫——宴席の整へ物——怠惰不注意の罰金 | |
| 第八二回 送嫁の奇習 | 二二 |
| 送嫁の祭典と供養——花嫁に戒告——花嫁の泣き別れ——道中送迎の酒宴 | |
| 第八三回 多夫一妻 | 二六 |
| 厄拂の秘術——門前の讒辭——損害賠償の保証——縁弟との結婚 | |

第八四回 晒し者と拷問……………三四
法王を喰ふ——皮肉の拷問

第八五回 刑罰の種類……………四〇
貴婦人の罪状——西藏拷問の方法——水攻の死刑

第八六回 驚くべき葬儀……………四五
無邪氣な露合戦——舊知に邂逅す——死骸の料理——食人肉人種の子孫

第八七回 奇怪なる妙薬……………五二
法王及び高僧の葬儀——死跡の像——其體は中々尊い——奇々妙々の藥——再び大臣邸に寓す

第八八回 西藏探検者……………五六
女宣教師——鎖國主義——外國の西藏探検者——歐洲人ではなつた一人

第八九回 鎖國の原因……………六二
探検家の失敗——全國民衆つて巡査か探偵——政略的鎖國

第九〇回 不潔の都……………六六
盤牛の角の屏——溝は大小便の溜池——西藏の佛教——古派の開山遊學生

第九一回 舊教と新教……………七一

第九二回 法王の選定……………七六
肉慾は菩提性——新教派の基因——男は方便、女は智慧——化力と云ふ意味
 法王政府の神下し——教政一致——其神の下し方

第九三回 子供の撰擇……………八〇
聖中の名を探る——法王政府の子——チュン——賄賂の化身——大臣の失策と神下し

第九四回 教育と種族……………八五
ネーチュン——學校及び教育——華族の種類——官職は賄賂

第九五回 豪族と最下族……………九一
ボンホ族——古豪族——階級と待遇——黑白混合の種族——氏の上下は作法——教育の目的

第九六回 教育の奨励法……………九七
奨励の苛法——僧侶と弟子との關係——經文の暗誦——罵詈も又奨励の一手段——鐵砲製造の事業

第九七回 西藏の物産……………一〇三
重なる輸出品——麝鹿——交易の方法——麝香の輸出先——寶鹿の血角——角の新芽——血角を碎いて死す

第九八回 輸出入品と商賣……………一〇九

第九九回 貨幣と版木……………一一九

輸出品—輸入品—奇なる貨物—モンラム—支那の輸入品—フータン其他の輸出品—西藏の財源—通商上の鎖山の利害—政府其者も亦商賣

第一〇〇回 願文會……………一二六

幾萬の燈明—堂内の粧飾—壯士坊主の奇怪—破戒僧の喪儀—西藏の一体和尙

第一〇一回 法王政府……………一三三

政府の組織—内閣—華族と人民の關係—生れながらの奴隸—租税の費途—僧侶官吏の職務

第一〇二回 婦人の風俗……………一三九

拉薩貴婦人の盛粧—カムの美人と拉薩の美人—婦女子の習慣

第一〇三回 婦人と産兒……………一四四

婦人の業務—家族の主權者は婦人—西藏婦人の貯蓄金—慈愛—産兒の命名式

第一〇四回 兒女と病人……………一五一

男女の組織—小供の遊び—女子の遊び—病人の取扱方—睡らせぬ見張番

第一〇五回 迷信と園遊……………一五七

病根は悪漢—藥劑中の草の毒—園遊に用ゆる酒

第一〇六回 舞踏……………一六三

綠林の園遊—賤民の園遊—西藏の外交政略—感情問題—露國の外交政略—露國の秘密探偵—僧侶籠絡の手段—一般人民の籠絡手段

第一〇七回 西藏と露西亞……………一七二

未來の大王—露國皇帝は即ち化身—露西亞最良の原因—露帝の贈物—シヤータ—の來歴—支那の無勢力—秘密條約—露國と西藏との關係

第一〇八回 西藏と英領印度……………一八三

領國の原因—英政府の懷柔策—國民の感情—政府部内の人氣—僧侶社會の思惑

第一〇九回 輿論……………一八九

強悍なる士民—支那は文殊菩薩の國—英領印度と西藏の關係—西藏と英國との合戦

第一一〇回 清國と西藏……………一九五

清國皇帝の詔勅—詔勅の効力—西藏とネパール國

第一一一回 子ハールの外交……………二〇〇

兵備の必要—外交政略—兩國の親交

第一一二回 西藏外交の將來……………二〇五

西藏と三強國——西藏未來の運命——法王の元氣
 第一一三回 モンラムの祭典……………二二〇
 休養日の亂行——祭祀前の光景——執法僧官の壓制
 第一一四回 モンラムの祭典……………二二五
 高僧の諷刺——祭典中の拉薩府——祭典中の僧侶——壯快なる供養
 第一一五回 モンラムの祭典……………二二一
 駐藏大臣の盛粧——世界唯一の壯觀——博士の階級
 第一一六回 投秘劔會……………二二七
 兵士の服裝——五月難の行列——ネーチュンの出御——市民の石供養
 第一一七回 西藏の財政……………二三二
 法王政府の大藏者——稀有の徵稅法——徵稅以外の職務——一種の役徳——一大缺點——
 一稅品の徵收——法王の遺產處分
 第一一八回 西藏の兵制……………二三九
 常備兵五千人——内亂の起る場合——常備兵の内職——兵士の氣概——天然の兵士——
 俗語の用法
 第一一九回 西藏宗教の將來……………二四五
 迷信中の理想——家庭は説教場——回々教の未來

第一二〇回 西藏宗教の將來……………二五〇
 各宗教の現状——斷案——哲師及び故郷への信音——具足戒
 第一二一回 秘密露顯の端緒……………二五六
 危機を孕む——商隊長の疑惑——又疑はる——上番を認む
 第一二二回 商隊長の秘密漏洩……………二六二
 法王への上書——秘密を漏す——閉門の不幸
 第一二三回 西藏退去の意を決す……………二六八
 商隊長の狼狽——執るべき方法
 第一二四回 恩人の義烈……………二七四
 心事既に決す——秘密を明す——繩を掛けて——此老僧が殺されても
 第一二五回 出發準備……………二八〇
 老尼僧の慈悲——困るのは此荷物——經文と小僧の始末——告別の願文
 第一二六回 出發の準備整ふ……………二八六
 無限の感慨——先發の間際の變事——荷物の託送
 第一二七回 愈々拉薩を出づ……………二九二
 天和堂の哀別——巡査は無給——林中の泣別れ

第一二八回 ゲンバラの絶頂……………二九八

四蔵人の癖——ナム驛の變遷——再び法王の宮殿を望む——巡禮の痛罵——乞食の高利貸

第一二九回 山路を辿て第三の都會に入る……………三〇六

ゲンバラ嶺の告別——深夜雪山の旅行——西藏第三の都會

第一三〇回 愈々關所に近づく……………三一〇

宿生の疑惑——テンバの誘惑——曠原中の雪味

第一三一回 五重の關門……………三一八

盜難の判断——獨立國の貢物——五重の關門——關門内と追尾の危險

第一三二回 第一の關門……………三二四

公道を取るに決す——ベリー城——宿主の執拗、下僕の白狀——病人の診察と雇人の依頼

第一三三回 第一關門を通過す……………三三〇

關門の通過と賄賂の多少——役人を脅かす——旅行券の手入——ベリー城を去る

第一三四回 途上の絶景と兵隊所……………三三五

山麓の絶景——驛繼きの兵士

第一三五回 無事に關門を通過す……………三四一
日本の茶漬を喫食す——第二の關門を通過す——關長の妻君を診察す——第四の關門も無事

第一三六回 愈々第五の關門……………三四六

第五の關門に若く——第五の關門長は人足上り——又關長を脅かす——歸國證書

第一三七回 愈々五重の關門を通過す……………三五一

従者の跡展り——第五の關門を出づ——無量の感慨

第一三八回 西藏に別る……………三五六

旅行の道程——西藏と英領印度との國境——名物の習——雨中田植を見る——人間らしい臥床

第一三九回 荷物の延着、途中の滞留……………三六五

カレンボンに着す——下僕を拉薩府に歸す——先發荷物の延着——チヌター河畔のラアチエ種族——無能なるラアチエ種族

第一四〇回 ダーヂリンに舊師と會す……………三七二

ラアチエ種族の研究——サラット氏の別荘に着す——大熱病に罹る——病氣漸く平癒

第一四一回 疑獄事件……………三七八

ヒマラヤ山中のマラーヤ熱——大疑獄事件——英領印度政府の注意——英國の秘密探

債

第一四二回 救解の方策……………三八四
空を飛んで来たか——嫌疑者を救ふ方法——ネパール國王に頼むに決す

第一四三回 大谷、井上、藤井三師の切諫……………三八八
同僚の友を訪ふて新師に會す——メンキープールの奇遇——三師の苦諫

第一四四回 奥中將を軍營に訪ふ……………三九五
激論深更に及ぶ——恩人に對する義務——露西亞の國事探偵——奥中將を訪ふ

第一四五回 日本軍營の應對……………四〇〇
山比少佐の挨拶——取付く島も無い

第一四六回 ネパール國王に謁す……………四〇三
ネパール行の紹介狀——國王の還御——國王殿下の御下問——符節を合はした如く

第一四七回 護衛兵士の腕力……………四〇九
ランボンの狼宮を訪ふ——番兵に掴み出さる——總理殿下の慈悲

第一四八回 首府カタマンドーに向ふ……………四一五
功德の溜池と銃殺の權利——四年前の舊知を訪ふ——司令長官を訪ふ

第一四九回 國王代理に會ふ……………四二〇

第一五〇回 獄裡の友を懷ふ……………四二五
四蔵の巡禮——拉薩に於ける恩人の消息——大王殿下の宮殿

第一五一回 大王殿下の詰問……………四三一
外務大臣書記官の瀕踏み——再び大王殿下に謁す——大王殿下も亦疑ふ

第一五二回 再び宮殿に伺候す……………四三七
決心の勝を固む——親切なる喜捨金

第一五三回 漸く目的を達す……………四四二
大王殿下の疑念漸く解く——大王殿下の許諾——至極秘密の談話

第一五四回 龍樹菩薩坐禪の巖窟……………四四七
大王殿下の同情——龍樹ヶ嶽に登る

大 團 圓 故山に歸る……………四五二
大王殿下に別れを告ぐ——在留日本人の原意——故山に歸る心事

西 藏 旅 行 記 下 卷 目 次 終

西 藏 旅 行 記 下 卷

河 口 慧 海 著

第 七 十 八 回 西 藏 人 の 誓 言

機 先 の 計 略

ソコで私は殊更に儼然と構へ込んでさて「ドウだお前達二人は誠に立派に暮して居るが併し俺の事を政府に告げると随分金儲けが出来たらう、私も其の方が却て大變都合の好い事があるんだ、私が自身に言うて出ると、なんだか本當の事を嘘の事でもあるやうに疑はれて詰らない、だからお前達二人でダーデリンで見た所のジャハン、ラーマが此國に忍んで来て居る、ソレを私が發見しましたと云つて願ふが宜からう、スルとお前達は錢儲けが出来ると私の方も都合が好い、私はモウ括られる用意をして居からと鋭く云ひました、スルと妻君は少し震ひ氣味、その良人も非常な驚き方で「ドウ致しまして、そんな悪い事をして多くの金儲けをした所で其金が何の役に立ちますものか、夫程私共は悪い人間ぢやア御座いませぬ、喰はずに居つてもそんな事をするのは嫌で御座います、假令此事が知れて私共の身に災難が起つた所がドウセ前世の因縁と諦め

なくちやならん、斯んなに商賈人こそして居りますけれどもサウ云ふムサイ金を取らうと云ふやうな考は持つて居らないので御座います、そんな事を被仰つて下すつては困ります」となかく立派な答へ「そりやサウだらうけれどもお前にも金儲けが出来、私の方にも便宜を得る譯だから言つて見たが宜からう、ソレともお前達はドウしても政府に告げる氣はないのか」ないどころぢやない、チヨオー、リンボチエ、(誓ひの言葉)さう云ふ事は死んでも云ひません」と云ふ、之れが西藏人の拉薩府に於ける最後の誓ひである、チヨオー、リンボチエと云ふのは救世主寶と云ふ意味で拉薩府の釋迦牟尼佛を指して云ふのです、即ち釋迦牟尼佛に對し「若し私が此事を發言するならば死んで宜しい、ドウか殺して下さり」と云ふ位に強い誓ひを立てるのです、デそのチヨオー、リンボチエと云つて左の手を擴げて拉薩府の釋迦牟尼佛の居る方向に指して一生懸命に祈るが如く恐るゝが如くに誓ひを立てました、其時の様子は何如にも人を欺くやうな素振は少しもない、全く深い心の底から出て来たとしか見られない、スルと其の妻君も同じく「チヨオー、リンボチエと言つて決してサウ云ふ事はしません、假令ひ貴方が告げて呉れるとドレだけお頼みになつてもサウ云ふお頼みはチヨオー、リンボチエ決して背くとは出来ません」此誓ひを得さへすれば西藏では公正證書を取つたよりも確かなものであるそこで私は「そんなら無理に頼む必要もない」と云ふて其事は一段話しがさまりました、こゝで一す

西藏の誓の詞の種類

に就て話して置きます西藏では誓の詞が幾種もあつて「南無三寶」と云ふのが普通で「母と離る」とて我言ふとの違へば我最愛の母と死別れよと云ふて誓ふことになるのですが又地方に於ては其各地の地神或は其地方で名高い佛菩薩を指して誓ひます「ラハサ」府では「チヨオー、リンボ、チエ」と云ふのが主であつて商賈の取引上にも愈確定の直段になると此詞を出して誓ひます是は只口先丈で云ふので釋迦堂を指して嚴格に云ふ様などは致しませんですから商賈上とか、ちよいとしたりした話に「チヨオー、リンボチエ」を感詞の如くに話の切れ目に投げ入てもそれで確實に信用するとか出来ない場合も澤山ありますが併し愈々釋迦堂を指すとか或はお經を頭に戴くとかして此誓言を發して事が決定した場合に其れを破るのは親を殺すよりも大罪として居ります、大抵普通の場合に用ゆる誓の詞は自分の話を確める爲めに感詞の如くに詞の間に入れますので婦女子の話には大へん誓詞を澤山用ひます、西藏に於ける誓詞の數は私の知つて居るだけでも四十五種も御座いますが、くだくしいから略します次に主人は私の只今の住處を尋ねたから私は今はセラに居ると云つた所が主人は少し考へて居りましたが、ソレじや貴方は此頃大變名高い法王の御殿に出入するセライ、アムチー(セラの醫者と云ふ意味にて河口師の通稱なり但し本名はセーラブ。ギヤム。ツオー即ち慧海と云ふ)と云ふのは貴方の事ぢや御座いませんか「サウだ」と云ひました所が非常に驚いて「ドウも此頃は世間では貴方を

薬師様か者婆　のやうに云ツて居ります私共も身體が弱いから酷い病氣でも起らないか、ドウか一遍逢ひ申して見て戴きたいと思つて居つた矢先で御座いましたと云ふやうな種々の話が出てソレから大變に其人と親密になつた、ソコで又例の大蔵大臣の處に居るものですから喰物が澤山餘つて仕様のない事がある、ソレはやはり大臣方の紹介で是非見て遣らなければならぬ貴族の病人がある、夫等を見に行くと澤山な禮物の上にいろ／＼珍らしい喰物を呉れるです、サウ云ふ物は自分一人で喰へないからみんな薬舗と其所へ持つて行つて分けて遣る、自分の部屋の留守番をして居る弟子坊さんにも分けて遣る自分の喰ふものはそんなになくつても大臣の處で御馳走が有り餘る程あるんですから……ソレで段々親みを増して來て私の災難を眞實に救ふ原因となつたのです、ソコで私はやはり其大學の生徒になつて居るのでから科目を怠ることは出來ない、折々セラの方に歸つて問答に出なくてはならぬ、尤も醫者であるから幾分か教官の方でも大目に見て呉れてサウ毎日出なくつたツて叱言は喰はないんですけれども自分も好きなものですから折々遣つて行く、コゝで僧侶の一般の傾向及び學者の理想として望んで居る所の事柄、僧侶の人種の區別等に就てお話し置きませう

第七十九回 僧侶の目的

三種族の性質

三大學には何處にも西蔵人許りが居るのではない、モンゴリヤ人それから西蔵人とは云はれて居ますけれども少し人種の違つて居るカムの人も居るです、此等は國を異にするに従つて幾分か性質も違つて居る、西蔵人は外見は温順しくつて能く何もかも考へるですが一體勉強の嫌ひな質で極々怠惰な方で不潔でくらすのも一つは怠惰な處から出て來たやうにもあるです、マア西蔵人の坊さんで普通の生計をして居る人ならば冬は本堂にお經を讀み或は茶を飲みに行く其間は自分の舎の前の日當りの好い處に裸體になつて背中を龜の甲のやうに乾して居る、サウして羊の毛織りの端くれて鼻汁をかんで其鼻汁をかんだ切布を頭の上に載せて乾しながらウツ／＼と坐睡り／＼好い心持に暖まつて居るザマと云ふものはないです、年寄ならマダ宜う御座りますが、随分若い者がサウ云ふ事を遣つて居るのを見ても西蔵人の怠惰であること云ふことが分る、ソコへ來てはモンゴリヤ人はそんな事を遣つて居る者はない、ワザ／＼遠い處から出て來たのは勉強が目的であるから非常に勉強するのみならず問答杯の遣方もなか／＼劇しい、大抵五百人居れば先づ四百人までは普通善い方の人になつて百人位しか屑は出ない、所が西蔵人は五百人居れば四百五十人までは

確に屑の方で、彼の壯士坊主なかと云ふのも西藏人が重なので、カムの人にもモンゴリヤの人にも壯士坊士は稀であります、そふしてモンゴリヤ人は勉強もし、又なか／＼進取の氣象に富んで居るけれども實に怒り易い人間で一才した事にもデキに怒る、と云ふのは詰り自分の種族自慢でモンゴリヤ人はなか／＼立派だ、皆勉強して此通り大勢博士になつて國に歸る、西藏人或はカム人とは全く違つて居ると云ふ高慢の心が非常に強くつて他人に對しても理屈のない詰らない事を非常に威張つて怒つて居る、サウ云ふ點など見ると實に其人の狭量な事を憫まざるを得ない、そふしてモンゴリヤ人の多數はコンナ者で餘程大人らしい構へて居る人でも一寸した事で腹を立てる、斯う云ふ人種は忍耐力を以て大業を成すとは六ヶしい、ジンギスカンのやうに合戦を遣つて一時成就する人が出来ても長く其國の文明を形造つて其社會がますます／＼進んで行くやうにすると云ふやうな充分の力を持つて居らぬと思はれる、カムの人は他の者に比すると餘程善いですが、尤もカムは強盜の本場ですから極く短氣であるけれどもモンゴリヤ人のやうに一寸した事でデキに怒らないなか／＼其邊には忍耐力もある、身體の強壯な事も三種族の中で第一等です、義侠心も随分ある、強盜を遣るやうな奴でも人を救ふ爲めには随分熱心に遣る人間もあるさうです、セラの中に居る坊さんの中にも嫌味がなくつて所謂義侠心に富んで居ると云ふ俠氣の人間はカムの人に多いと私は觀察しました、さうムヤミにお話など云ふのは大嫌ひの性質である、モンゴリヤ人はドウかすると附けたやう

なお話を言ひ出す、其點に於ては西藏人は最も酷い、カム人でも餘程西藏風に染て腐敗した奴は兎も角さうでない限そんな人間は先づカム種族の中から擯斥されて了ふです、カムの女子達はドウも餘程情ないやうで愛らしい處は些ともない、西藏の人間は表面は男も温順いやうに見えて居る位であるから女も亦なか／＼表面は優く見えて居る、但し心内に恐るべき劍を収めて居るとは事實である是が極く大體の氣質の分方ですがカムの中にもマンカム(地名)もあればバーアもありツアルンもある、其他澤山あつて性質が幾分か違つて居る點があるが、細な事はコ、では略します

僧侶及び學者の理想 一體僧侶及び學者の理想として自分が斯く成りたいと云ふことを希望して居るのは何であるかと云へば大抵は彼の閉れた國に於て名聲を高く廣く擧げたいと云ふのと財産を澤山に得たいと云ふのが目的であつて衆生濟度の爲めに佛教を修行するのではない、自分が苦しくないやうに、金を澤山得られるやうに、此世も安樂に未來も安樂に行ける様にと云ふのはマダ／＼餘程宜い方なので未來はドウでも其學問を利用して名を社會に擧げ而して澤山の財を得て安樂に暮らせば宜いと云ふのが千人の内九百九十九人まで其傾きがあるです、斯う云ふ風になつて來たのはドウ云ふものかと云ふに、詰り彼の國では僧侶及び學者の價値を判斷するには其學識とか德行とか或は世人を如何に利益して居るかとか云ふ點から判斷するのでなく其財産の多い寡いに依つて其人の値打が極ります、それ故千兩の財産ある學者は千兩だけの値打しかない、假令其人が十萬

圓持ッて居る學者よりも尊い智識であツても其十萬兩持ッて居る無學者の方が却ッて社會より稱讃を受けて居る、だから金なしでは何の所詮もない、只金惟れ萬事を處すると云ツたやうな庭に眼を着けて金を貯える事に非常に奔走盡力して居る、ソレだから僧侶が商賣を遣るとか農業を遣るとか或は職工を遣るとか或は牧畜をやるとかいろ／＼な事を遣りますので、ソレから又僧侶の本分として俗家へお經を讀みに行ッて其布施金を蓄えると云ふことも大に行はれて居る、可哀さうなのは少しも學資金がなくて勉強して居る修學僧侶であります、それとても目的はやはり其一般の風習に化せられて今の此苦勞が後の安樂を得たいと云ふことに向ッて進んで居るので、決して其苦んだ事を以て社會を利益しやう、衆生の苦みを救ふ資本として遣らうと云ふ志望を以て遣ッて居るやうな人は或は有るか知らんけれども私はサウ云ふ結構な人に不幸にして逢ふ事が出来なかつた

肉粥の供養 ソコでサウ云ふ僧侶がズツと廿年間も學問して進んで行きますと何れ博士になるとか出来る、博士になる時分には少なくとも五百圓位の金は掛る、ソレはドウ云ふ事て掛るかと思ふと其學部一體の者に肉粥を供養しなくちやアならん、ソレは椀に一杯づゝてすけれども其一杯づゝがドウしても廿五錢位づゝ掛る、其外にいろ／＼入用なものがあるからドウしても五六百圓の金は掛る、其金は此貧乏な修學僧侶には一文でもあるものぢやアないけれども又其位置に進んで行くと金を貸して呉れる僧侶がある、其金満家の僧侶は金を貸し利子を取ッてサウして其人に恩

を被せ又自分も利子を得ると云ふ譯です、ナゼならば博士になると實際それだけの力のないバカセでも其名だけてお經を讀みに行くと金を澤山得られるからです、ドウなり斯うなり二十年の修行を済まして博士の名を貰つた人はドウ云ふ事をするかと云ふと

一生自分の借金濟し

の奉公をしなくてはならん、其金を貸して呉れた人に對して……マ

ア都合好く行けば五年か八年で借金は抜けるさうですけれどもサウ行かなければ一生奉公すると云ふやうな詰らん境遇に立つのです、折角苦心して學問してサウして其虚名を貰ふ爲めに又後の苦心を續けると云ふ實に社會の制裁とは云ひながら其制裁に支配されて居る西藏僧侶の愚も亦憫むべき譯である、僧侶の事は是れ位にして置ませう、扱て私は大藏大臣の家に居るものですから他の大臣達の家へも折々は行くことが出来た、其中に宰相の一人でシヨ、カンワ(家の名)と云ふ人がある、元來宰相と云ふ名前の者は西藏では四人、又大藏大臣も三人ある、けれども其の大藏大臣は一人で一番古く遣ッて居る者が凡て其責任を帯びて遣りますので、其他はマア次官のやうなものです、宰相も亦同様で一番元老の人が實際の權力を持つて居るので其他は次官のやうなもので殆ど自分の意見の行はれると云ふことはない位、此シヨ、カンワと云ふのは宰相中の二番目であツて私も度々遇ッて話をしましたが其方の娘がユートと云ふ華族の公子に嫁に行くことになつた、デ其結婚式を實地に見ました、拉薩府の中でも殊に正しい結婚式で御座いますから其事に就てお話ししたい

第八十回 婚姻(其二)

と思ひます

奇怪なる多夫一妻 結婚の事を話す前に一寸地方と拉薩府の結婚の遺方の違つて居る事、ソレから彼の國の夫婦の關係及び權力等に就て豫め言つて置く方が順序かと思ひます、一體結婚の禮式は地方に依て大變に違つて居るから一概に言ふとは出来ない、是迄或西洋人は拉薩府迄は來ずに法王管轄の西藏の關所所謂支那領の西藏まで來てサウして西藏と云ふ名目で公けにされて居る書物が澤山ある、夫等の書物の中にいろ／＼結婚の事が書いてありますがソレは實際其人の見て來たのもあり又聞いて書いたものもあつて確かなものではあるけれども拉薩府の中に行はれてある結婚に就て非常に委しく書いてあるものを是迄見ませぬから特に拉薩府の事を云ふのが必要であると思ふ、其いろ／＼違つて居る點は其地方々々に就て一々説明しなければ到底細い事を言盡すことが出来ないけれども、サウ云ふ事は迎も及ばない、又自分も各地方に就て一々結婚の禮式を見たり譯はない、拉薩府で二三の禮式を見ただけであるから之に就て述ぶるのが私に於て最も便利である、西藏は世人に能く知られて居るやうに多夫一妻である、ソレにも種類があつて兄弟で貰ふのと又他



く泣いて聞て事の婚結然突りよ親兩女少

人同志が相談して貰ふのとソレから最初は一夫一妻であつたが其妻君の権力が強くつて餘所の男を引張つて参り自分の古い習さんの承諾を得て多夫一妻になることも澤山ある、それて其人倫の紊れて居ることは殆ど云ふに忍びない程の事もありますけれども西藏人は恬として耻ぢない、ソレで親子三人の場合に其母親が死ぬと今度は父親に女房を貰ふとか或は息子に女房を貰ふとかして其一人の女が親子に女房になると云ふことも法律上少しも差支ない、ソんなに紊れて居るからしてドコ／＼迄も制限がないかと思ふと又サウでもない、従兄弟同志が夫婦に成ることは犬のやうである、兄弟が夫婦になつたと同じだから許せないと云うて大に世人も咎めるのみならず、やはり法律上の罪人として其處刑を受けなければならぬ

妻の権力

西藏では一般に云へば妻の権力が非常に強い、例へば夫が儲けて來た金は夫が儲けて來た金は大抵妻に渡して了ふ、デ三人夫があれば三人の儲けて來た金を妻が皆受取つて了ひ儲けやうが少かつたとか何とか云ふ場合には其妻から叱言を云ふ、デ夫は自分の入用の時分に妻の手から斯う云ふ譯で是れ／＼金が要るから呉れろと云はなくてはならぬ、若し夫が賸餘金を持つて居ることが分ると大に妻が怒つて其夫に喧嘩を仕掛け甚だしきは夫の横面をブン擲ぐると云ふものもある、是れはマア甚だしい例で、ソんなのは稀ですけれども一般に妻の権力が強い、例へば自分が餘所に行つて何かの相談が略ぼ纏まりさうになると「これで私は承知した、一遍家に歸つて家内に相談してアレが承知

すればソレで御返辭を致しませう」と云うても誰も笑ふ者がなく、自分もやはり其通り家内に相談しなければならぬと云ふ、ですから妻の権力は非常に強いもので、大抵の場合には妻の命令で商賣にも出掛けると云ふやうな譯です、三人兄弟で妻を一人持て居る場合には何れも妻の氣に入ら／＼と心掛けお聲がないからお聲の塵を拂ふことは出来ないけれども御機嫌を伺ふと云ふことはなかく力めたもので實に哀れなものです、併し西藏にも一夫一妻がある、夫等は夫の権力が割合に強い、ソレから又一時夫婦になつて即ち自分の好きな間だけ夫婦になつて嫌になり次第別れるといふ結婚の約束がある、サウ云ふ女は澤山男を持つて居りまして何れの男からも金を取り取ると云ふ始末にいかぬ奴である、ソレは田舎では少ないが拉薩とかシカチエと云ふ處には澤山あるです西藏に於て娼妓とか藝妓とか云ふ者は大抵斯様なものです、斯う云ふ細な事に就いていろ／＼云ふて居ますとなか／＼果てしがないから先づ拉薩府の

正式の結婚

に就てお話しませう、西藏國人の結婚期は凡そ男女の歳は同一であつて大抵廿歳から廿五歳位に至る間に行ふです、稀には早婚の者もあつて十五六歳で結婚する者もある、又晩婚の者があつて卅歳以後に遣る者もある、併し夫等は例外で普通は前に云うた通り同一であつて其女の歳が大抵男の歳と同一である、併し折々女の歳の少ない事もある、晩婚の者は非常に歳が違つて居るものもあります、女房に子が出來た場合には假令兄弟が五人あつても阿父つアんと呼ばれる

のは一番の兄さん丈けて他は決して父と呼ぶことを許されぬ、オチと云うて居るです、所が或歐洲人の著書には西藏では一番の兄を稱して大なる父、その次の者を稱して小なる父と云ふと斯う書いてある、是れは大方西藏人が嘘を吐いたのを其西洋人が眞面目に受けて書いたから斯う間違ひが出来たのでせう、小さな父など云ふて呼ぶことは決して許されて居らない、或は私は行かぬ東北のカム地方ではサウ云ふかも知れないが私の通った地方では決してそんな事はない或西洋人は自分が實見せずに西藏人の嘘を聞いて西藏では是れくだと書くものですからそんな間違ひが出来るので其著者に對しては誠に氣の毒である、

結婚は父母の隨意 ソコで結婚は其娘の自由選擇に依ると云ふことは殆どないです總て父母の隨意に出るもので子女は其相談にも與かることが出来ない、又其事に喙を容れる権利もない、又娘は其親から斯う云ふ息子があるから前行つて見ないかと云ふ相談を掛けられることもない、全く父母が絶對的壓制して結婚せしめるのです、サウですから此國では離婚の不幸に遇ふことが實に多い、けれどソレはコウ云ふ壓制な事を遣つたから離婚の不幸を來たしたのである、コリヤ注意しなくてはならんと云ふやうな事は全くない、今でも此強壓なる風俗は依然として存して居るので御座います、だが邊部の地方或は拉薩でも随分野合は行はれて居る、野合の後に其子女が豫め其父母に告げ承認を得て結婚の禮式を擧げる者も亦有るです、けれども夫等はマア例外の方でどツちかと

云ふと其子女の父母が遣るのが一般に通じて居る習慣です、通常結婚期に達して居る男子の父、母は自分の財産及び家の系統、階級等に相應した家に結婚期に達して居る娘があると其娘の父母の家に媒介人を遣はして其娘をばドウか呉れろと申込むのです、若し其娘の父母が其媒介人に對し最初に斷然と謝絶する時分には其媒介人がコリヤもう話が成立たないと云うて其息子の父母に告げて結婚は成立たぬやうになるのです、若し其娘の父母が媒介人に對し「ドウにか成りませうから互に能く話して見ませう」と返辭をすると媒介人は其後五六遍娘の家に行つて所謂媒人口をきいて勸めるです、ソコで其娘の父母が「ソレでは娘を遣りませう」と略ぼ承諾しても先づト筈者とか或は高僧に判斷を乞ふとか又は神下に就て先づ其吉凶如何を尋ねに行くです、自分が可いと思つたから遣ると云ふやうな事は殆ど西藏では例を見ることが出来ない、ト筈者なり神下が屹度可いと云へばソレで忽ち結婚の相談が成立つのです

縁談は秘密

けれども其子女の父母は其息子、娘に對しては其相談は全く秘密な事です、ドウも非常な壓制のもので、此等の相談中に日本とか或は歐米の風俗のやうに幾許かの結納を納めてサウして財産はドレ丈け持つて來るとか或は何箇の荷物を贈ると云ふやうな事は決して遣らないです、或は又夫の財産はドレ丈けて妻の財産は是れく、ソレで婚姻を取極めると云ふことも遣らんです、其持つて行く物にもドレ丈けと云ふ極りはないけれど其家に相當して世間の人に誇られる位

人同志が相談して貰ふのとソレから最初は一夫一妻であつたが其妻君の権力が強クツて餘所の男を引張ツて参り自分の古い習いさんの承諾を得て多夫一妻になることも澤山ある、それで其人倫の紊れて居ることは殆ど云ふに忍びない程の事もありますけれども西藏人は恬として耻ぢない、ソレで親子三人の場合に其母親が死ぬと今度は父親に女房を貰ふとか或は息子に女房を貰ふとかして其一人の女が親子に女房になると云ふことも法律上少しも差支ない、ソレに紊れて居るからしてドコ〜迄も制限がないかと思ふと又サツてもない、従兄弟同志が夫婦に成ることは犬のやうである、兄弟が夫婦になつたと同じだから許せないと云うて大に世人も咎めるのみならず、やはり法律上の罪人として其處刑を受けなければならぬ

妻の権力

西藏では一般に云へば妻の権力が非常に強い、例へば夫が儲けて來た金は大抵妻に渡して丁ふ、デ三人夫があれば三人の儲けて來た金を妻が皆受取ツて了ひ儲けやうが少かつたとか何とか云ふ場合には其妻から叱言を云ふ、デ夫は自分の入用の時分に妻の手から斯う云ふ譯ではれ〜金が要るから呉れると云はなくてはならぬ、若し夫が臍線金を持つて居ることが分ると大に妻が怒ツて其夫に喧嘩を仕掛け甚だしきは夫の横面をブン擲ぐると云ふものもある、是れはマア甚だしい例で、ソレのは稀ですけれども一般に妻の権力が強い、例へば自分が餘所に行ツて何かの相談が略ぼ纏まりさうになると「これで私は承知した、一遍家に歸ツて家内に相談してアレが承知

すればソレで御返辭を致しませう」と云うても誰も笑ふ者がなく、自分もやはり其通り家内に相談しなければならんと云ふ、ですから妻の権力は非常に強いもので、大抵の場合には妻の命令で商賣にも出掛けると云ふやうな譯です、三人兄弟で妻を一人持て居る場合には何れも妻の氣に入らなく〜と心掛けを解がないから解の塵を拂ふことは出来ないけれども御機嫌を伺ふと云ふことはなかく力めたもので實に哀れなものです、併し西藏にも一夫一妻がある、夫等は夫の権力が割合に強い、ソレから又一時夫婦になつて即ち自分の好きな間だけ夫婦になつて嫌になり次第別れるといふ結婚の約束がある、サウ云ふ女は澤山男を持つて居りまして何れの男からも金を取り取ると云ふ始末にいかぬ奴である、ソレは田舎では少ないが拉薩とかシカチエと云ふ處には澤山あるです西藏に於て娼妓とか藝妓とか云ふ者は大抵斯様なものです、斯う云ふ細な事に就いていろ〜云ふて居ますとなか〜果てしがないから先づ拉薩府の

正式の結婚

に就て話させよう、西藏國人の結婚期は凡そ男女の歳は同一であつて大抵廿歳から廿五歳位に至る間に行ふです、稀には早婚の者もあつて十五六歳で結婚する者もある、又晩婚の者があつて卅歳以後に遺る者もある、併し夫等は例外で普通は前に云うた通り同一であつて其女の歳が大抵男の歳と同一である、併し折々女の歳の少ない事もある、晩婚の者は非常に歳が違つて居るのがあります、女房に子が出來た場合には假令兄弟が五人あつても阿父つアんと呼ばれる

のは一番の兄さん丈けて他は決して父と呼ぶことを許されぬ、オヂと云うて居るです、所が或歐洲人の著書には西藏では一番の兄を稱して大なる父、その次の者を稱して小なる父と云ふと斯う書いてある、是れは大方西藏人が嘘を吐いたのを其西洋人が眞面目に受けて書いたから斯う間違ひが出来たのでせう、小さな父など云ふて呼ぶことは決して許されて居らない、或は私が行かぬ東北のカム地方ではサウ云ふかも知れないが私の通つた地方では決してそんな事はない或西洋人は自分が實見せずして西藏人の嘘を聞いて西藏では是れくだと書くものですからそんな間違ひが出来るので其著者に對しては誠に氣の毒である、

結婚は父母の随意 ソコで結婚は其娘の自由選擇に依ると云ふことは殆どないです總て父母の随意に出るもので子女は其相談にも與かることが出来ない、又其事に喙を容れる権利もない、

又娘は其親から斯う云ふ息子があるから前行つて見ないかと云ふ相談を掛けられることもない、全く父母が絶對的壓制で結婚せしめるのです、サウですから此國では離婚の不幸に遇ふことが實に多い、けれどソレはコウ云ふ壓制な事を遣つたから離婚の不幸を來したのである、コリヤ注意しなくてはならんと云ふやうな事は全くない、今でも此強壓なる風俗は依然として存して居るので御座います、だが邊部の地方或は拉薩でも随分野合は行はれて居る、野合の後に其子女が豫め其父母に告げ承認を得て結婚の禮式を擧げる者も亦有るです、けれども夫等はマア例外の方でどつちかと

云ふと其子女の父母が遣るのが一般に通じて居る習慣です、通常結婚期に達して居る男子の父、母は自分の財産及び家の系統、階級等に相應した家に結婚期に達して居る娘があると其娘の父母の家に媒介人を遣はして其娘をばドウか呉れると申込むのです、若し其娘の父母が其媒介人に對し最初に断然と謝絶する時分には其媒介人がコリヤもう話が成立たないと云うて其息子の父母に告げて結婚は成立たぬやうになるのです、若し其娘の父母が媒介人に對し「ドウにか成りませうから互に能く話して見ませう」と返辭をすると媒介人は其後五六遍娘の家に行つて所謂媒人口をきいて勸めるです、ソコで其娘の父母が「ソレでは娘を遣りませう」と略ぼ承諾しても先づ卜筮者とか或は高僧に判断を乞ふとか又は神下に就て先づ其吉凶如何を尋ねに行くです、自分が可いと思つたから遣ると云ふやうな事は殆ど西藏では例を見ることが出来ない、卜筮者なり神下が屹度可いと云へばソレで忽ち結婚の相談が成立つのです

縁談は秘密 けれども其子女の父母は其息子、娘に對しては其相談は全く秘密な事です、ドウも非常な壓制のもので、此等の相談中に日本とか或は歐米の風俗のやうに幾許かの結納を納めて

サウして財産はドレ丈け持つて來るとか或は何箇の荷物を贈ると云ふやうな事は決して遣らないです、或は又夫の財産はドレ丈けて妻の財産は是れく、ソレで婚姻を取極めると云ふことも遣らないです、其持つて行く物にもドレ丈けと云ふ極りはないけれど其家に相當して世間の人に誇られる位

の物を持たして遣らなければ娘の親も耻であると言ふことは承知して居る、貰ふ方でも娘の母親に對して乳代を納めるのです、其乳代と言ふのは娘が育て上げらるゝ時分に乳を吞まして貰うた其乳代を納めると云ふので又其家相當に耻かしからぬやうに持つて行く、是れは日本の結納とは違ふ、勿論何程と云ふ内約も何も無い、ソレで娘と息子の兩親は例の如く卜筮者或は神下に聞いて吉日を擇んで愈々結婚の禮式を行ふ準備をするのです、先づ其娘の父母は何時頃花嫁さんの方から媒介人が出て來るであらうとチャンと慮つて居る、サウして其時間の少し前に娘に向つて今日は大層天氣も好いから寺詣りに行かうとか或は何處其處へ、リンカの宴を開きに行くからお前は美しく髪の毛を洗はなくてはならんと言聞けると自分は嫁に遣らるゝ爲に御粧りさせられるとは知らずに御粧りする者もあります、どうかすると伶俐な娘は悟つて今まで機嫌の好かつた娘はソレと悟つて悲しうに泣き立てる者もあるです、

第八十一回 婚 姻 (其二)

不意のお化粧 ソレから兩親が、娘に向つて「マア今日は顔も身體も能く拭き取らねばならん」と云ふ、此時には矢張り顔や身體を拭いたり洗つたりするです、西藏人でも洗ふことを絶

對的に悪いとはして居らんですけれど一般の風習は先づ洗ふのを笑ふ方です、併し貴族は日々朝起きると幾分か洗ふ、其洗ひ方か面白い、序に申して置きますが先づ下僕なり下婢なりが湯を柄杓に汲んで持つて來ると其湯を兩方の手の平を回めて其湯を受けて一旦口に含んで口から手の平に吐き出しつ、其れて顔を洗ひます口の中の湯がつきるとブツ／＼と唾を吹掛けて洗ふと云ふ其遣方が實に可笑しいです、尤も又金盥に水を取つてスツカリ洗ふ人もありますが、唾を吹掛けて洗ふ先生達か随分ある、ソレは扱置いて先づ娘は何も知らずに今日は遊びに行けると云ふので大悦びで、頭を毛を洗ひ古い櫛で頭の毛を非常に能く梳いて居ると、時分を計らつて媒介人が出て來ます、或はその前に來て花嫁さんの父、母から贈つた所の髪道具を竊に娘の父母に渡しますと娘の父母は其物品を娘の許へ持つて來て「お前の其櫛は大分古くなつて居るから其櫛を棄て、此新しい良いので梳くが宜い、コ、に良い油もあるから是れで立派にお粧りするが宜いと云ふ、デ化粧が終りますと其父母は娘に向つて始めて斯う斯う云ふ譯で結婚の約定が成立つたからお前は是れから某の許へ嫁入に行かねばならん」と云ふことを告げるのです、是れは拉薩府及びシカチエ其他都會の地では一般に行はれて居ることです、前にも一寸云つた通り稀には敏捷な娘は其結婚の爲に髪を洗ふと云ふことを知つて泣いて髪を洗はないのがある「私は行くのは嫌だ、阿父さんや阿母さんは唾を吐いて私を厭な處へ遣るのだ」と云つて泣き立てる場合もある、サウ云ふ時には其娘の友達が前から來て居り

まして巧く感めて強て髪を洗はせるです

送嫁の宴 いよ／＼嫁入の支度が整ふと娘の父母は送嫁の宴會を開かなければならん其宴會の期限は其家の貧富の度に従て長短を異にし或は一日、二日乃至五日、十日又半月に渡るものもある、此宴會の間に於て娘の父母の親類、知合並に娘の朋友杯はみんな贈物をする、其贈物は其人の貧富及び親疎の度合に従て違ひますが其中には金銭もあり衣類或は飲食物もある、其祝物を贈つて来た人には先づ西藏流の茶と麥の冷酒を飲ませる、西藏では酒を煖めて飲むと云ふことは全くない、デ前に言ひました通り茶と酒は終日終夜絶間なく飲むのです、即ち是れが最も幸福の状態チャ、チャン、ペンマ（酒と茶と交も飲むの謂なり）と云つて前にも説明したやうに西藏人の幸福の境涯の狀態を現して居るです、デ酒の肴と云ふやうなものは用ひない、日中後の食事の時分には先づ麥焦しと肉を出す、其肉は大抵犛牛、山羊、羊の肉を多く用ひ稀には拉薩府では豚の肉を用ひる者もある、牛肉杯は殆ど用ひない、殊に婚禮の場合には用ひない、其料理の仕方は生肉、乾肉、煮肉の三種で焼肉は禮式の時に用ふることを許さない、デ大抵肉は油と鹽とで煮るのですが或は水と鹽とで煮るものもある、此三種の肉と共にゾー即ち乾酪、バター、砂糖の三種で拵へたギセイ豆腐のやうな物を與へるです、ソレを喰ひ終りますと米飯にバターに砂糖と乾葡萄と小き柿とを混ぜた物を饗ひ夕飯或は終宴の時分には卵饅飩或は支那料理を御馳走する者もある、斯う云ふ風で三回或は四回の美食

を日々に供しまするので、其間にも茶と酒とは絶えず飲ませ其飲食の間には或は面白い話をます西藏の舞踏は俗謡を唄つて舞踏を遣るです、舞踏は足を揃へて歌に調子を合せ庭を踏み鳴して跳り立てるです、紀律がチャンと立って居つて宛然

兵式體操 を見るやうですけれど素とく男女が入混つて遣るものですから其間に幾分か愛情

も籠つて随分面白さうに見えるです、樂器はダムニヤン（西藏絃）といふのを弾じて之を謠と足拍子に合はせる、男女幾十人が珠數の環の回ぐるが如く歡喜に満ちて踏り巡るのですが我國古代の歌垣もこんな者かと思はれます斯う云ふ宴會は其家の交際の多少と貧富の度合に従て時間に長短のあるのは前に云うた通りですが媒約人が迎ひに来て其翌日すぐ嫁入りすると云ふのは極く／＼貧しい實際のない家の事です、さて其後幾日か経つていよ／＼舞さんの家に行くと云ふ其前日になると花嫁さんの父、母は其媒約人と自分の代理者とソレから出迎ひの者を十數人（貧富に依て多少の差あり）嫁の家まで迎へに遣るです、デ媒約人と代理人とは先づ花嫁の父母にヌーリン即ち乳代として若干の金を與へます、多いのは日本の金で千圓或は五百圓、少いのは二三圓のもあるです、併し娘の父母は之をチキには受けない先づ辭退して押戻す、ソレを媒約人が無理に勸めて受けるやうにさせる、中には絶對的に辭退する父母もあります其場合に娘の父母の云ふ言葉は「我々の可愛い娘を貴方の方に上げるのですから決して乳代を費ふと云ふやうな事は私共は願はない、只貴方の方へ遣

ツた此娘を貴方がたが愛して下さって末長く此子が貴方の宅で幸福を受けるやうにさへして下さればソレで充分です、私共は切にソレを望む」といふのです、併し大抵は一旦辭退しても強て之を受けさすのが略ぼ通常になつて居る、ソレと同時に娘の結婚式場に用ふる衣服の總てと

結婚玉瑜 を受けるのです、其結婚玉瑜と云ふのは拉薩府の女の飾りとして額際の正面に着けられてあるものです、ソレは人の女房になつた體だといふことですが拉薩府ではソレがはつきりと分つて居ない、結婚しない人でも矢張り飾りに用ひて居るです、所がシカチエ及び其附近の地方では結婚瑜を頭の後の頂上に着けてありますから一目見て人の妻たることがデキに分る、ソレで若し不幸にして離婚になると其男は大に怒つて其女の結婚玉瑜を其頭の飾りからしてヒン毛ツて了ふ、むしツて了へばソレで離婚と云ふことが極ります、三行半の暇状を出す代りに此結婚玉瑜を取つて了ふのです、其他に首飾環、胸飾環、環珞、耳瑜、耳飾塔、腕輪、指環等の粧飾品で大變金の掛つて居るものか澤山有るですけれども夫等は皆娘の父母が其女子に與へますので式場に用ふる衣服、帯、下着、履の類だけを花髻の父、母から贈つて來るです、デ其贈つて來た物は善くツても悪くツても式の時ソレより外のものを着ることを許されない、ソレから嫁を迎ひに來た媒妁人と其代理人は其夜嫁さんの家に泊つて酒宴を開きサウして其喜びを盡す、其宴がなか／＼面白

宴席の盗み物 マア一寸酒を飲ませると飲まされまいとの合戦のやうな騒ぎです、花髻さん

の方から來た媒妁人と代理人とは其夜は充分用心して決して多量に酒を飲まないです、ナゼソレな

に用心をして居るかと云ふと、ソレは此國に一種奇態な風俗がありますので其奇風と云ふは若し此夜澤山酒を飲み充分熟醉して前後知らずに眠つて了ふと花嫁の家に居る朋友とか或は親類の者が其寢て居る所を窺つて何か彼等の持つて來た内の一ツを盗むソレは良い物でも悪い物でも構はない、デ其盗んだ者は昨夜は盲く盗んで上げましたと云つて翌日皆の者に示します、スルと大變です盗まれた人は其

怠惰不注意の罰金 として西藏銀甘タンガ一即ち日本金五圓を其盗んだ人に遣らなくてはならない、斯う云ふ奇態な習慣があるものですから媒妁人等は充分注意して成るべく酒を飲まないやうにする、けれども又花嫁の朋友とか親族とか云ふものは巧に勸めて酒を飲ませやうと掛る、ソコで飲め飲まぬとの争ひが殆ど戦争のやうになります併し其酒を飲めめる言葉及び動作は凡て此國の古代から傳はつて居る所の習慣に依て巧に侷めなくてはならん、若し古代の習慣に違ふ時分には其花髻の媒妁人或は代理人は「貴方がたは古來の習慣を知らない、禮式を知らない、イヤどうも智識がないと云つて大に罵るです、ソレは大變花嫁の家の耻になると云ふ譯であるから容易な事ではな

い、ソレから又花髻の側の人達も酒を辭退するに夫れ相應の文句がある酒は百毒の長とか、イヤ酒は喧嘩製造の道具であるとか酒を飲むと智恵が失くなつて了ふとか種々の比喩或は教訓、唱言を云

ッて辭退しないとか其酌人から大に罵倒される事がある、ソレから又花嫁の方で出してある酒の味がまづいとか肉が良いとか悪いとか其他食物の調理の仕方が旨いとかまづいとか云ッて大に論戰して果てしが付かんと云ふやうな事もある、デどツちが勝ツたとか負けたと云ッて誇り合ふのを結婚の式に伴ふ普通の事と心得、花嫁の朋友親戚或は近隣より所謂新聞種として世間に傳へられると云ふ譯なんです

第八十二回 送嫁の奇習

送嫁の祭典と供養　いよ／＼其當日になりますと娘の父、母は朝早くから先づ送嫁の酒宴を開き而して古教派所謂赤帽派の僧侶をして其村の神々及び家の神々を祭らしめる、其祭典の趣意は其神々に對して云ひますには「今度某家の娘が某方へ嫁入を致します、就ては村の神様并に家の神々、ドウか此娘にお暇を遣はし下さるやう、此娘を餘所に遣ツたと云うことをお怒りなされて害を與へられぬやうに願ひます、其代りにお經を讀み供養をして今日も暇を貰ふ所の慰みを申上げます」と云ふ次第で此法式は大抵その僧侶の住する寺で行りますので之と同時に西蔵古代宗教の所謂ボン教の僧侶を其家に招いて其の家ル（龍王）ルと云ふのは西蔵では其家の財寶を司ッて居る神

さんである、殊に龍王が其家の運を能く守ッて居るものであるから若し其龍王が其家に對し何か怒るやうな事でも出來ると其家の財産が失くなつて了ふ、と斯う云ふ信仰がありますので、ソレで其龍王が其家の娘に大變愛着して其娘と一緒に花嫁さんの家に行ッて了ふ時分には其娘の家は直に貧困に陥るから其娘と共に先方に行かないやうな方法を運らさねはならぬ、其式に用ふる經典の言葉が面白い、是れはボン教の經典である、其の文句は大抵皆何所でも一つ事で「其娘の嫁入りすべき家は決して我家のやうに幸福なものぢや御座いませぬ、又娘御と共に貴方に行かれる如きは決して龍王として爲し給ふべき行でない、宜しく此家に止ッて此家運を守り給へば長へに龍王の享け給ふべき幸福は盡さることは御座いますまい」と云ふ經文を讀んで龍王に對し盛大な供養をします、斯う云ふ事は畢竟古代の習慣上の禮式と云ふ許りでない、前に云ツた通り若し其龍王にして其娘と共に其家を出て了ひますと實に其家が貧困に陥るであらうと云ふ堅い信仰をもッて居る所から斯う云ふことを行ひますので、其供養が終つて次に

花嫁に戒告　其娘に對する所の戒告者と云ふものがある、ソレは先づ花嫁の前に立ッて格言

て組立てた所の戒めを告げるのです、其戒告者としては其戒めの文句を暗記して居る位な少し道理の分つた人間を雇うて來て其人に戒告せしめるのです、其戒告の文句は大抵極ツて居る、又至極通俗に出來てドウ云う人にも解し得られるやうになつて居る、其言葉は「先方へ行ツたならば何事も

親切に勉めよ、目上の人に仕ふるのは女の道であるから一旦他家へ嫁いだ後は其家の舅、姑に従順に仕ふるとは勿論、夫には最も親切に尙ほ夫の兄弟等にも能く仕へ、夫の弟妹等は家の弟妹の如く可愛がり其上婢僕は自分の子供の如くに能く憫れんて使つて遣れ」と斯ふ云ふやうな事を云ひます、其中へ譬なども入れて極感心するやうに戒めます、其事が終りますと今度は其父、母が又正しく其場に坐り込んで同様の事を告げる、ソレは殆ど泣きながら告げて居る、親族、朋友等も亦涙ながらに花嫁の前に跪き其手を執つて懇ろに同じやうな事を戒めるが如くに云ふのです、此等の式が終つていよいよ花嫁は其家を出ることゝ成るのであります、ソコで花嫁が花髻の家に持つて行く財産は貧富貴賤に依て一定しないが富貴な者は自分の莊田を送り貧賤なる者は其度に從て多少の衣服等を持つて行く、

花嫁の泣き別れ

テ其家を出ます時分には花嫁は大抵大に泣き悲んで馬に乗ることを背ンじない、地に俯伏して殆ど立つことが出来ない、凡て其状態は自分の父母の家を去ることを惜む所の真情が顯はれ居るのです、此等は只禮式に泣くのでなくして眞實に長く育つた父母の許を去るに忍びないで泣きますので、其場合には朋友等が介錯をして強て馬に乗せるです、テ馬の鞍等も西洋風のと違ひ日本の古代の風に能く似て居る、なかなか西藏婦人は馬に能く乗るです、乗るにも決して鐙の紐を長くして乗らない、低い椽に腰を掛けたりやうな工合に極鐙の紐を短くして足を折

つて乗つて居る、男でも女でも皆乗方は同じです、私共も始めは大變に困りました、長く乗つて居ると足の骨がビリ／＼疼んで來るです、さて花嫁さんは無理に馬に乗せられていよいよ嫁に行く道に出る、其花嫁の飾りは身には花髻の家から贈つて來た衣服を着け自分の父、母より與へられた頭飾、腕飾に至るまでの裝飾品を着け而して頭から顔の部はリン、チエン、ナーンガ(五寶布)即ち青黄赤白黒の段だら織になつて居る羊毛布をもつて被うて居るです、だから其顔はどんなのが見ることが出来ない、サウしてダータル(吉祥幡)を花嫁の首の後に立て、ある、其吉祥幡と云ふのは五色の薄絹で造り丁度我國の寺堂の幢幡形の小さなやうな物です長さは一尺二寸程の大きいさに造つてある、是れは詰り吉祥即ち幸福を招くと云ふ意味で花嫁の首筋の後に立て、あるんです

道中送迎の酒宴

花嫁を迎ふる幾多の人と花嫁を送つて行く幾多の人と何れも乗馬で花嫁を率ゐて花髻の家に向つて行く其道筋に於て花嫁の親類或は知己の人々が其處々に於て都合三回の送別の酒宴を開くですけれども道の長短に從て三里一回或は五里一回短い處は二三町で遣る處もあるです、ソコで又花髻の家及び親戚の人々も道筋の各所に於て都合三遍の歡迎の宴會を開く、凡て六回宛の送り迎ひの宴會を経て花髻の家に達するのですけれども此行路の送迎の宴會に於ては彼等は充分に酒は飲まない、ソレは彼等は此花嫁を安全に其花髻の家に伴つて行かねばならんと云ふ義務があるからして假令強られても一寸飲むだけ、又片方でも一寸挨拶に強まるまでの事です、一體西

藏の接待の風は一方は非常に遠慮し一方はムヤミに勸めるのが一般の風俗でチキに喰ッて了ふと彼の人は支那人のやうで馬鹿だと云ふ、其道路に於て開く宴會は或は村落の家の内で開くこともあり或は自分等の知合の家を借りて開くこともありすけれども多くは其原の中の便宜な處へ別にテントを設けて其處で宴會を開くと云ふのが一般の風習です、扱花嫁は花聲の門前に達したからと云ふて直ぐに其堂へ上るンてはない、先方から迎へに来た譯ですからチャント入ッて宜い筈ですけれどもコゝに西藏の奇々怪々なる風俗があつて其處へ入ッて行かうとしても花聲の家では堅く門を閉ぢてあるから入ることが出来ない、私は實に此奇なる風習には驚いたです

第八十三回 多夫一妻

厄拂ひの秘劍 花聲の門前には多くの人が立ッて居ッて其人等の中には妙な事を遣る人間が御座います、ソレは極ツた事で、此花嫁に附いて來た所の惡魔或は疫癘と云ふものがある、其惡魔或は疫癘を入裂きに裂く所のトルマ(秘劍)を自分の右の手で隠して持ッて居るです、ソレは何で拵へてあるかと云へば麥焦しをバタと水とて捏ね固めて其上を植物の赤い汁で染めてある、其形は立法三角で劍の形に似て居る、其劍は僧侶が秘密の法を封じ込んで拵へたものださうです、其劍を持

ッて居る人は誰か分らないが其人等の中に居りますので此人は花嫁の門前に到着するのを見ると其隙を狙ッて花嫁の顔に其劍を投げ付ると同時に門の戸を開く者がありますので飛ぶ如くに門内に飛入ッて了ふ、其人が入るや否や以前の如く其門の扉が締められて了ふ、ドウも笑止しなことで、花嫁の顔には赤い汁の掛ッて居るバタと麥焦しが細に碎けて奇麗な着物に掛ッて了ふ、尤も花嫁さんの顔は先にも云ツた通り五寶布で蔽はれて居るから顔には直接に掛ッて居ませんけれども澤山におカラが掛ツたやうな風になツて居る、ナゼ斯んな奇態な事を遣るか云ふとソレは其理由があるのです、ナゼかと云ふと花嫁は其故郷の神様及び其家の神様の守護を失ッて了ツたのである、と云ふのはお暇を貰ッて出て來たからです、ですから自分が花聲の家に来る時分には故郷や家の神様は附いて居らない、詰り花嫁を護る神様がないから途中に於て澤山の惡魔や疫癘が附き纏うて花嫁に從ひサウして花聲の家に入ッて來て嫁と聲とに害を加へるやうになるから是等を追拂ふ爲めに又之を征伏して了ふ爲めに此秘劍を擲つのです、所て擲ツた人はナゼソんなに門内に逃込んで直に又其門を締めるかと云ふと此人は若し其劍を投げてグツグツして居ると花嫁の送りの人に捉まる恐れがある、捉まると大變です、此時又西藏銀二十タンガー(元)を罰金として其捉へた人に拂はなくちやならぬ習慣があるものですからソコで直に逃げ込んで了ふのです、

門前の讚辭

サウすると豫て門内に待受けて居る人の云ひますには「此門に對してシエツバ



十 郎 放 に 嫁



花 を 匂 秘

(讚辭)を興へよ、左すれば此門に入ることを許しませう」と云ふ此讚辭と云ふのは種々の美麗なる言葉、豊富なる名詞を以て佳瑞祥福の縁起を讚説するのである、デ其花嫁の側の讚説者の云ひますには「讚辭を述べやうと思つてもカタ(薄い絹にて冠婚葬祭の場合の贈物)がないからドウも仕様ががない」と答へますと門内の人は門の間からカタの端切を示して「さあカタを」と云つて一寸示したかと思ふ其瞬間に直に門内に引入て了ふナゼ斯う機敏に遣るか云ひますと又是れにも理由があるので、其カタの先を花嫁の側の人に捉へられると甘タンカーの罰金を其握つた人に遣らなければならんと云ふ奇習があるからである、ソコで其カタを見た丈けて讚説者は恭しく構へて「此門は寶藏の入口にして金の柱に銀の扉或は門の内には七寶自然の寶堂、玉殿あり、其殿に在する方々は神か菩薩の如き眞善美を備へ給ふなり、斯る美しき門に入るは實に無上の幸いと喜びの基を成すの始めなり」と云ふやうな事を多く述べるのです、其讚辭を述べ終りますとキイーと其門が開かれるのです、コ、て一寸述べて置かなければならん事がある、時として其花嫁が花髻の處に出て來る中途で或る村落を通つて來ると其村落の人の爲めに花嫁を奪はれる事がある、其の奪ふ村の人の口實として云ひますには「彼の女は自分の故郷の守護神なしに出て來たから多くの惡魔や疫病が附添うて來た、サウして此我々の村の中へ入つたから我等の村落に損害を興へ本年の收穫に大害を興へるに違ひないだから此花嫁を

損害賠償の保證

として奪はなくちやアならんと云つて引捉まへるです、デなか／＼渡さないスルと花嫁の隨行者は其要償金の幾許を興へて先づ安全の通過を希ひ茲に始めて通過し得らるゝのです、勿論是れは都會には行はれて居りません、詰まり邊鄙の地に稀に行はれて居るので大抵はサウ云ふ事はせない方が多いのです、ドウか憎まれてもするとサウ云ふ事を遣られる、さて其花髻の家の門が開かれると同時に花髻の阿母さんは酸乳とチエ、マとを持って來るです、チエ、マと云ふのは麥焦しとバタと砂糖と小芋とを混ぜたものです、小芋は西藏で出来る自然生のもので、大きさは小指の先ぐらゐて芋と同じ味、極堅くツて旨いものです、此四つを混じて拵へたものをチエ、マと云ふ、西藏では此酸乳とチエ、マとは非常な祝意を表する爲に用ひるものです、ソコで此二の品を花髻の母は花嫁を始め送迎ひの人々に少しづつ遣りますと彼等は一々之を手の平に受けて舐ります其式が終つてから其母の案内に従つて堂内に入つて行く、此處で又酒宴が開かれる、所て古教派の僧侶は又其村の神様、家の神様に向ひ「此花嫁は某から貰ひ受けて今日より我家の人と成りました、就ては村の神様并に家の神様は今日以後此花嫁の庇護者とならんことを希ひます」と告げてす、ソコで酒宴が開かれさすと花髻の阿父ツアン阿母さんは花髻及び花嫁媒介人并に送迎人等に對して例の一筋づゝのカタを興へる、是れは花髻と花嫁と夫婦の語らいが確定した事を意味して居る禮式なんです、花髻と花嫁は宴酬に至らずして外の室に移されて了ふ、此始めの酒宴で日本のやう

に三々九度と云ふやうな交盃の式はない、是等の送迎ひの人々及び親類の人々杯は依然として矢張り花髻の家に止つて日々酒宴を開く、其間には花髻の親類、知己、朋友等が皆相當の贈物をもつて其宴會に招かれて来る、其宴會の短いのは二三日長いのは一箇月に至ることがある、西藏人は斯う云ふ宴會とか或は遊びに行くとか云ふ事には極氣長いです、ソレから西藏の御馳走と云ふのは極しつこい物許りて支那人よりも脂氣の多い肉のやうな物許り喰ふです、アツサリとお茶漬に香物と云ふやうな御馳走は夢にも戴けない、サウ云ふ重くろしい御馳走で長い宴會を開く、其宴會が終つて送り迎ひの人々が歸つた後では尙ほ數日間花髻の朋友下女杯が花髻の家に止つて居るのが例になつて居る、尤も有福者は花髻の家から一生使ふべき小間使を添へて来るのが大抵通常である是れて全く結婚の事が終つたと云ふのぢやない、其後一箇月或は六箇月或は一箇年を経てから花髻と花嫁は共に又花嫁の家に出て来る、其場合には澤山な人は一緒に來ませんけれども二三人の人を引き連れて來て花髻は大抵花嫁の家に止まり幾日かの後自分の宅へ歸つて了ふ、花嫁は其生家に止まる事或は一箇月乃至三箇月、ソレは花嫁の望みに従つて時日の長短はいろ／＼になつて居る、併し何月何日逗留して居ると云ふことは花髻に約束する、すから花髻は其期日になると迎ひに來て家に連れて行くです

縁弟との結婚　ソレで其花髻に弟があると大抵其結婚した後六箇月或は一箇年を経て家内だ

けて一寸禮式を擧げて結婚する、大抵兄は其禮式の時分には何處かへ旅をするとか遊びに行くとかして居る留守に禮式を擧げて弟と結婚させるのもある、ソレは母親が媒妁をするのです、弟が三人或は五人あつても同じく斯う云ふやうな方法でチャンと結婚させます、或は花嫁と弟等と隨意に結婚して其禮式を擧げないのもある、先づ斯う云ふ風で結婚の禮式は終つたのである、西藏では此多夫一妻を稱してサースンと云うて居る、サースンに子が出來た時分には誰の子か分らないけれども其眞實の阿父さんと云ふのは其眞實の親の誰たるに拘はらず先づ一番の兄を以て父と呼び其他はオヂを呼ぶことは前に云つた通りである、斯う云ふ奇怪なる家庭に凡て兄弟が同時に住んで居ると云ふことが少ない、大抵其中の一人が家に止つて居ると其他の者は商賣に出掛けるとか或は官吏ならば官用を帯びて出掛けるとかいろ／＼の方法で外に出るやうになつて居る、此多夫一妻の風俗は今でも西藏では實に盛大であつて其國人には其事は大いに善良であると信ぜられて居る、稀に外國に出て行つた所の商人等は此風俗の可かないと云ふことを知つていろ／＼に言ふ者がななくても無いけれどもソレは昔から(ルクソー、ミンツ)古來習慣がないと云ふ意味だと云ふ一言で皆破られて了ふ、此言葉は殊に強大なる勢力を以て居つて此一語の下に尊き眞理も蹂躪せられて了ふ、斯る奇怪なる結婚式と夫婦の關係は西藏古代のボン教より生じた習慣で今日までルクソー、ミンツの一語の下に眞實佛敎の遺入つたる後も此習慣が盛に維持して來たのである、否な盛に傳はつ

て来たのである、勿論佛教徒は社會的問題に注意する者少なく殆ど古來の坊さんは皆隱居士義でマ佛法ばかり遣つて本當の社會に活用する活潑々地の眞實佛教の眞面目を顯揚することに注意せず斯う云ふ悪い風俗習慣を打破ることをも爲さずして其儘に投つて佛教本來の面目に似合はぬ事を遣つて居つたのです、是等は古來の佛教坊主の缺點であつて決して佛教其者の缺點ではない

第八十四回 晒し者と拷問

法王を咀ふ 十月上旬拉薩府の住居よりバルコル(廻道)へ指して出掛けました、此處は拉薩府での目抜の處で罪人などあると此道の邊に晒します、其晒し方にもいろ／＼ある、只手錠、足枷を箝めて晒して居る者もあるが此時は大變に晒されて居るのを見たてす凡そ廿人許りも彼方の辻、此方の柱に一人づゝ晒されて居つた、いづれも立派な着物を被て居る、其首には三尺四方の板で首の入る丈け穴の穿いた厚み一寸三分の極重い木で拵へた板が箝めてある、板は二つに割れるやうになつて、其板に二つの棧があつて其棧をもつて二つの板を合せてサウして其處へ錠を卸したもので、其板の上の紙に西藏語で罪狀が記してある、ソレは何々の罪狀に依つて此者は幾日の間斯う云ふ晒し者にして其後或は流罪或は叩き放しにするとか云ふやうな事なんです、叩くのは三百より七

百位まであります、なか／＼澤山記して御座いますから一々讀む譯には行きませんが一つ二つ讀んで見ますと拉薩府ではなか／＼名高いテン、ゲー、リンと云ふ法王の居らない時分には法王となり得べき資格のある候補者の寺の人等である、其寺に居る人達の中には俗人もあれば僧侶もありますが元來此寺の主人をテーム、リンポ、チエと云ひ其執事をノルプー、チエ、リンと云ふ、其執事が今の法王を咀ひ殺さうとして大變な秘密祈禱を始めたさうです、其秘密祈禱は佛教上から遣つたのでなくツてボン教の法に依つて法王を殺す所の咒咀を行ひ、其出來上つた咒咀の紙を履の臺に詰込んで法王に良い履を拵へて上げたさうです、テ法王が其履を穿くと御病氣が起つたとか云ふので段々詮議の未其履の中を調べて見るとボン教の咒文が入つて居つたと云ふ、ソレから事が破裂して其事に係ある人が皆捕はれることになつてテーム、リンポ、チエと云ふ方も矢張り其事に係があつて捕へられた或は世間ではテーム、リンポ、チエの傍附でノルプー、チエ、リンが法王を殺さうとしたのである、法王が死にさへすれば此テーム、リンポ、チエが法王の位に登られると云ふ見込があつたからア、云ふ悪い事をしたので實に憎むべきラーマであると云つて居る人もある、其眞偽は兎に角、何しろ今の法王が位に即く前まで此テーム、リンポ、チエが法王であつたのです、其時代にノルプー、チエ、リンと云ふ人が總理大臣の權を握つて大變に壓制をして辜のないのに澤山な人を殺した事もあつたさうですがソレは全く事實であるデ一旦今の法王に其位が歸すると其時の有様を委しく



者し晒の人

告げたる者があるので法王も内々此テモ、リンボ、チエ並にノルブ、チエ、リンに對しては善い感情をもつて居なかつたさうです、ソコで此履を献上した事から皆が入牢するやうになつたので、テモ、リンボ、チエは最早獄中であつたので、テモ、リンボ、チエ、リンはマダ其時分には石牢の中に投り込まれて居つた、其石牢の上の方には窓があつて重い罪人ですから其窓から食物を入れますので苛責をする時分には其窓から出入をするやうにしてある、サウですから容易に逃げることも出来ず其石牢の中で苦んで居るので、折々此世の日影を見るやうな事が出来ると必ず打叩かれるか、恐ろしい拷問に遇はされるさうです、其拷問の仕方はドウであつたか其當時の



美るな惨悲

有様を見る事が出来なかつたから知らなければ聞いてもソツとする程の拷問である
皮肉の拷問 其拷問の仕方は先づ割竹を指の肉と爪の間に刺込んで爪を削してサウして又肉と皮との間へ割竹を刺すのです、ソレは十本の指とも順々に遣られるので實に血の涙を流して居るけれどもノルブ、チエ、リンは是れは自分の仕業であつて決してテモ、リンボ、チエ即ち自分の主人の命令で遣つた譯でないといふ強情を張つたさうです、所がイヤさうではあるまい、主人の吩咐したのであらうと非常に責めても肯かなかつたと云ふ、既にテモ、リンボ、チエが在世の時分に其苦みを受くる事を能く御承知になつて居るものですから全く自分が吩咐けたのである、彼は私の命令を奉じて遣つたのであるから彼に罪がないと云はれたと云ふ、ソレでテモ、リンボ、チエは執事に向つて「乃公はモウ斯う云つて白状したからお前も其通り白状しろ」と説教めるとノルブ、チエ、リンは「貴方は尊いラーマである、一時の虚で私を救ふやうな事をして呉れても逆も駄目であると云つて少しも承知せずに苦んで居る是れ丈の苦みを受けてもマダ白状しない、私が拉薩府に着いて居る時分にはそんな責苦を受けながら既に二年の星霜を経たと云ふ、ソレでも自分の主人に對し一言も斯うであつたと云はぬ所を見ると全くテモ、リンボ、チエは其事に與らなかつたかとも思はれますけれども或は又ノルブ、チエ、リンの爲めにはテモ、リンボ、チエは眞實の兄さんであると云ふ、シテ見ると其兄に對して罪の及ばぬやうに保護して自分が其罪を被つたも

のか知れませんが兎に角それ丈の非常なる苦みを受けながら、尙ほ以て自分が其拷問を忍んで居ると云ふ忍耐力と、自分の守るべき所を守つて居る點に於ては世人が實に罵詈雑言を極めるに拘らず私は竊に實に可哀さうなものだと思つて同情を表して居りました、其處に晒されて居る人達は皆ノルブ、チエ、リンの幕下の者で既に其事に關係あるボン教のラーマで死刑に處せられた者が十六人、其外流罪になつた人数は能く分りませんが大分に澤山あつたやうです、今此處に晒されて居るのは流罪になる者が半分で、其半分は三日或は七日晒されて後に柳の太い生棒で三百或は五百撲ぐられる者であります、私は現在の世の中に地獄が現はれて居るかの如く思はれ其人の心事を察して氣の毒に思ひつゝ、向ふの方に廻つて参りますと、釋迦堂の南、西の隅の日常りの好い處、最もバルコルの中の道の廣い處であるが其處の石の上に
美しい貴婦人の晒し者 が居る、其貴婦人は矢張り前に見た如く三尺四方の厚い首枷を箝められて居る、其首枷が柔弱い貴婦人の肩を押へ付けて如何にも苦しうに見えて居る、デ頭には小さなブータン製の山藪の赤い頭掛を懸けて少し俯向き心になつて眼を閉つて居られるです、其端には此貴婦人を警護して居る巡査のやうな者が三人許り居る、麥焦しを喰はせるものと見えて麥焦しの入物が其端にある、又差人物と云ふやうな譯と見えて少し良い食物も其處に置いてあります、其食物は一々人から喰はして貰はなくして自分の手は矢張り手錠を下されて居るから勿論喫べ

ることは出来ない、斯る柔弱い尊い婦人は誰であるかと云ひますと是れは此西藏では一番舊い家としてサウして貴族中でも最も利者として世人の尊崇を受けて居るドーリンと云ふ名家の令嬢であつたです

第八十五回 刑罰の種類

貴婦人の罪状 其貴婦人はノルプー、チエ、リンの夫人になられた方です、其夫のノルプー、チエ、リンが石の牢の中に居られる前に少し寛かな牢に入つて居られた、其牢は牢番に少しの金を與へれば其處へ逢ひに行くことも出来る夫故に此夫人は何か御馳走を以て自分の夫に逢ひに行つて泣き悲みながらいろ／＼の話をせられた事が發覺して此夫人も矢張り牢屋の中に入れられて居つたが今朝牢屋の出口で柳の太い生棒で三百ほど嬌弱い臀部を打たれて歩けない程になつて居る、其苦しい中で此首枷を掛けられてサウして道端の石の上に晒されて居ると云ふ、モウ人事もドウやら無さうして實に見るからが涙が溢れるやうな次第であつたです、然るに尙ほ哀れを増しますのは其端に見て居る所の彌次馬連はかりてない、貴族らしい人達も一緒に其夫人の首枷に貼付けてある所の刑狀を讀み立て、居る、此女は斯う云ふ罪があつて幾つ／＼棒で打たれて此處で七日間の晒者、此

後は斯う云ふ處へ流罪になつて其島で又手枷、足枷で牢の中へ縛つて置かれるのであると云ふやうな残酷なる宣告状です、ソレも聲を發せずには讀むならば宜いが大きな聲で讀む許りぢやアない、憎らし氣に嘲つて居る「ザマを見やがれ、おのれが前に人を苛めて酷い事許りしやがつたから今日のザマを見ろ」と云ふやうな口調で野次馬連は罵り貴族達は冷笑して居る其様は大に其不幸に落ちたのを見て却て快樂を得たやうな顔をして居る、其薄情さ加減、其憎むべき舉動と云ふものは斯くも西藏人は不人情な者かと思つて實に怒らざるを得なかつたです、この今罵言をして居る人間所謂、冷笑つて居る人間は定めてノルプー、チエ、リン夫婦が總理大臣であつた時分にはヘイ／＼云つてお髯の座を拂つた奴に相違ない、サウ云ふ人間が此哀むべき有様を見て不便とも思はずに笑つて居るのを見まして私は實に人情の輕薄なることを坐ろに感じたです、よし罪があるにしても決して其人を憎むべきものでない、况や此婦人には何の罪もないのである、政治上の關係ある家と家との交際上から敵味方となつて居る其敵の壓制から罪なき夫人までが斯くの如き悲惨な目に遭つて居るのだと其内實を知つて居る者には如何にも氣の毒で堪へられない、デ道々感じつゝ一首の歌が出ました

咲きそむる花にちりゆく花にやよ

あはれくみしれ露たもつ身は

ソレで歸つて来て前大藏大臣に遇つて一鉢今日は斯くくの者を見て大に可哀さうに思つて歸つたがアリヤ一鉢ドウ云ふものかと尋ねたら「サアどうも氣の毒なとて御座います、實に威勢熾んな時分には空飛ぶ鳥も落ちる位のもので誰も指一本差して見る者もなかつたが今日はア、云ふ事になつて誠に氣の毒だ、殊にテモ、リンボ、チエと云ふ方に就て世人がいろく、惡口を云うて居る、イヤ女を拵へたの、斯う云ふ惡事を働いて居つたなどと云うて居る人もあるけれども私は實に自分ながら女を拵へる位の罪惡人であるから人の罪惡を見ることには實に鋭い、能く分るですけれどもテモ、リンボ、チエに對しては一の缺點を打つべき所もなかつたのであります、誠に其戒行は清淨であつて人を憫み救はるゝ點に於ても實に感心の至りであつた、只附添うて居る家來が悪かつた爲めに那んな事になつたので決して決して彼の方の意見から出たことではないと云ふことは能く分つて居る世人に對してそんな話は出來ないけれども内實はサウである」と委しく話されました一鉢

西 藏 の 拷 問 の 方 法

は極殘酷である、又其處刑も極野蠻の遺方である、獄屋と云ふやうなものもナカク此世からのものとは思へない程の處で先づ其拷問法の一つ二つを云ひますと先に云つた割竹て指の爪を剃すとか或は石で拵へた帽子を頭に載せると云ふ仕方もある、ソレは先づ始に一貫匁位の帽子を載せソレから又其上に同様の帽子を、段々五つ六つと載せて行くので始めは熱い涙が出て居る位ですが仕舞には眼の球が外へ飛出る程になつて了ふさうです、サウ云ふ遺方もある、

ソレから叩くと云ふた所で柳の太い生棒で叩くのですから仕舞にはお臂が破れて血が迸つて居る、ソレでも三百なり五百なり極めた丈の數は叩かなければ罷めない、尤も三百も五百も叩く時分には半で一寸休んで水を飲ましてから又叩くさうです、叩かれた者は逆も病氣せずには居らない、小便は血のやうな眞ッ赤なのが出来る、私はサウ云ふ人に藥を遣つた事があります、又そのお臂の傷坏も能く見ましたが實に酷たらしいものであります、獄屋も餘程樂な獄屋と云つた所が土塀に板の間の外には何にもない、彼の寒い國で何處からも日の射さないやうな、晝でも殆ど眞ッ闇と云ふやうな中に入れて居るので衛生も絲瓜もありやアしない、又食物も一日に麥焦しの粉を二握りづゝ一遍に與へる丈です、それ丈では逆も活きて居ることが出來ない、ソレで大抵獄中に入れば知己が差入物をするのが常例になつて居る、其差入物でも牢番に半分以上取られて了つて自分の喰ふのは極僅になつて了ふさうです、刑罰の一番優しいのが罰金、答刑、ソレから

眼 球 を 抉 抜 して

取つて了ふ刑、手首を切斷する刑、ソレも直に切斷しない、此兩方の手首を紐で括つて凡そ半日程小供が寄つて上げたり下げたりして引ツ張つて居るです、スルと仕舞には手が痺れ切つて我が物か人の物か分らなくなつて了ふさうです、其時に人の見て居る前で切斷して了ふのである、是れは多くは泥棒が受る、五遍も六遍も牢の中に入つて來ると其手首切斷の刑に掛つて了ふ、拉薩府の乞食にはサウ云ふ刑に處せられたのが澤山ある、尤も多いのが眼の球を抉抜か

れた乞食、ソレから耳刺の刑と鼻刺の刑、是等は姦夫姦婦が遣られるので、良人が見付けて訴へると其男と女がサウ云ふ刑に遇ふとがある、又西藏では妙です、訴へを起さずに直に其良人が怒つて其男と女の鼻を切取つても詰り政府に代つて切取つたのだからと云つて自分が罪を受けると云ふとはない、流罪にも二通りある、或地方を限つて牢の中に入れて放任して置く所の流罪と又牢の中に入れて置く流罪とがある、ソレから

死刑は水攻 にして殺すんですソレにも二通りある、生きながら皮袋に入れて水の中に投げ込んで了ふのもあり、又船に乗せ河の中流に連れて行つてサウしてソレを括つて水に漬け石の重錘を附けて沈めるのです、暫く沈めて置いて十分も経つと上に擧げ尚ほ生きて居ると又沈めてソレから十分許り経つて上げて見るのですがソレで死んで居れば宜いが生きて居ると又沈めるサウ云ふ工合に何遍か上げたり沈めたりして能く其死を見届けてから首を切り手足を切り五體放れくにして流して了つて首だけ此方に取つて來るのです、デ三日或は七日晒し者にするもあり或は晒さずに其首を瓶の中に入れてサウ云ふ首許り集めてある堂の中に投げ込んで了ふのもある、其堂と云ふのは浮ばれない堂と云ふ意味で其處へ首を入れられるとモウ一遍生れて來ることが出來ないと云ふ西藏人の信仰から斯云ふ残酷な事をするのです

第八十六回 驚くべき葬儀

無邪氣な雪合戦 是等の刑罰はドウも佛教が行はれて居る國に似合はぬ實に残酷な遺方であります、モウ殺して了へばソレで罪が消えて了ふのであるからサウ云ふ意味で罰しなればならんと思ふのに未來の觀念まで制限すると云ふのは實に刑罰の法則に背いて居るであらうと思ふ、實に野蠻の遺方である、斯う云ふ残酷な事はまだナカク澤山ありますけれども此位にして置きます、丁度拉薩府に十月中頃まで居りましたが勉強の爲めにセラに歸つて來るとに成りました、デ大臣から送られた馬に乗つてソロ／＼歸つて來ますと其日が丁度前夜から少しく雪が降り積りて居りましてまだ道には大分雪が積つて居ります、ソレが初雪なんです、拉薩府を離れシヨンケー、ラムカー(坊主道)を通つてセラへ着く半哩ほど手前の處に河が一筋ある其河は冬は水がないので矢張り其河の中にも雪が積つて居ります、スルとセラ寺の小僧が五六人寄集つて一生懸命に雪合戦を遣つて居ります、何處も同じ事で小僧達には餘程面白いと見えて無邪氣に我を忘れて戰つて居る有様は無我に活潑の面目を顯はして居るので坐に床しく思はれたです、小供と云ふものは實に罪のないもので師匠に叱られる事のない場合には斯う云ふ風に面白く我を忘れて遊んで居るのがなか／＼愉快な



死 體 を 解 剖 す

御座いませう私は其様を見て一首を口吟み
ました

白雪をなげつゝ童ゆきあひて

雪白妙にゆきつとけつゝ

舊知に邂逅す ぞ立ッて見て居りま

すと後の方から大の男が一人やッて来まし
た、其男が私の乗馬して居る下から覗き込
んでジーツと眺めて居る、何を眺めて居る

のか知らんと思ッて其男の顔を振向いて見ますと其男は紛ひもなく西北原でマナサル湖の邊を共
に巡禮して居りました彼の兄弟三人の中の一番の弟で、私の横面を撲飛して倒した男なッてす、
其男は私が如何にも以前の如き詰らない巡禮でなく堂々たる貴族の風をして馬に乗ッて居るのを見
て大いに怖れたかのやうに私の視線をそらして向ふに進まうとしました、ソコで私は呼止て「お前
は私を忘れたか」ナアに忘はしな「ソレぢやア俺の處に一緒に来るが好い」「お前は何處に行く
か」セラに行く「それじや私の寺へ行くのだから一緒に来い」と云ッて自分の舎へ連れて来ました
小僧に吩咐けて出来る丈の御馳走を拵へさせて其男に喰はせ其上家苞物などを拵へて、「先年はい



ろく厄介になつて有りがたい」と禮を云つて還して遣りましたが、歸りしなには禮拜して何やら罪を悔いたやうな様子を顯はして涙を流しながら歸つて行きました、其時に其の男の語に兄弟三人離れくになつて居つたけれども後に一緒に成つて安全に故郷に歸つて皆無事で暮して居ると云ふことでありました、夫は扱置き今度は丁度セラに問答が十四五日あるものですから今度こそ充分問答を遣つて見やうと云ふ考で其舎に住んで居りますと私の知合の人が死にまして、其葬式を送つて行かなければならん事になつた、ソコで其葬式を送つて参りましたが

不可思議なる葬式

コ、に一大不思議なる世界に殆ど例があるまいかと思はれる所の葬式を見ました、ソレは屍體は棺に入れるでもなければ、又壺へも入れない棒を二本横に並べて其を縦にして其棒に又小さい棒を二本横たへて其棒を網のやうに搦み付け其上に敷物を敷いて屍體を載せ其屍體の上へ白い布片を被せた儘で人が荷つて行くんです、葬式の門出をしますにも今日死んだから直に明日出すと云ふ譯に行きませぬ、コトニよると出せる場合もありますけれども多くの場合は三日とか四日とか經つてからです、ナゼならば葬式を出すにも日の吉い凶いがあつて其日を能く見定めてからドウ云ふ方法の葬式にしやうか、此屍體はドウ始末を附ければ好いかと云ふことをラーマに尋ねなければならん、サウするとラーマは委しく書物を見、且つち經は何々、幾日の何時頃に此屍を門出して水葬にしるとか、或は火葬、土葬乃至は鳥葬にしると皆一々指圖を待たなければならんからです、西藏の所謂鳥葬と云ふのは佛法の方では風葬と云ふもので、西藏では屍骸をチャ、ゴエ(秃鷲)に食はせるのを以て一番良い葬り方として居るです、其次が火葬、水葬で一番悪いのが土葬である、土葬は通常の病氣で死んだ時分には誰でも遣らないです、西藏人は非常に土葬を嫌ふ、只天然痘で死んだ時分だけ土葬にします、ソレは鳥に與れば鳥に傳染の憂があり又河に流せば他に傳染の憂があると云ふ所から許されないので火葬はマア良い方ですけれども殊に薪の少い處でもありマサカ屍體を犛牛の糞で焼く事も出来ませんからソレで火葬は餘程上等の人でなければ行はれない、水葬は大な河の邊では大抵行はれるです、ソレも屍體其儘河の中に投り込まない屍體の首を切り手を切り足を切りみな切放して流すです、サウすると彼方の洲に止り此方の崖に止るともなく魚も亦食ひ易いからといふ事であり、空葬と云つて空に葬るのは所謂鳥に食せるのでコリヤ實地私が見た所でお話しませう、此四通りの葬り方に就てドウ云ふ風にして好いかとラーマに尋ねるので、ラーマは其人相應の指圖をします、何て此四通りの葬り方があるかと云ふと印度哲學の説明では人體は地火水風の四つより出来て居ると云ふ、夫故此四つに歸る道があるので、土に歸るのは地ソレから水、火として鳥に食はすのが即ち風に歸るのであると云ふ説明なんです、大抵マア僧侶は皆鳥に食はせる、只法王とか或は第二の法王及び尊貴化身のラーマ達はコリヤ別物であつて普通の僧侶は鳥に食はせませぬ、私が今度送つて参ります葬儀も此鳥葬で、先づセラの大學

らんからです、西藏の所謂鳥葬と云ふのは佛法の方では風葬と云ふもので、西藏では屍骸をチャ、ゴエ(秃鷲)に食はせるのを以て一番良い葬り方として居るです、其次が火葬、水葬で一番悪いのが土葬である、土葬は通常の病氣で死んだ時分には誰でも遣らないです、西藏人は非常に土葬を嫌ふ、只天然痘で死んだ時分だけ土葬にします、ソレは鳥に與れば鳥に傳染の憂があり又河に流せば他に傳染の憂があると云ふ所から許されないので火葬はマア良い方ですけれども殊に薪の少い處でもありマサカ屍體を犛牛の糞で焼く事も出来ませんからソレで火葬は餘程上等の人でなければ行はれない、水葬は大な河の邊では大抵行はれるです、ソレも屍體其儘河の中に投り込まない屍體の首を切り手を切り足を切りみな切放して流すです、サウすると彼方の洲に止り此方の崖に止るともなく魚も亦食ひ易いからといふ事であり、空葬と云つて空に葬るのは所謂鳥に食せるのでコリヤ實地私が見た所でお話しませう、此四通りの葬り方に就てドウ云ふ風にして好いかとラーマに尋ねるので、ラーマは其人相應の指圖をします、何て此四通りの葬り方があるかと云ふと印度哲學の説明では人體は地火水風の四つより出来て居ると云ふ、夫故此四つに歸る道があるので、土に歸るのは地ソレから水、火として鳥に食はすのが即ち風に歸るのであると云ふ説明なんです、大抵マア僧侶は皆鳥に食はせる、只法王とか或は第二の法王及び尊貴化身のラーマ達はコリヤ別物であつて普通の僧侶は鳥に食はせませぬ、私が今度送つて参ります葬儀も此鳥葬で、先づセラの大學

から出て東へ向つて行くと河の端に出る、其河邊を北へ廻り山の端に附いて二三町も行きますと同じく河端で然かも山の間に高さ六七間もあらうかと云ふ平面の大きな天然の巖があります、其平面の處は廣サ十五六坪もある、其處が即ち墓場として、墓場のグルリの山の上或は巖の尖には怖ろしい眼つきをした大きな坊主鷲が澤山居りますが夫等は人の死骸の運んで来るのを待つて居るので、先づ其死骸の布片を取つて巖の上に置く、デ坊さんが此方で太鼓を敲き鉦を鳴して御經を讀み掛けると一人の男が大きな刀を持つて

死骸の料理

先づ其の死人の腹を截ち割るです、サウして腸を出して了ふ、ソレから首兩手、

兩足と順々に切落して皆別々になると其屍を取扱ふ多くの人達(其中には僧侶もあり)が料理を始めます、肉は肉、骨は骨で切放して了ひますと峰の上或は巖の尖に居る所の坊主鷲は段々下の方に降りて来て其墓場の近所に集るです、先づ最初に太腿の肉とか何とか良い肉を遣り出すと澤山な鷲が皆舞ひ下つて来る、尤も肉も少しは殘してあります骨はドウして其チャ、ゴエに遣るか云ふに大きな石を持つて来てドシ〜と非常な力を入れて其骨を叩き碎くです、其碎かれる場所も極つて居る、巖の上に穴が十許りあつて、其の穴の中へ大勢の人が骨も腦蓋骨も腦味膾も一緒に打込んで細く叩き碎いた其上へ麥焦しの粉を少し入れてゴタ混ぜにした所の團子のやうな物を拵へて鳥に遣ると鳥は旨がツて喰つて了つて残るのは只髪の毛だけだす

食人肉人種の子孫

扱その死骸を被うて行つた所の片布其他の物は御坊が貰ひます、其御坊

は俗人であつて其仕事を僧侶が手傳ふのです、骨を碎くと云つた所がなか〜暇が掛る者ですから矢張り其間には麥焦しの粉も食はなければならん、又西藏人は茶を飲み詰めに飲んで居る種族ですからお茶を澤山持つて行きます、所が先生等の手には死骸の肉や骨碎や腦味膾が澤山附て居るけれども一向平氣なものでサアお茶を喫れ、麥焦しを喫れ」と云ふ時分には其御坊なり手傳たる僧侶なりが手を洗ひもせず只バチ〜と手を拍つて拂つたさきりて茶を喫ひてず、其腦味膾や肉の端切の附て居る汚ない手でデキに麥焦しの粉を引ッ掴んで自分の腕の中に入れて其手で捏ねるです、それから自分の手に附て居る死骸の肉や腦味膾が麥焦しの粉と一緒になつて了ふけれども平氣で食つて居る、ドウも驚かざるを得ないです、餘り遣方が殘酷でもあり不潔ですから「そんな不潔な事をせず、手を一度洗つたらドウか」と私か云ひましたら「そんな氣の弱いこと坊主の役目が勤まるものか」と斯う云ふ挨拶、デ「實は是れが旨いのだ、汚ないなんて嫌はずに斯うして食つて遣れば佛も大いに悦ぶのだ」と云つて些つとも意に介しない、如何にも西藏と云ふ國は昔は羅苦又鬼の住家で人の肉を喰つた國人であつて、今の人民も其子孫であると思つて云ふ事ですが成程羅苦又鬼の子孫たるに愧ぢない所の人類であると思つて實に驚いたです

第八十七回 奇怪なる妙薬

法王及び高僧の葬儀 葬式が済んで歸りますと家では矢張りその葬式の間もお経を讀んで居る、デ肉粥とか或は卵羹とかを拵へて立派な御馳走を喰はせませす、僧侶であれば酒がないだけで、在家では皆そんなものに酒を添へて出します、扱是れよりは法王とか或は第二の法王、高等なる化身のラーマのお逝れになつた時分にはドウ云ふ風にして葬るか云ふことに就て述べませう、貴いラーマがお逝れになると大きな箱を拵へ其箱の中へ西藏の自然の沼鹽を入れ其上に死骸を置くデ其グルリも亦すツかり鹽で詰めて了う、其詰めたり何かする間にも笙箏の如き笛を吹き太鼓を撃ち誠に殊勝なる經文を唱へてなか／＼有がたく見えて居ります、死骸を収めた箱は堂の中に据ゑて大抵三月位は其處に置いて活きた人に對して供養をするが如き禮式を行ひ而して其弟子達は少しも間を缺かさずに三人或は四人位づつて日夜お経を讀んで居るです、其棺の前には西藏風の純金の燈明臺へバタの燈明、并に花のある時分には花、ソレから又銀の七ツの水器には阿伽と稱ふる清水其他澤山な供養物も供へてある、ソレへ詣る者は皆カタ一つと幾分の錢を添へ上げる、デ三月或は百ヶ日經つ其死體の水分は楯に吸取られて其死體は全くカラ／＼になつて了ふ、此鹽は日本の鹽

と違つて餘程曹達の類も含んで居る、外に何の成分が入つて居るか、私は化學上の取調をしないから分りませんけれども確に曹達が入つて居る、デ其中から死體を出しますと、最早カチ／＼になつて全く木で拵へたもの、やうになつて居り、腹杯もすツかり引込み眼も凹ちて了つて水氣は少しもありません、ソコで其死體を出して良泥と白檀の木を粉にした物とを一緒に捏ねて其瘦せ落けた死體に塗るのですが、ソレには何か西藏の外の藥も混つて居るです、ソレですツかり舊の通りに先づ顔を拵へソレから身體も拵へて全くの立派な木造のやうにしてから金箔を置きますので、チャンと出来上りますとソレを像としサウして其堂の中に又別に七寶で拵へた塔を立て其塔の正面の中央に厨子形やうな物を拵へて其厨子形の中へ今の

死骸の像 を祭り込みます、サウ云ふ風に出來上つて居る堂は現にシカチエのタシレンブー寺には五つあつて其屋根は皆金色の光を放つて居る、所謂金鍍の屋根で支那の二重の御殿屋根風に似て居るです、勿論其裝飾、堂の大小及び塔の飾り(金飾り或は銀飾り)もラーマの階級に依て違ひがあります、此像は永久に祭られて人民も其處へ拜みに行けば僧侶も亦拜みに行くです、だから或支那人が笑つて云ひますには「西藏人は土葬が嫌ひで、土葬をするとか何か地獄に落ちた程に悲むが一番エライ法王とか或は第二の法王とか云ふやうな者は矢張り土葬ではないか、其死體を鳥に與るてもなければ水の中へ葬りもしない、チャンと鹽漬にしてサウして其乾いた死體を泥で塗るのである

から矢張り土葬である」と云ふ、一寸面白い話です、デ其棺の中へ入って居った鹽です
 其鹽は中々尊いものにて一寸普通の人民は其鹽をお貰ひ申すことが出来ないうなかく金を出
 しても容易には廻つて来ない、傳手があれば先づ貰へると云つたやうなもので、其鹽は貴族と僧官
 の重なるものに分たれる、尤も大なる檀越とか或は殊更に關係ある大商業家等は幾分か貰へるで
 す、ナゼ其鹽が尊いかと云ふとラーマの有りがたい汁が其鹽に吸込まれて居るからソレで尊いと云
 ふ、此鹽は藥にもなるとかて、風邪をひいた時杯或は其他の病氣の時分は其鹽を呑み湯でも飲みま
 すとチキに治ると申して居りますが如何にも妙な藥です、其藥と云へば一つ思ひ出しましたが西藏
 には

奇々妙々の藥

がある、其藥の本來を知つた者は恐らく西藏人を除く外誰も吞むことが出来
 ぬだらうと思ひます、ソレは西藏法王或は第二の法王と云ふやうな高等なるラーマ達の大便は決し
 て棄てない、又小便も決して棄てない、大小便共に天下の大必要物である、其大便は乾かしていろ
 くな藥の粉を混ぜてサウして法王或は高等ラーマの小便でソレを捏ねて丸藥に拵へ其上へ金箔を
 塗るとか又赤く塗るとかして藥に用ひますので此藥にツア、チエン、ノルプー(寶玉)と云ふ奇態な
 名を付けます、ソレは決して賣出すのではない、なか／＼ソレを貰ふことさへ容易に出来ません先
 つ好い傳手があり金を澤山上げて漸く貰ひますので、貰つた所で西藏人は非常な病氣になつたと

か或は臨終の場合に其藥を一つ飲むのです、ソレで快くなれば其有難味が利いたと云ひ假令ひ夫れ
 が爲に死んだ所が西藏人は満足して「誠に有りがたい事だ、兎も角寶玉を飲んで死んだから彼の人
 も定めて極樂に行かれるだらう」と云つて譽れのやうに思つて居ります、實に奇々妙々の風俗で、
 西藏國民が實に汚穢極まると云ふことも斯う云ふ事に依ても知り得ることが出来るのでありませ
 う、併し斯う云ふ材料で寶玉が出来て居る杯と云ふことは一般人民は殆ど知らないのて此藥は法王
 が秘密の法で拵へた極有りがたいものであると云ふことを知つて居る丈けて其藥の眞面目の如何は
 法王の宮殿に入する官吏或は官僧其外夫等の人々から聞傳へて所謂西藏の事情に通じて居る人間
 が知つて居ると云ふ丈けて御座います、

再び大臣邸に寓す

十一月月上旬に又拉薩府へ来て前大臣の別殿に住んで居りましたが其
 時分には現任大臣も少しは閑暇でした、此方は此家の尼僧の甥になるので、先に申したやう
 に極話も温和な方で、口數も餘り利かぬ方です、けれども忙しい中にも歸つて来ると始終前大臣と
 尼僧と私と四人で何時も話が始まります、又折々は私の方から現任大臣の室に出掛けて話をすること
 もあり、其中に英國の女宣教師の事に就て話が出た事がありますから一寸その話を致しま
 せう

第八十八回 西藏探検者

女宣教師 或時の話に現任大蔵大臣が云はれますには「ドウも英國人は奇態だ、ナゼ彼様に私の國の中を見たがるのであらうか、譯の分らぬ位である、丁度今から八九年前の事であつたが支那領と法王領の境目であるナクチュエーカと云ふ處まで英國の婦人が二人の下僕を連れて我國へ入る目的で來られた」と斯う言出したです、其女はミス、テラーと云ふ英國の女宣教師で支那の地方から北部の方を経て拉薩を踏えダーチリンへ出る目的で來たので、大臣はミス、テラーの名を知らなかつたけれども私はダーチリンに居る時から此女丈夫に就ては聞いて居つたこともあるし、其女の道案内をして行つた男と私はダーチリンで不圖した事から親しくして居ました、ですから私は其事の一伍一什を知つて居ましたけれどもサツ云ふ顔も出来ませんから珍らしい話のやうに聞いて居りますと大臣は話を進めて「ドウも其婦人がナクチュエーカまで來た所が土人の爲めに差留められた、幸に其土人の酋長は非常に慈悲の深い人であつたのでマア土人の爲めに殺されなかつたけれども其地方からドウしやうかと云つて政府の方へ伺つて來た、其時に政府の方から私と私の家來二人を彼地に差向けることになつた尤も外に荷持とか馬とか云ふ者は凡そ三十人ばかりも行つたけれど

も詰り重立つた者は三人で其主任者は私であつた、デ先方へ着いて聞いて見ると話は些々とも分らない、其婦人は西藏の言葉を使つて居るけれども拉薩府の言葉でないからドウも話が能く分り難い、けれども能く心を鎮めて充分に聞いて見ると大分に分つて來た、デ其言ふ所に依ると實は佛法の有りがたい事を知りたい爲めに此國へ來たので是れから拉薩の靈地に行つてソレからダーチリンの方に出たいのであるからドウか許して呉れと云ふことであつた、夫れのみならず支那皇帝陛下の免状を持つて居ると云つて其免状を示して是非内地へ入れて呉れろと云ふからドウも貴方の情を察すると入れて上げたいけれども私は法王政府の命令を受けて居るから絶對的に入れることが出来ん、若し入るならば必ず殺さるゝ程の難儀に遭ふ、此方では無論その保護はしない、ソレで宜ければ入つても宜いけれどサツ云ふ事をして國際上要らない關係を起すよりは能く説諭をして還すやうにしろと云ふ命令を受けて居るから決して入れることは出来ない、お氣の毒だが是れから歸つて貰はなくちやアならんと、斯う私が優しく言つた所がなか／＼肯かないで段々迫つて來た、ソレが一日二日でない、四五日も私に迫つた、ドウも仕方がないから私はそんならば貴方は内地へ死に入る積りか迎も命を全うして入ることは出来ん、ソレを知りつゝ無理に入らうと云ふのは詰らんぢやないか、ソレよりか相當の保護を加へて遣るから元と來た道へ歸るが宜からう、強ひて入りたいたと云ふならばソリヤ貴方の御勝手である」と決答に及ぶと其婦人は「貴方の國は支那皇帝の配下ではないか、

然らば支那皇帝の命令状を持つて来た者は必ず此處を通さなくちやアならん譯ではないか」と斯う云つて理屈詰めに出来た、勿論我國は支那皇帝の配下であるけれども凡ての事を支那皇帝から命令を受けない特に此

鎖國主義

の如きに至ては假令ひ支那皇帝が此國に兵を向けて外國人を入れなければならんと云うても決して入れることをしないのは我國の主義であると斷言し又其下僕の者は西藏人であるから此方に引取つて相當の處分をしなければならん、併し後に戻るならば必ずしも其處分をせねばならんと云ふのではないと云つて段々説諭したので其後半日程経てトウ／＼歸ると云ふことになつたけれども彼等は途中で泥棒に遇つて物が無くなつて大分に困つて居る様子であるから相當の贈物をして後に還すと云ふことにしたと云ふ一伍一什の物語をしてソレから「ドウ云ふ譯でせう、外國人は斯んなに來て見たがるのは」と云ふ話、デ私は「サアどうもソレは分りませんが一體昔から此國へ外國人が來て居るぢやアありませんか」と尋ねると其事はなか／＼現大臣は能く知つて居られて「今より六百年程以前と云ひ掛けました」

外國の西藏探検者

ソレを此方て想像しますと一千三百二十八年にホルデノーンの僧侶でオリックと云ふ人が始めて此國へ入つたてすけれども是れは天主教の布教が目的であつたてすが其目的は達せられなかつた、詰り西藏ではいろ／＼奇態な聖書に書いてあるイエス、キリストの奇蹟

のやうな事を遣る僧侶が澤山あつたてす、ソレて此事柄を凡て書留めて持つたけれどもサウ云ふ事を世間に公にしますとキリスト教に關係を及ぼすものだからソコて其の報告書を焼いて了つて幾分の話も傳はらなかつたと云ふことてす、然るに世間の學者の中には斯う云うて居る人がある、オドリック其人は秘密國に入つたけれども其秘密國の有様を書留めた事に誤りがあつて其誤りを後世に傳へるのが嫌だと云ふ所から其原稿を焼いたと云ふ説を爲す者がある、世人は大抵其説のみを信じて其時の西藏の現状は耶穌教よりも奇跡杯が以上にあつたと云ふ事の爲めに其報告書が焼かれたと云ふとを知らない、夫故に其後ローマン、カンリックの法王政府では支那の方には盛に布教しましたけれども到底西藏は天主教の力の及ぶ所でないといふ決定になつて西藏には布教しないと云ふことになつたさうてす、其後一千六百六十一年にブリーベールとドルブイッル、こりや確か佛蘭西人と思ひますが此二人の兄弟は西藏の拉薩府には着かぬやうてすがドノ邊までか入つたらしい、

歐洲人ではたつた一人

印度から入つて西藏の拉薩府を通過して支那に出た人がありますソレはヴァンデブツテと云ふ人てす夫れからソーレン、ヘスンチグと云ふ人が印度の太守であつた時分に印度と西藏の間に貿易を開かうと思つて一千七百七十四年にジョルジ、ボーグルと云ふ人を使者として西藏に遣はした、ソレは所謂公使のやうなもので其夫人も共に行かれた、此人は拉薩まで入ることが出来ないて第二の府のシカチュと云ふ處まで行つて其處に止つて居つたてす、其シ

第八十九回 鎖國の原因

探検家の失敗 其後一千八百八十八年合衆國北京駐在の公使官書記でロック、ヒールと云ふ人が矢張り進入を企てたけれども駄目でありました、ソレから耶蘇教會の宣教師の中で大分に澤山企てましたが夫等も皆駄目でありました、何でも其間に探検を企てた人の數は私の知つて居るだけで廿五六名御座います、若し不確な者をも合して云ひますれば四五十名はあるだらうと思ひますが先づ確かなのは今云つた通り、尤も是れまで日本の雜誌とか新聞等に出て居ります中には大變妙な事間違つた事を書いて居られるのがある、西藏の事に就ては何にも知らんからと云うて自分が好い加減な想像で以て書物を解釋して書くものですからいろ／＼な間違ひが起るので、其一例を申せばチーマーと云ふ人は西藏語と英語の對照字典を始め拵へた人でありましたが、此人は西藏の西北の境に在る英國領のラタクと云ふ處に十年餘も住んで居りました、ソレでラタクのラーマに就て西藏語を學び或は其人の説明を聞いて始めて不完全ながらも字典を拵へました、けれどもドウも西藏の内地に入つて見ないと靴を隔て、痒さを搔くと云ふ狀に堪へぬと云ふ所から内地へ入らうと云ふ考を起したがラタクから西藏の内地に入ることは堅く閉ぢられてあるからドウも行くことが

出來ない、事に依ればダーデリンの方から行けば入れるだらうと云ふので其時分にダーデリンに來られた、然るに惜いかなダーデリンの近傍の林の中に在る所の瘴毒に中てられてドウ／＼死んで了つたです、是れが一千八百四十年頃の事で、現に(ダーデリン)の近傍に此方の墓が残つてあります、然るに或新聞或は雜誌記者拵が此人は西藏の拉薩府に入つて西藏語を研究してサウして字典を拵へたと云うて居ります、又其後イエスキート云ふ人も西藏に行かずに矢張りチーマーの字典を拵としてモウ一つ完全な字典を拵へました、此人も實際西藏に行かないのですけれども或人は確に彼は西藏に行つたとか或は又西藏の拉薩府に長く止まつて居つたと云ふやうな事を澤山書いてある者もあります、コリヤ日本の新聞及び誌雜誌記者許りを咎めることも出來ません、西洋でもサウ云ふ嘘が澤山傳つたものと見えて折々確實でない學者の著書の中にはサウ云ふ誤まつたことを澤山記されてあるやうに見受けます、斯くの如く西藏進入を企てた者が澤山あつて其他マダちよいちよい國境を窺ふ探偵は英國からも露西亞からも澤山に來たやうです、ソレで西藏人は非常に心を悪くしました、サウでなくても山間の人民で殊に猜疑心の深き國民で御座いますから尙更ら疑ひを深からしめました、元と西藏人は外國人に對しては誠に能く取扱ふ性質の者でありましたけれども支那政府の政略に依て「お前の國へ外人を入れると佛法を滅されて耶蘇教を擴められるから用心しなくちやアならん、必ず堅く閉ぢなくちやアならん」と持掛けました、其事を正直な西藏人は本氣に受けて鎖國

カチエまで着いた所の日記杯があつて其書物は今でも残つて居るです、其人が歸つてから一千七百八十一年に又ワレン、ヘスチングがキャプテン、ターナと云ふ人を使者として遣はした、其人は二ケ年居つて印度に歸られたが其時分から印度と西藏との貿易は盛になつて來たです、けれども其後ワレン、ヘスチングが印度の太守を辭して英國に歸つて後はソレが立消のやうな工合になつて全く交通も殆どない位になつて來たです、所で其時分に矢張り耶蘇教の宣教師等が西藏の拉薩府迄は行きませぬけれども、其近郷まで入つて耶蘇教を布き佛敎を破ることに努めたので西藏政府は大分に用心するやうになつたです、其後一千八百七十一年に露西亞の大佐でブレゼバルスキーと云ふ人が東の方のカム地方から入つて拉薩府までは五百哩の處まで着きましたが其處から追還されて了つた、蓋し是れは支那領の西藏を旅行した丈けて法王領の地方へ來た所で止められたのであらうと思ふ、併し其人はなか／＼遣手と見えて今度は北の方から入つたらしい、其時は丁度拉薩府まで百七十哩の處まで行つて又差留められたさうです、是れも矢張り北の方で云へば丁度支那領と法王領との境まで行つたので法王領の内に入ることには出來なかつたのです、一千八百七十九年に英人のキャプテン、キルと云ふ人がタツアンルーの方からして西藏に入つて行つたけれども是れも矢張り支那領と法王領との境目即ちバー、リタンと云ふ處まで行つて追還されて了つたです、我國の能海寬師も其處まで行つてドウやら追還されたやうです、其事は私の親友なる現任大藏大臣も日本と云ふ

國から坊さんが二人出て來てバー、リタン迄入つたけれども坊さんか何か話が駁と分らんので其處から追還して了うたと云ふ話をされたです、ソレで一千八百八十一年及び八十二年に印度人て即ち私の師匠である

サラット、チャンドラ、ダース　　し云ふ方が西藏政府からして巧みなる方法に依て西藏に進入する通行券を得たです、八十一年に一遍第二の府シカ、チエまで入つて二箇月許り忍んで歸つて來ました、テ其事が英國政府に報告になりますと今度は又八十二年に行くことに成りました、其時にも矢張り通行券を買つて又シカ、チエ邊へ着き其處から拉薩府に行かれたです、なか／＼此方は注意の深い人て決して日中抔外に出られた事は餘りなかつたさうです、假令へ出られても人に見られないやう自分も人を見ないやうに能く用心をして止むを得ない場合には出られたさうですけれども平生は寺の一室に閉籠つて居つて只自分が研究する事だけして居られたさうです、此方は拉薩府には二十日許り居られたやうに聞いて居ます、ソレから彼方此方取調をしたさうですが丁度ダイチリンを立ててから歸つて來るまでが一年足らず、其間に取調を済まして了つたさうです、其後先にも一寸申したやうに西藏に於て大疑獄事件が起り而してサラット師が通行せられた關所なり村なり師を泊めたる家々は皆財産を沒收され情の重いは死刑に處せられると云ふ大騒動の起つた事は既に述べた通りでありますが其後西藏と云ふ國は全くの鎖國になつて了つたんです

第八十九回 鎖國の原因

探検家の失敗 其後一千八百八十八年合衆國北京駐在の公使官書記でロツク、ヒールと云ふ人が矢張り進入を企てたけれども駄目でありました、ソレから耶蘇教會の宣教師の中で大分に澤山企てましたが夫等も皆駄目でありました、何でも其間に探検を企てた人の數は私の知つて居る丈けて廿五六名御座います、若し不確な者をも合して云ひますれば四五十名はあるだらうと思ひますが先づ確かなのは今云つた通り、尤も是れまで日本の雜誌とか新聞等に出て居ります中には大變妙な事間違つた事を書いて居られるのがある、西藏の事に就ては何にも知らんからと云うて自分が好い加減な想像で以て書物を解釋して書くものですからいろ／＼な間違ひが起るのです、其一例を申せばチローマーと云ふ人は西藏語と英語の對照字典を始め拵へた人でありましたが、此人は西藏の西北の境に在る英國領のラタークと云ふ處に十年餘も住んで居りました、ソコでラタークのラーマに就て西藏語を學び或は其人の説明を聞いて始めて不完全ながらも字典を拵へました、けれどもドウも西藏の内地に入つて見ないと靴を隔て、痒さを搔くと云ふ歎に堪へぬと云ふ所から内地へ入らうと云ふ考を起したがラタークから西藏の内地に入ることは堅く閉ぢられてあるからドウも行くことが

出来ない、事に依ればダーヂリンの方から行けば入れるだらうと云ふので其時分にダーヂリンに來られた、然るに惜いかなダーヂリンの近傍の林の中に在る所の瘴毒に中てられてドウ／＼死んで了つたです、是れが一千八百四十年頃の事、現に(ダーヂリン)の近傍に此方の墓が残つてあります、然るに或新聞或は雜誌記者拵が此人は西藏の拉薩府に入つて西藏語を研究してサウして字典を拵へたと云うて居ります、又其後イエスキューと云ふ人も西藏に行かずに矢張りチローマーの字典を臺としてモウ一つ完全な字典を拵へました、此人も實際西藏に行かないのですけれども或人は確に彼は西藏に行つたとか或は又西藏の拉薩府に長く止まつて居つたと云ふやうな事を澤山書いてある者もあります、コリヤ日本の新聞及び誌雜誌記者許りを咎めることも出来ません、西洋でもサウ云ふ嘘が澤山傳つたものと見えて折々確實でない學者の著書の中にはサウ云ふ誤まつたことを澤山記されてあるやうに見受けれます、斯くの如く西藏進入を企てた者が澤山あつて其他マダちよいちよい國境を窺ふ探偵は英國からも露西亞からも澤山に來たやうです、ソコで西藏人は非常に心を悪くしました、元と西藏人は外國人の人民で殊に猜疑心の深き國民で御座いますから尙更ら疑ひを深からしめさせに依て「お前の國へ外人を入れると佛法を滅されて耶蘇教を擧められるから用心しなくちやアならん、必ず堅く閉ぢなくちやアならん」と持掛けました、其事を正直な西藏人は本氣に受けて鎖國

主義を獎勵して居りました、けれども今より廿二年前即ちサラット、チャンドラダース師が入って印度へ出て来るまではマダ鎖國とは云ふものゝ全然と鎖國には至らなかつたです、所が先生が印度に出て来てから其事の知れた後は

全國民舉つて巡査か探偵 の如くになつたのですから西藏に入ると云ふことは實に歐羅

巴人としては殆ど絶念しなくちやアならんやうな事になつたです、デ歐羅巴人は大抵顔色、眼付、髪の色までが違つて居るのみならず大仕掛に澤山な同勢、駱駝杯も澤山に引張つて来るものですか、直ぐ追遠されて了ふ、現にヘーデンと云ふ人も私が拉薩府に居る時分に何遍か西藏の北の境を侵して入つて來掛けたけれども何時も留められて仕舞にはトウ／＼歸つて了つた、斯う云ふやうに澤山な人が西藏を窺つて居るものですから「一體ドウ云ふ譯で外國人は此國を知りたいのだらうか、此國を是非取りたいのぢやアあるまいか」と云ふやうな疑ひを矢張り政府の人達も持つて居るです、尤も人民の言ふ所に依ると英國人が此國を欲しがるのは此國に金鑛山が澤山あるからだ、ソレ丈けが見込めて此國を欲しがつて居ると云ふやうな事を云つて居るです、私の考では英國はそんな小さな考ぢやアあるまいと思ふ、露西亞が西藏に下りて來て而して西藏を土臺にして印度に臨んだ時分には到底印度の安寧を保たれないことは明な數で御座いませうから恐らく其事を慮つて英國は西藏に對し深き注意を加へて居るのではあるまいかと想像されたです、デ現任大臣の話が面白い、國

を取られると云ふことは實に國の耻であるが尙ほ此宗教を滅せられると云ふことは我國に取つては實に言ふに忍びない國辱であるからド／＼までも防がなくなちやならん若しも我政府部内の者が互に反目して争つて居る此内訌を外國人が知つたならばデキに攻めて來るかも知れない、だから斯う云ふ事の知れないやうに旨く彼外國人等の進入を防がなくなちやならんと言ふ、昔時は西藏の法王政府ハ確に宗教の爲めに鎖國を獎勵して居つた、所が今は所謂

政略的鎖國 政略上からも鎖國を獎勵するやうになつたものですからサラット、チャンド

ラ、ダース師の事件發覺以來誰も外國人として西藏内地に入つた者がなかつたので御座います、扱現大藏大臣は私の師匠のサラット、チャンドラ、ダース師が來たことに就て段々いろ／＼な話をして「其後は實に我國も睡りを覺まされた、外人に對する注意力を非常に喚起された」と云うて居られたです、大臣との其時の話は其外いろ／＼の事も御座いましたけれども今記憶に存じて居るのがソレ丈けの事ですから其話はコ、て擱きます、其時分に私は前大藏大臣と一緒に拉薩府のリンコル(廻道)を廻りに行きました、リンコルは拉薩府の圖面に記されてあるやうに一番外部の拉薩府を巡る道なんです、此廻道は凡そ二里程ある、其道を一周しますと拉薩府内に在る所の凡ての佛及び法の寶即ち(經藏)を廻つた事になりますから非常な功德を積んだと云ふ譯になるのです、其廻り方にもいろ／＼ありまして、只歩いてズツと廻るのもあれば一足一禮で廻るのもあり、又三足に一禮

して廻ッて行くのもある、私と前大藏大臣と供の者一人と三人連でブラ／＼と其廻道を廻りに出掛
けて行きましたが、樂み半分は話をして廻ッて行きますので、大臣は誠にソロ／＼と歩まれて居る
けれども私は餘程急いで歩まないとドウしても平均が取れない、其等です大臣は非常に大きいから
私が一足半歩まなくちやア大臣の一足に足らないのです、大臣は緩々話して行かれるけれども私は
餘程急がなくちやアならんから中々辛いです

第九十回 不潔の都

犂牛の角の堀 其道筋の脇で丁度拉薩府の東に當ッて居る方に奇態な高塚がある、其高塚は
犂牛の角を積立て、拵へてあるのですが其角の数は幾百萬本とも知れない實に澤山なもので堀の長
さは一丁許りある處もあれば又半丁餘りあるものもある、又二丁許りの處もある、てすから其角の數
は何千萬本とも知れないです、其角の堀で固はれて居る中に犂牛を殺す處があつて其處で屠り殺し
た犂牛の角で此堀を拵へてある、私は此堀を見て實に喫驚した、勿論前にも見ない事はないけれど
も其日は殊に閑暇で心も自ら閑でしたからサウ云ふ事にも能く氣が付く、デ大臣にドウも犂牛の殺
されるのも大きなもので御座いますな」と云ひますと大臣は「ドウも可哀さうなものだ」と云ひな

から暫く歩いて行くと其高塚の門口があつて内を見ると犂牛が殺される爲めに三十正許り繋がれて
居る、デ向ふの方に一つ縛ッてあつていよ／＼今殺すと云ふ有様である、處が拉薩府では殺す度に
ち經の本を頭に載せて有がたい事を聞かして遣ると云ふこともない、ナゼならば拉薩府で犂牛を殺
し羊を殺す者は佛教徒ではない、支那人の回回教徒です、ソレが皆屠者であるだから彼の回々教徒
等は犂牛引導を渡さないで直に首を切落して了ふ、其殺す所を友達の大きな犂牛が恐ろしさうな眼
をして見て居る、實に其哀れな様を少しの間立ッて眺めて居りますと大臣の云ふには斯う云ふ有様
を見るとドウも肉は喰へない、誠に肉を喰ふのは罪が深いやうに思はれるけれども如何にも我々凡
夫は馬鹿な者で家に歸ると自分の食卓の前に肉がないと何にも喉へ通らない、此可哀さうな事を打
忘れて喰ふのだから實に我々は即苦又鬼の子孫に違ひないと云ッて懺悔しつゝ、話があつた、拉薩府
で殺される犂牛、羊、山羊の数は先にも一寸申した通り大變に多いです、デ其廻道には政府から道
造りが附けてあります、ワザ／＼大地へ頭を附けて禮拜して行く人がある位ですから道も可なりに
能く出来て居る注意して歩かないでも倒れるやうな氣遣ひはない、二けれども却て拉薩府の市街の道
の悪い事と云つたら仕方がない、高低の多い處で町の真中に深い溝が堀つてある、
溝は大小便の溜池 其溝には拉薩婦人の凡てと旅行人の凡てが大小便を垂れ流すと云ふ始
末で其縁には人糞が行列をして居る、其臭い事と云つたら堪らんてす、マア冬は臭ひもそんなに酷

くは御座いませんけれども夏になると實に其臭ひが酷い、ソレで雨でも降ると道のドロ／＼の上へ人糞が融けて流れると云ふ始末ですから其臭さ加減と其泥の汚ない事を見るから嘔吐を催すやうな有様、一體拉薩と云ふのは神の國と云ふ意味で所謂佛、菩薩即ち外護の神様の住處で非常に清淨な土地であると云ふ所から神の國と云ふ意味の名を附けられたのである、けれども其不潔な所を見ると確にバンデン、アーヂンヤが云はれた如く糞喰ひ餓鬼の都としか思へない、實に不潔なものです私は支那の不潔を屢々耳にしましたけれど恐らく糞の中、糞の田圃を堂々たる都の道路として歩くやうな夫程不潔な處はあるまいだらうと思ひます、勿論拉薩府には糞喰ひ犬が澤山居りますけれどももナカ／＼其犬だけでは喰切れない、犬も糞の新しいのは悦んで喰ひますけれども古いのは喰はない、だから古い奴が澤山残つて行く勘定になるのです、屎尿か澤山ある道の傍に井があつて其井から水を汲出して呑むと云ふのですから随分衛生上には是程悪い事はあるまいかと思はれるけれ共併し夫程衛生には害になつて居らない、是れは確に害になるでせうが一體拉薩府の氣候は實に好い、冬は餘程寒いけれども日本の北海道よりは樂であるです、夜は氷點以下に降りますけれども晝は華氏の四十度或は五十度位の間にあります、夏は八十度以上に越したことはない、ですから其氣候の好い事と云つたら私が旅行した中又聞いて居る中では第一等の地である、ソレで此不潔 市街、汚穢極まる人民、年中垢の中に塗れて居る人間もそんなに病氣を受けないのだらうと思ひます、等



新教派の開山師、カンツの像

大臣と共に廻道を廻り或は拉薩府を散歩した時に浮んだ事であり、ユ、て少し
西藏の佛教に就て説明をしたインソレは政府の組織を説明するには彼の國の政府は佛教に依
つて立てられて居るので先づ佛教の事を説明しないと政府の事が説明出来ない、政府の事を
説明しない時分には外交上の事も説明することが出来るので先づソレを順序として先づ西藏の佛
教に就て概略だけ話して置かうと思ふのです、勿論委しい事は専門的に述べなくては到底盡すこ
とが出来ません、西藏佛教は大體に分つて二通りある、ソレは古教派と新教派である、古教派は世
に赤帽派と云はれて、新教派は黄帽派と云はれて居る、デ古教派の中でもいろ／＼其中で又名が分
れて居る、サツキヤとか或はカルマールワ或はゾクバとかゾクチエンバとかマダ澤山ありますが
兎に角其主義は略ぼ一致して居ります、其成佛の方法も亦略ぼ一致して居りますので此等を總稱し
て古教派と云ふのです

古派の開山蓮華生

之を開いた一番最初の人にはロボン、ベツドマ、チエンネと云ふ印度人
です、此人は(ベルチスタン)と云ふ國で昔は(ウルケン)と云ふた國の王庭の(ダナコシヤ)と云ふ
池の蓮華の中から出来たと云ふのでベツドマ、チエンネと云ふ名が附いて居るのですが此人の履歴
に就ては怪しい想像的事許りて捉へる所が極少ないです、古代の神話よりも尙ほ怪しい事が澤山
あつて其歴史其傳記杯と云ふものはまるツきり年代が滅茶々々です、だから本當の事は分りません、

けれども此人は僧侶でありながら肉食、帶妻、飲酒等を非常に厲行した人である、只之を厲行した
許りてない、佛教の主義に自分の肉慾主義を結び付けて巧に佛教を解釋し而して成佛の唯一手段最
上秘密の方法としては僧侶たる者は女を持ち、肉を喰ひ、酒を飲み、踊り且つ歌ふと云ふことが最
も必要である、此方法こそ五濁の惡世に於て其場て成佛解脱を遂げ得る所の甚深微妙の方法である
と教たのであります、

第九十一回 舊教と新教

肉慾は菩提性

肉慾を満たすのが必要であると云ふ其説明はドウかと云へば大慾は大菩提性
なりと云つて人間の中一番大なる慾は女色を求むる事である、此女色を愛して居る中に無我の本體
に到達して大菩提性を得るのである、ソレから人は肉を喰ふことを欲するものである此肉を喰つて
其動物の精神をして自分の菩提に感化せしめ而して其喰はれた所の動物の菩提を得るやうにして遣
るのが是れ又慈悲の道である、酒は快樂を得るものである、其快樂を受けて互に相和合して我れ人
共に此世界を安樂に暮すのが即ち眞實智慧の發現である、即ち酒を飲み肉を喰ひ女色を愛しつゝ禪
定を修めて直ちに即身成佛することが出来るのであると云ふ、其巨細な事に就ては風俗を害する恐

れもあり又餘り猥褻にして大方の人に知らすことの出来ぬ事も澤山あります、兎に角佛法の好名題を一々煩惱の求むるものに配合して種々附會の説明を施して居る、日本でも昔時眞言宗に於て立川流と云ふものが、起つて陰陽道と秘密の法とを合して之れに似たやうな説を唱へて大に社會を蠱毒した事があつたです、ソレは日本でも或る部分には大分盛に行はれたやうで但し其經文及び論部の如何は今残つて居る者が少ないから能くは分りませんがナカ／＼西藏に在るやうな大きなものぢやあるまいと思はれる西藏のは印度から傳はつて非常に廣く行はれ今も尙ほ其經典が澤山存在して居る、既に印度で傳へられたサンスクリット語(梵語)の經典及び翻譯書籍も大分西藏に存在して居る、ソレから夫等の教に就て其後ラーマ達が自分の思ひ／＼に造り出した説、却て佛教を蠱毒する所の教を佛教の名で以て澤山に世にあらはして居る、ソレは現今西藏佛教の半分は其經文で満たされて居ると云うても決して過言ではないと思はれる程である、既に私が持つて歸つた經典の中にも此宗派に於て最も確かとせられ最も信用されて居る所の秘密部の書物が澤山あります、是れは只私が秘密に調べる丈の事で社會に公にするのも殆ど困難な位猥褻のものである、サツ云ふ主義の教が西藏の古代に行はれて今より五百年以前までは中々盛でありました、所て其教が實に腐敗を極めて如何に倫理の紊れて居る事を習慣として居る西藏國でも實に爲て見やうのない程困難の地位に陥つたです、ソレで新教派が起つて來た

新教派の基因

は印度から來られたバンデン、アーヂンヤに基いて其後デエソンカーワと云ふ方が支那領の西藏即ち西藏の北部にアムドと云ふ處がある、其處の(ソソカー)即葱畑の間にある家に生れて其處から身を起して西藏佛教の腐敗を一洗することになつたので(デエ)尊或は聖と敬稱を付けて(デエ、ソソカー)と云ひました、デ此の方は充分古教派の悪い事を知り而して僧侶は全く戒律に依つて立つべきものである、戒律がなくては僧侶と云ふ名を附けることが出來ない、其戒律の中でも殊に淫戒を最も重しとするのである、若し僧侶が女を持つてばソレは確に俗人である、否な佛法を滅亡する所の惡魔であると斯う確實に極められて躬自ら實行せられた、て秘密部の大部分は顯部の經論に依つて僧侶には皆清淨の戒法を受けしむることにせられた、けれども其戒法を受けねばならんとせられた時分にはまだ西藏には其戒を授ける丈の師匠がなかつた位であるが、然らばどう云ふ勢ひで起つて來られたかと云ふと誠實なる信心の強い方に依つて或は又誠實なる人が澤山に集つて來ソレで新教派の芽孽と云ふものが段々出來て來たのです、其旗擧げをしたのが拉薩府より十四五里隔つて居るガンデンと云ふ處のある處であつたです、尤も西藏佛教は顯部の經論のみに依つて立てられて居る者は一つも無い、新教派も亦秘密部を取つて居ります、併し其秘密部は所謂正統派の秘密部を取られたのであるが古教派は邪統派の秘密部であつて全く眞の佛教を破る所の教である、正統派の秘密部には男女合體して居る所の佛樣とか神樣と云ふやうなものは殆どないので

ある、けれども西藏では秘密佛法と云へば必ず男女合體した所の佛體があるので既に持つて歸りま
 した秘密の圖書中にもサウ云ふ物が澤山あつて人には容易に見せられぬ位のものであるけれども最
 初は斯の如き社會に
 普及して居る古教派
 の秘密佛敎の尊像を
 皆打破ツて了ツて是
 れは眞の佛敎でない
 と云ふ丈の認めは
 付かなかつたやうで
 す、ソコで新敎派の
 開山たる所のヂエ、
 ソン、カーワと云ふ
 方が之を好い工合に
 解釋し而して之を皆
 抽象的にして



舊敎派の開山ノ、マツマ、ネンエノ像

男は方便女は智慧 大體男とは方便を意味し女は智慧を意味するものである、其方便と智
 慧とが一致して佛が出来るのである、決して肉慾を行ふたからと云ツて佛が出来ること云ふ意味ぢや
 ないと斯う解釋された、ソレから肉は慈悲を表した迄で肉を喰へと云ふのぢやない、慈悲を行へ
 と云はれたのである、酒も亦決して此有形の精神を棄る所の物を飲めと云ふのぢやない、酒は性智を
 表はしたもので其自性の智慧を日々能く用ひよと勸められた迄であること云ふやうな工合に凡て眞實
 佛敎の道理に合するやうに説明せられてサウして像は邪統派の像を其儘正統派の佛敎の解釋に利用
 して了つたのです、ですから其眞實の内容から云ひますと勿論正統派の佛敎を現はして居りますが
 併し表面だけ見ると矢張り邪統派の像を用ひて居るものですからドウも笑止しいやうに思はれる、
 併し大方その時代には止むを得ぬ事であつたかも知れない、是れて二敎派の概略を述べたと云ふ程
 では御座いませんけれども詰り佛敎の事は専門に涉らなくては分り難い事も澤山あるから先づ是れ位
 にして此宗敎上西藏に於て最も特別なる化身の事に就てお話ししたいと思ひます、一體
化身と云ふ意味 は其本體は佛或は菩薩であつて其の眞體は無形であるから衆生に見えない
 そくて其徳を備へ居る所の有形の體を現して世の衆生を濟度する爲に假に此世に生れて來た、即ち
 假に此世に化けて來た所の身と云ふ意味から化身と云ふ、所て西藏では只佛や菩薩が化身して來る
 と云ふ丈でなくツて一寸したラーマも矢張死ぬと云ふと今度又生變ツて來て世の爲に働くと云ふ信仰

があるのて、其化身に就ても昔の化身と今の化身とは餘程違つて居るてす、昔のは歴史上に残つて居る丈けて現に私が觀察して來た譯で御座いませんから果して確實なりや否やは保證することは出來ませんけれども西藏に於て確實なりとせられて居る歴史に依り古い事は止して中古に起つた所の化身に就て申しませう

第九十二回 法王の選定

法王政府の神下 今より四百年許り以前にケンツン、ツブと云ふ人があつた、其ケンツンツブは新教派の開山のチエ、ソんカーワの弟子であるが此ケンツン、ツブが逝れる時分に乃公は今度何處其處に生れて來ると云つたさうです、處がその名指した場所に生れた者があつて生れて暫くすると自分の寺に歸りたいと云ひ出した、其寺とは何處かと聞くとタシルフンブー寺であると云つたさうです、シテ見ればケンツンツブの生れ變りに違ひない、ナゼなれば遺言と其小供の言ふこと、か一致して居るからと云ふて連れて來て育てることになり段々生ひ育つた所でソレが第二の法王になられた、其方が死なれて第三代、第四代まで非常に確實な世であつたてす、所が第五代第六代となつてはドウも歴史を見ても餘程怪しい事が起つて居る、其時分に起つた怪しい事が詰り近頃の化身を認定する所の法則になつて來たてす第五代目の法王はソグク、ワン、ギヤム、ツオ(言力海)と云ふ方て、此方は自分は新教派でありながら舊教の事を非常に研究してさうして舊教の説明を新教派に引入れた人て其時代に神下を用ふることが大變流行つて來た、其時に確定された法王政府の神下と云ふ者が四つある、其四つは皆寺ではありますけれども神様を祭つてある所てす、併し神官でなくつて皆坊さんを置いてある、其寺の四つの名は一にネーチン、二にサムヤエ、三にラーモ、四にガートンと云ふのであります、此時分に神下を置かれるやうになつたのも詰り此法王からして

いよゝ
身を認定する所の法則になつて來たてす第五代目の法王はソグク、ワン、ギヤム、ツオ(言力海)と云ふ方て、此方は自分は新教派でありながら舊教の事を非常に研究してさうして舊教の説明を新教派に引入れた人て其時代に神下を用ふることが大變流行つて來た、其時に確定された法王政府の神下と云ふ者が四つある、其四つは皆寺ではありますけれども神様を祭つてある所てす、併し神官でなくつて皆坊さんを置いてある、其寺の四つの名は一にネーチン、二にサムヤエ、三にラーモ、四にガートンと云ふのであります、此時分に神下を置かれるやうになつたのも詰り此法王からして

教政一致 と云ふことになつたからてす、此法王までは所謂宗教許りの法王であつて少しも政治を執らなかつた、ソレは政治を執るにも自分の領分がなかつたからてす、所がモンゴリヤからしてシリ、コーミ、テンチン、チヨエ、ギャルと云ふ王が出て來て西藏の各部落に分れて居る所の王様を皆征伏して了つた、其時分の計算に依りますと一萬戸の部落が十三あつたと云ふのですから都合十三萬戸あつた譯である、所か今でも其時分から些つとも殖えて居らぬかのやうにボエ、チーコル、チヌン出ち西藏の戸数は十三萬戸であると云ふ事が俚諺のやうに云はれて居ますが是れは多分其時分に取調べた即ち法王領分の西藏六ヶに就て言ふたものでせう、さて其モンゴリヤの王は西藏各部の總てを征伏して了つたけれども自分は王様にならずに其權を擧げて法王に與へて了つた

のです、五代の法王は其權柄を受けて其時からいよく「教政一致と云ふことにしたので、すから教政一致になつたのはマダ西藏では三百年経たぬ位の事なんです、デ化身は矢張り昔のやうにして自分は斯う云ふ處から生れて来たとか或は私は死んで行く時分には今度ドゥ云ふ處に生れると云ふことを自ら言はぬ其時はドゥ云ふ風にして極めるかと云へば先づ誰か尊いラマーが死んで四十九日経ちますと其魂は何處かへ生れて行くことに極つて居ると云ふのが西藏人の信仰です、ソコで暫く経つと何處へ生れたか見て呉れと云うて聞きに行く、其聞きに行く處は所謂神下の家です、聞かれると神下は神様を下して告げるです

其神の下し方

は日本のお稻荷さんとは大分に様子が違ふ、實に奇怪な遣り方で、急に氣狂

が起つたかと思ふ位のもので、先づ何事に拘はらず其神下の處へ見て貰ひに行く坊さんが四人位太鼓を叩き四人位は鉦や鏡鉢を打つたりしてお經を唱へて居る其間に神様が下るので、其坊さんの様子は頭に大なる帽子を戴いて居る、其帽子の後の方に長く足の處まで下つて居る切布が實に立派な五色の絹である、ソレは金襴或は綾錦等も使はれて居る、着物は日本の僧侶の法衣のやうなもの、花模様は置かれてある派手な黄色或は赤色の緞子である、其又帯の結目のタラシは長く下つて居るが實に異様な立派なるものです、サウ云ふ支度をした神下が眼を閉つてジーツと中腰に構へ込んで居ると其側では頻にお經を讀んで居るです、スルと次第々々に震へ出して其の震ひがいよ

く厳しくなると同時に忽ち後へ倒れて了ふのもあり或は又立上るもある、ソレは其神様の性分ていろく成るのださうです、先づ後に倒れながらブルブル震へつゝ其ラーマは何處其處に生れて居るとか、其地方の家の向きは何方であつて其家には夫婦許り居るとか或は家内が何人居つて何月何日に生れたのが何時ぞや死んだラーマであるとか云ふやうな事を言ふのです、所が窃と其處へ探しに行くとき態に又其通りの子が生れて居るさうです、けれども其母親の乳離れのするまで其家に置いてソレから寺に連れて歸つて特別の教育を加へて自ら信ずる力を強くさせるのです「即ち我は前生は斯く斯くの立派なラーマである、サウ云ふ立派な人の生れ變りであるから、決して人から馬鹿にされないぞ」と云ふ所の氣象の充分満つるやうに仕向けるのです、斯く自信力の厚い所へお側の者がソレを敬ひつゝ充分教育を施して行くです、假令は法王の化身と雖も學問をする時分には矢張り能く修めないと唇部を打たれる事がある、サウ云ふ事は全く無いと云うて或僧侶杯は辯護しませぬけれどもソレは嘘なつて實は矢張り修學中は随分酷い目に遇はされるです、兎に角第五代目の法王から斯う云ふ神下が起つて何事も此神下に相談するといふ事になつたです、國際問題でも又何か變つた國內の出來事でも自分の心で判断が出來難い、假し道理上能く判断が付いて居つても何方にしたら宜からうと迷ふやうな時分、又迷ふ事も要らぬ極分つた事件でも其神下に尋ね而して神が下つて來て氣狂ひのやうになり泡を吹きつゝ言うて居る其事を聞いてから其言を實行するのです、デ

法王政府には先にも云うたやうに其政府を外護する所の神様が四つある、ネーチエンとラモとサムヤエとギヤートンです其中でも最も力勢の強いのはネーチエンであります、先づ法王が死なれて今度生れ變つて来るのをドウして知るかと云ひますと法王政府は法王がお逝れになつて後一年も経ぬ中に其四つの寺へ命令を下し何處に生れ變つたか此方に来て能く判断しろと斯う云うて遣ると其四箇寺の神下の坊さんは皆出て来るです、デ其四人の神下が自分の平生信ずる所の神を禱り下げて伺つた上法王は今度何處の方角に生れ變つたと云ふ事を一々言うですが其言ふ神さんが別々ですから四人の言ふ事が區々になつて違ふ事がある、或は二つ位一致して他の二つが別々になることもある、大抵は三人位候補者が出来て来るです、サウ云ふ時はドウして次の法王を定めませうか

第九十三回 子供の撰擇

囊中の名を探る 法王に生れた化身の候補者と云ふのを極秘密に取調べて見ると三人或は四人の小供を得ることになるけれども其子供が五歳位になる迄は政府からそんなに保護も加へない、又粗末にもしないやうに注意を加へて置くてす、デ五歳位になりますといよいよ其子供を拉薩の政府へ迎へますが其取極め方は支那の欽差駐藏大臣とソレから法王が逝れて後政治を司つて居る所の

代理の法王とが立會ひ總理大臣及び大藏、陸軍、宮内、教務等の大臣達と其次官の如き者が皆集まるです、僧侶の方でも最も重い高等僧侶杯は皆其處へ立會ひまして先づ黄金の璽のやうな物に其子供が三人あれば三人の名、四人あれば四人の名を書いて入れる、デちやんと封をしてソレから七日間大いに祈禱をなし經を讀む詰り此中で眞實の化身を得るやうにと云つてサウ云ふ大祈禱會を開きます、祈禱が終ると前に云うた通りの高位高官の人々が立會の上で封のしてある璽を能く検め其封を切つて蓋を開けると欽差駐藏大臣が象牙の箸を持つて眼を塞ぎながら璽の中へ突込んで一つだけ摘まみ出します、其摘まんだ名が誰に當つて居るか其當つた子供が法王となるのです、斯う云ふ風にするのですから、其間に餘り弊害もないやうですれども私が駐藏大臣の秘書官の馬詮と云ふ人から聞く所に依ると随分弊害のあつた事もあるやうです、ソレは自分の子供が法王になれば自分等は法王の王族として支那政府からは公爵を受くることが出来るのみならず財産も澤山に得られて實に此世に於ける圓滿なる幸福を受けることが出来ること云ふので大いに賄賂を使つて奔走する奴があるさうです、て夫等は先づ駐藏大臣に金を澤山遣りソレから又西藏の高等僧官にも賄賂を澤山遣る、サウすると詰り其賄賂を受けた者の子供しか摘まんで出されないやうな方法にして置いて遣つたこともドウやら有るらしい様子です、ソレは必ずしも證據立てることは出来ないうすけれどもドウもサウ云ふとがあつたと云ふ話を度々聞きました、法王の化身を定むるに就ては以上述べました如く

ナカ／＼六ヶしい、けれども其下の高等ラーマに至っても少し面倒な事もあるですけれども大抵此
神下と云ふ奴は實に悪い奴で賄賂を貪り取ることは非常です、ですから神下の坊さんには大變な金
持があるです、現に

法王政府のチーチュン の如きは恐らく西藏中の金満家と云はれる位に金があるです、
ソコで大抵高等ラーマの化身は多く貴族の子供とか或は金満家の子供、大商法家の子供と云ふやう
な者が多い、ソレが可笑しいぢやありませんか、貧乏人の子供にラーマの化身が宿らないと極めて
あるやうに殆ど十中の九までは皆富貴の家から其化身が出ると云ふ一段に至っては必ず其間に何か
の事が行はれて居るに違ひない、ソレは只表面から觀察した丈けても分るですが實際は全く妙な事
が行はれて居ますので折々嫌な事を澤山耳にしたてす先づ自分の子が出来る前からして神下の處に
行ツて賄賂を遣ツて置くてす、サウして何處か良い寺へ其子供を或る喇嘛の化身だと云うて口入を
して貰ふのです、良い寺には澤山な財産がありますからサウ云ふ風に申し込んで置くと其寺の財産
を自分の子供が生れながらにして得らるゝことに成るのであります、ソレは随分商賣の場合から
云ツたならば賄賂を澤山使ツても餘り損はないと云ふやうなものでせう、夫故に金を澤山贈る者が
あるんです、是れは私の屢々見聞した事であつて決して表面から觀察して斯うであらうと云ふやう
な推測話ぢやアない、だから化身の信ずるに足らんと云ふことはモウ分り切ツて居る昔の事はイザ

知らず今の化身と云ふのは本當の化身でなくツて

賄賂の化身

であるといは言ツた事があるソレでも其子供に自信力を付けて能く教育するも
のですからドウも化身と稱するラーマは十人の内て先づ八人までは出來の好い方です二人位は層も
あります其教育の方法は教師も附添人も其化身とされし子供に對して鄭重に敬語を用ひます餘へば
其化身の子供につまらないとがあつても無下に叱かると云ふとをせないて貴方は化身であるのに左
様なとを遊ばして何ふ致しますかと云ふて反省させる位のものであります……だから私は少し考へ
た事がある、ドウも子供をムヤミに馬鹿だの頓馬だのと罵り或は其記憶力の足らぬ事判断力の足ら
ぬ事をば無碍に與めて其自信力を奪ふと云ふ教育法は確に其子供の發達を妨害する教育法だと思ひ
ます、其小供には自信力を付けて充分進めるものであると云ふ所の觀念を起さしむるやうに教育す
ることは必要であるといふ考を西藏に居る時分に起しました、西藏人はサウ云ふ事は勿論知らない、
又賄賂を遣ると云ふやうな事もソレは富貴者の間に行はれて居ること一般人民はそんな事は些ッ
とも知らない、實に馬鹿なもので、政府が蜻蛉返りをして居ツても一般人民は殆ど知らない、一般
人民の間に傳へられて居ることは何處其處の華族さんに今度お子供達が出來たが其お子供達は生れなが
ら乃公は何處の何と云ふ喇嘛であると云うたとか或は其子供の處へ其前のラーマの物と然らざる物
と同じやうな物を二つ持ツて來て貴方はドウチラかと尋ねたら同じやうな物の中で能く見分を付け

て是れは本當是れは嘘であると言ふたさうだ、だから彼子は確に化身に相違ないと云ふやうな説が俗人社會に行はれて居ります、是れは西藏一國に斯う云ふ迷信が行はれて居るので只拉薩府シカチエに於ける秘密に立入つて見ると其化身は賄賂の化身と云ふことは確に斷言して憚らない、假令賄賂の化身でなくても神下と或る貴族との關係上神下は其貴族の保護を受けて居る時分には特別に賄賂を貰はないでもソレは所謂おベツカにサウ云ふ事を遣ることもあるです、此神下の事に就てマダ少し云ひたい事がある

大臣の失策と神下

政府内に於て例へば或大臣が誤つた仕事をしますと敏捷な大臣はソレと悟つてデキに政府の外護の神であるネーチエンに何萬圓かの金、或は其罪の大小に従つてソレより少ない事もあるけれどもマア千圓以上、少なくとも千圓より下の金はない、其金を持つて行つてネーチエンに頼むです、程なく其大臣のした過ちの化の皮が願はれていよく其事が政府部内の問題となり譴責をするか或は重い罰に處するかと云ふ場合にはデキにネーチエンを呼び神様を下ろして此人を罰して善いか悪いかに就てお伺ひをします、スルとネーチエンは其時に金を澤山貰つてあれば「決して罰するな、餘り罰すると國の運命に關はるから一寸叱言を云つて置く位が宜からう、彼は元來善い男だけれども今度は心なしに誤つたんだから宥して遣るが宜からう」と云ふ工合に言ふのです、其代りどんな善い事をして居つてもネーチエンのお氣に入らんとデキに法王の面前



神下大問題に窮し罷てる

て忽ち神を下して其善い事も逆さに悪事に言立て、譴責を喰はせるとか罰せられるやうにされるものですから西藏の政府部内では法王を恐るると同時に尙ほより多くネーチエンなる神下を恐れて居る、西藏政府の政權は此ネーチエンの左右する所であると言うても過言でない位である、尤も今の法王は餘程果斷な人でありますから事に依るとネーチエンの言ふ事を背かぬ事もあるけれども大抵古來の慣例に背くと云うて其人の言ふことを背くてす

第九十四回 教育と種族

チーチユン なる者もサウ云ふ微妙な事に就ては明に是非善惡を斷定するが扱天下の大問題が起つて外交上ドウしたら宜いか譯が分らんやうな事になると其ネーチエンなる神下が實に面白い先づ其身には光明輝く許りの衣服及び帽子を着けて法王及び大臣、高等僧官等の前に立つて祈りをして居ると應て神が下つて來るです、其下つて來る時分に「此度英吉利政府と斯う云ふ譯で合戦をするやうな事になつて居るがドウしたら宜からうかと云つて尋ねると神は何にも言はずにブル／＼震ひながら飛上つて神下しはドタリと倒れて氣が付かんやうな風になつて了ふ、サウすると側の者は「サア大變だ、コリア神さんが我々が不敬な事を尋ねたものだから怒つて往つて了はれた」と斯

う云ふ譯ですから一番困難な問題が起つて來た時分にはネーチエンは神さんが逃げて行つて了つたといふので何にも言はなくてもソレで事が済むのです、實に可笑しくて堪らんてす、ソレで心ある博士或は僧侶の中に於ても是非善惡を辨へて居る者は竊に其舉動の憎むべき事、其業の社會、國家を害することを惡んで彼は惡魔である、彼は決して佛法を守る者に非ずして佛法を破壊する者であると言うて大に怒つて居るです、けれども法王に至ては富貴の子供でなくて却て貧賤の中から澤山出て居る例も是迄あるのですから一概に法王或は第二の法王まで神下の勢力を及ぼして此事を決定することの出來ない場合もある、現に今の法王の如きも實に貧乏の家から生れて來て居られるです、第二の法王も詰らない身分、母親は匿者で父親は一體誰だか譯が分らぬ、或隱者が其匿者と一緒になつたとか或は坊さんが一緒になつたとかいろいろの説がある、或確實なる博士の説に依ると私の居りましたセラと云ふ寺の人でメトローケーサン(菊の花)と云ふ博士があつた、此人が所謂古教派の佛法を修めて遂に色氣狂ひになつて地方へ漂流して行つた、其時分に其方が匿者の娘と一緒に出来た子である、現に第二の法王の顔が其メトローケーサンに能く肖て居ると云ふ話です、併し其事は世人一般の認定の説でなくつて只セラ大學に居る私の知合の博士が言つたのですから眞偽は保し難い、神下の事は此位にして置さ、せう、こゝて

學校及び教育 　の事に就て一寸説明をして置きます、西藏では教育は餘り普及して居らな

只第二の府たるシカチエの邊では大分に單純な習字とか或は數へる事、讀物の類は行はれて居りませすけれども其他は寺でない限りは殆ど普通人民の子供は教育されると云ふことはないのです、それから勿論學校も澤山にない、只學校らしいものは拉薩府の法王宮殿に一つとシカチエのタシルフンブー等にあるだけ、其他は總て私塾のやうなものであつて最も廣く教育の行はれて居るのは僧侶學校である、普通人民の子供は僧侶にならなくては中等以上の學問をすることが出来ない、政府の學校へは普通の人民は入ることは出来ない、其普通人民の下に最下族と云ふのがある、其最下族と云ふのは漁師、船渡、鍛冶屋、屠者の四つである、鍛冶屋はナゼ最下族の中に入つて居るかと思ひます、是れは矢張り印度も同じ風俗で、鍛冶屋は屠者が動物を殺す其刀なり出刃庖丁を拵へると云ふやうな處から鍛冶屋も罪ある者として最下族の中に入れてあるのです、此普通人民と最下族の二種族は政府の學校に入ることが出来ない、殊に最下族の者は僧侶になることも許されないうが遠方に行つて自分が最下族であると云ふことを押し隠して僧侶になつて居る者もありませんが自分の生れた近處では誰もが其事を知つて居るから決して僧侶になることを許されない、其點に於ては平民は僧侶になることが出来るから餘程上等の位置を持つて居るものならドウ云ふ種族が政府の學校に入るかと云ひますと

華族の種類

第一にケルバと云ふ所謂華族です、第二にガクバ(眞言族)第三にボンボ(古教族)

第四にシーゴ(古豪族)です、第一華族と云ふのは古代の大臣或は將軍等の子孫で此内にはヤブシーと云つて法王の種族も含まれて居る、其法王族と云ふのは多くはないです、只昔から十三代あつた其間の王さんに附いた新族だけを云ふので、此等は皆公爵家です公爵家には法王族と王族との二つある、今言つたのは法王族ですけれども王族と云ふのは西藏の最初の王様でニヤチー、テーツヤンと云ふ人から佛教を西藏に入れた最初の大王ソン、ツアン、ガムボに至りソレから代々血統相續で今日に至る居る王族である、其正統者をラハー、キヤリーと云つて今でも其家は立派に残つて居る、けれども政權はない、只其位階は法王と同じ座に着くことが出来るですソレから其法王族のヤブシーと云ふのは是迄の法王の親族の公爵家が残つて居るだけですが夫等は大抵其家に遺手が出ますと總理大臣なり或は陸軍、大藏等の各大臣になることが出来る、サウならなくても詰り勅任官位の役目は何時でも持つて居るです、併しヤブシーと云ふのも拉薩の法王に就て言ふただけであつてタシレンブー寺の第二の法王の方にもヤブシーと云ふ者がありますけれども拉薩の法王のヤブシー程勢力はないです、夫等の二つを詰り王族と云つて置けば宜しいけれども矢張り華族の中に置かないと外に似たやうな者が澤山あるから之を華族の中に入れて居る、其似た華族の中にデーボン、チエカー(大將軍族)と云ふのがある、是れは昔から大戦争の起つた時分に非常な軍功を立て、能く國家の困難を救うた者の系統である、此等は非常に好遇されて居ります、尙ほモウ一つ下に在る所の華族よりは

餘程優遇されて居る、デ其家の子供も太子様と人から尊稱を受けるやうになつて居る、一番仕舞の普通の華族で矢張り昔から大變に由緒のある家或は又國家に功勞のあつた大臣の子孫等であります、此等の華族の中でも普通よりも勝れた才を持つて充分國家の爲めに働く人が出ます時分にはサウ云ふ人は必ず總理大臣にもなることが出来るです、今日は寧ろ國家を調理する才能よりも賄賂を旨く運用する才に富んで居る人間なれば必ず總理大臣の位置でも得られないには限らんです、殆ど西藏の

官職は賄賂 　　て以て買へる位のもので才能の有無はそんなに問はない、ナゼならば才能があつた所て却て邪魔になる位のもので、澤山な馬鹿の人の居る中に立派な人が一人居ると却て邪魔になつて仕方がないからサウ云ふ立派な人が出ると他から必ず嫉まれて投げ出されて了ふ、詰り勝利を得て居るのは賄賂で官職を買つた人が今日は澤山政府の要地を占めて居るです、此三つを總稱して華族と云うて居ります、第二ンガクバ(眞言族)と云ふのは其祖先のラーマが非常な遺手であつていろ／＼不思議な事をした、其ラーマが詰り妻帯をして子が出来た、所て其不思議な事を傳へるに餘所の人には誰にも傳へずして自分の子供だけに其一家の特色を傳へて行くと斯う云ふ事になつて居りますので、其人は矢張り今でも國家に於て必要な地位を占めて居るです、此間も云ひましたやうに徴税を取つて夏季の執法官となる所の権力もあり秘密行者として地方人或は都會人の尊榮

を受けるです、ナゼならば假にも御機嫌を損つた時分には極悪な秘密咒法を行はれてソレが爲めに害されるであらうと云ふ西藏人の一般の信仰でありますからソコで大變に敬はれて居るです、先にも言つたやうに此眞言族はサウ云ふ風ですから金が澤山入る、人から上げて貰ふものも澤山あり又徴税の如きものも澤山取れるから普通から言へば非常な金持であるべき筈であるのに非常に貧乏人が多い、ンガクバと云へば西藏では貧乏に限つたやうに思はれて居るけれども又ンガクバと云へば貧富に拘はらず最も敬はなくてはならぬもの、やうに一般人民が思うて居る、華族の人でも乞食のやうな風をして居る、ンガクバを見ると馬から下りて挨拶する位です

第九十五回 豪族と最下族

ボンボ族 第三はボンボです、是れは佛教が西藏に入らぬ前から傳はつて居る古い教で其坊さんには矢張り妻帯をして居ります、其子孫が詰り古教族と云ふので此等も亦地方の神様を祭り而して其地方の神様が怒つて人民を罰したり何かすることを防ぐ爲に法を行ひますが總て男女結婚の場合には其村の神を祭る爲に此ボンボ族を頼むのです、其外ボンボ族は人に頼まれて祈禱をしたり咒咀をするのを仕事として居ますが極く邊鄙の地即ヒマラヤ山中のトルボと云ふ處の或村落は一村卅軒

擧げてボンボ族であります。サウ云ふ處は別ですが一村或は一地方にボンボ族が一人と云ふ様な場合には其ボンボ族は其地方に於て行政司法の長官として尊敬を受ける又サウ云ふ長官でもなく祈禱も遣らず外の仕事をして居つても血統の正しい者であると云うて非常に尊まれて居る、ですからボンボと云ふものは昔は一の宗教であつたけれども今は血族其者がボンボと云ふ教を代表して居る丈けて其教を外の人に教へるとか或は其説を説明すると云ふとはないです、只ボンボの子孫が其教を子孫に傳へて行くと云ふ丈けに止まつて居るで世俗的の仕事をして居る者はボンボの中でもラーマでない、ラーマは矢張り佛教の僧侶のやうに剃髪して法衣杯も着け而して其種族中で一番最上の席を占めて居る、要するに此ボンボと云ふ者は血統の上で尊敬を受けるのみならず又夫れ相應の才學があつて僧侶となれば又其僧侶の位置に伴ふ丈けの社會の尊敬を受けるです、第四はシェーゴてす即ち

古豪族 の事て此種族は其名の如く古の豪農或は豪商等の子孫であつて今尚ほ多くの財産土地を持つて地方に於て權力がある、ア、云ふ山國の人民は非常に保守力に富んで居るものですから昔から有る所の財産を其儘に維持して行く、殊に多夫一妻の風俗で以て其財産を維持するやうに許りして居りますから昔から財産家は今も尚ほ財産家である、併し稀には此頃財産、土地を失つて富豪家と云はれる實のないものがあるですけれども矢張りシェーゴ(古豪族)の種族として社會の尊敬を

受て居るとは同じ事です、西藏では是れより下の種族即ち平民或は最下族がドレ丈け金を持ちドレ丈け社會に勢力を得るに至つても決して此古豪族の貧乏人に對しては威張るとが出来ない、ソレは昔し京都のお公卿様に對して非常の金持の商人が威張るとが出来なかつたのと同じ様なものであるです、平民はトムバと云うて居る、デ、トムバの中にもトムバとトムツ一の二つがある、トムバは昔から普通の財産、土地を持つて他人の奴隷とならなかつた家系を云ひますので、トムツ一即ち小民と云ふのは平民の下に在つて殆ど奴隷の業を執つて居る者の子孫を云ふ、併し全く奴隷でもない、極く悪い小作人と云つたやうなものです、古代は全く地主と小作人との關係を持つて居つたのです、が今は皆サウであると云ふ譯にはいかなない或はトムバ(平民)の系統であつて小民よりも貧困に陥つて居る者か或は又小民の系統で多くの土地財産を持つて平民より遠く勝れて居る者がある、けれども是等は極く普通の場合でなくつてマア例外と云うて宜しい大抵は平民の方が大きくて小民の方が小さい

階級と待遇 小民の血統の者でドレ位財産、土地を持つやうに成りましても又平民がドレ位貧困に陥つても其系統、階級と云ふものは決して紊れない、從て其社會が其兩者に對する待遇がチヤンと違つて居つて決して平民と小民と共に食物を一緒に喰ふと云ふやうな事はしない、又結婚と云ふやうな事も決して許されない、一番最下の族は先にも云ひましたやうに渡船者、漁師、鍛冶屋、

屠者の四つて此等の中でも渡船者と漁師とは少しく地位が高い、決して鍛冶屋や屠者のやうてはな
い、此鍛冶屋と屠者とは他の平民とは決して一室内にて共に飲食することが出来ません、渡船者、
漁師も其飲食器を共にして喰ふことは出来んけれども一室内に團坐して飲食することが出来る、只
自分の椀で自分の物を喰ふと云ふに止まる、此四つの最下族は決して他の種族と結婚することが出
来ない、若し平民以上の種族の子供が此等の最下族の者と野合するやうな事があつた時分には其上
等種族の子供は只階級から退けられて最下族に陥らなければならぬ、ソウして其父母の家へ来るこ
とも許されない、若し其子女にして過ちを悔いて最下族の者と離婚した所が又決して従前の上等種
族に復ることが出来ん、最も可笑しいのは、此の最下族と平民とが夫婦になつた間に出来た子
です、其子供を世間でテク、タ、リルと云うて居る、テタ、タ、リルと云ふのは

黑白混合の細族 と云ふ意味で、サウ云ふ名を附けて最下族よりも尙ほ悪い者としてあるで
す、テ此最下族中の鍛冶屋とか屠者杯が金を拵へて其商賈を罷め農業或は商業をするやうに成りま
しても彼等は永久に最下族として決して普通社會の交際を受けることが出来ない、併し他の上等種
族で鍛冶屋の技に巧妙な者があつて自ら好んで鍛冶業をする時分には其血統が悪いのでなく只技が
巧妙で遣るのですから之をリク、ソー(工士)と云い升其血統の階級上に於て法律上或は習慣上その
上等種族は下等種族に對して特殊の權利を持つて居る、例へば華族の子供と平民の子供とが争論、

喧嘩をし若し平民の子供にして華族の子供に對し怒りの餘りに尊敬語を用ひずして對等語或は蔑視
した言葉を用ひます時分には其争つた事柄の是非善惡如何に拘はらず法律上必ず平民の子女は悪い
ものとなつて了ふ、又どんな金持の平民の子供でも自分より一階級上のンガクバ或はボンボ種
族に對しどんな場合でも敬禮をしなければならぬ、同座の場合には極く貧乏人のンガクバでも
矢張り其種族に對して正席を譲らんければならぬ、話をする時分には必ず尊敬語を用ひなければな
らぬ、勿論其階級の異なるに従て結婚等も皆別々になつて居るものですから自ら品格、容貌、性質、
作法等も變つて居る、ですから此國の諺に

氏の上下は作法 に依て知らるゝなり、都鄙の人々は其言葉に依て知らるゝなりと云ふこと
があり、やうに華族は特別に容貌も高尚なる姿があつて其作法も凡て風雅で靜肅である、其心の
如きも我は華族であるから耻かしき行ひをしてはならぬと深く自ら戒めて居る者が多い、他の眞言
族、古教族、古豪族の如きは華族に立派でありませぬけれども平民に比して見ますと幾分か高尚
な所があつて其性質も亦卑しくないのが私共でも大抵一見して分る、此人達は平民でなくして高等
種族であると云ふことが着物の着方でも分る、平民は其容貌、品格等が卑賤でありますけれども其
性質は稍や正直で、盗心が盛大でない、平民はどんな貧乏に陥つて假し乞食になつた所が大抵彼等
は盗みをしなないと云ふ一事を以て尙ほ社會の人に信用されて居る、最下族の中には強盜、殺人等重

罪の犯罪者が最も多い、ソレは重罪の巢窟であると云うて宜しい、又乞食の多くも此種族に屬して居る、尙ほ此種族の中には別に乞食族と云ふ者もある、ナゼならば代々乞食を續けて居る奴は乞食族と斯う云ふのですから、假令此最下族中に善人があつても社會は彼等を信用しない、其容貌も一見して如何にも最下族と云ふことが知られる、殘忍、酷薄、卑汚醜穢その性質も亦容貌の様であるです、

教育の目的 先にも云ひましたやうに上の種族は政府も學校へ入學を許します、其學校で教へる所の事は暗誦、習字、算數の三つの課目である、第一が暗誦第二が習字で時間の上から云ふと最も多く習字に費やされて居る、算數は前に説明したやうに小石、木屑或は貝殻で勘定する方法を教へて貰ふ、何を暗誦するかと云ひますと經典の一部と文法書の極く單純なもの、ソレも極く不完全なものでソレから修辭學を遣るです、西藏では文法よりも修辭學の方がマダ必要な位です、ナゼならば何でもムヤミに飾つて立派に言ふことが好ですから丁度支那人がムヤミに形容するやうなもので西藏人もサウ云ふ點に就ては餘程支那人にカブレて居るのか、或は本來の性質か知らんが法王とか或は少し目上の人に上げる書面でもムヤミに立派な譽言葉を澤山使ふ、ですから修辭學が必要である、餘程分らない拈ねくつた字を手紙の中へ書き入れることが好です、殊に上書文と來た日にはお經の中にも見出すことの出来ないやうな六ヶしい字許り集めることが得意で、何でも人が見て



教 育 の 獎 勵 法 と 考 へ て 子 供 を 打 つ

分らないやうな物を拵へて喜んで居る、又サウ云ふ風に學校でも教育して行くです、修辭學の中には一枚の文章を一口も掛つてからして修辭學の原書を使い便り讀まなくちやア分らん位六ヶしい文章が書いてある、まるで符牒を書いてあるやうなものがある、デ世人一般に分らない字を知るのを以て教育の最後の目的として居るのでか實に奇怪なる教育の目的と云はんければならんです

第九十六回 教育の獎勵法

獎勵の苛法

サウ云ふ六ヶしい修辭學を教へるのですからナカ／＼子供には堪えられない、殊に暗誦が重て其暗誦の文字も六ヶしい、ですから容易に覺えられない、覺えられないのを獎勵して覺えさせる唯一の方法はブン擲ぐるので、夫を最上の良法として用ひて居る、師匠と生徒との關係は恰も看守と罪人の關係の如く生徒は師匠の前に行くとは始終ブン擲ぐられはせぬかとブル／＼慄へて怖がって居る様は實に可哀さうなものです、私の寄寓して居りました大藏大臣の如きは教育上に於ても餘程心掛のある人で有りましたけれども、自分の家に居る子供に教へる第一の方法は矢張ブン擲ぐるのてした、ですから其子供が大臣の前に出て來るとブル／＼慄へてから、モウ今にもブン擲ぐられはせぬかと何時も逡巡りをして居るです、其擲ぐるのは總て坦たい竹で子供の左の手の

平を三十位ビウ／＼と擲ぐるのです、若し其手を引込めると三十の奴が六十に成りますからドノ位痛くツても縮んで縮み上ツても斯うやつて(手真似)して慄へながら熱い涙を溢しながらジ／＼と辛抱して擲り終るのを待つて居ねばならぬ、其哀れさと云ふたら迎も見て居られない、これは其子を教育するのではなくて賊するのですから私は或時大臣に教育法と云ふものは斯う云ふものである擲ぐるのは宜くないと云ふことを充分説明しました、所が始めは大分議論を云ひましたけれども何分事の分つた方でありますから其後は子供を擲らんやうになつてマア餘り覺えないと少し叱言を呉れる位になつたさうです、其後も私は成るべく精神を開發して教へるやうに勸告しました所が大臣は其後ブン擲らないと却て能く覺えるやうに成つたと云はれた位であります、併し此ブン擲りは大臣一人がサウするのでない大臣より餘所の方が酷い、御膳を喰はせなかつたり或は一晩縛つて置いたりして殆ど子供が堪え得られない程に苦しめるです、然らば西藏では子供を教育するに少しも慈愛の心を以てせずには只嚴格に罰すると云ふ丈けて遣つて居るのかと云ひますと、又サウてもないです、即ち

僧侶と弟子との關係

になるとソレはモウ甚だしいもので教育しても覺えなければ仕方がないと云ふやうに打棄つて置いてサウして始終其弟子に接吻すると云ふ風で何しろ非常に愛するです、宛も其關係は其色に溺れた婦人に對する如き有様を呈して居る、ですから愛に溺れて又教育す

ることが少しも出来ない、一は嚴格に過ぎ一は愛に溺れて教育が出来ない、此中庸を執つて慈愛を施しつゝ且つ嚴格なる態度も維持しつゝ教育すると云ふことは必要ですけれども西藏教育は或は過ぎ或は及ばぬかと云ふたやうな遺方許りです其中庸を以て得る者は私の見た中では殆どなかつたです、テ僧侶の教育と云ふた所が既にそんな風でありますから良い人物の出て来ることは極く少ない心ある僧侶は自分の弟子に接吻すると云ふことは宜くない、詰り其子を賊ふのだからと云ふて餘所の弟子に接吻して自分の子僧には接吻せずに教育する人があるです、サウいふ子僧は段々發達して行く

經文の暗誦

發達して行くが扱困難な事は暗誦許りですから學ぶ者の身に取つては容易でない、大抵一年の間に十五六歳になつた子供は三百枚或は五百枚の紙数を暗誦して其經文の試験を受けなくちやアならない、ソレも決して書物に依て學ぶのでなくつて其ラーマの口から傳へられて無意味に暗誦する丈けてです、其無意味に暗誦した經文、其經を一年に三百枚から五百枚の試験を受けなくちやアならないのです、一番少ない程度に於ても五十枚は暗誦しなくちやアならん、ソレは極く記憶力の鈍い奴に對する特別の取扱ひで半年に五十枚づゝ都合一年に百枚だけ暗誦して其試験を受けさせるです、モウ十八九歳から二十五六歳、三十に至る間に於ては五百枚、八百枚甚だしきは千枚も暗誦する人がある、ドウして暗誦が出来るか私共には殆ど分らない、私共は半期に五十枚暗

誦する丈けてもヤットコサと出来る位の事です、右の如く西藏人の教師は擲ぐるのを以て一番良い教育法として居るですが又其外に

罵詈も亦獎勵の手段

として畜生、豚、乞食、餓鬼、驢馬、親の肉喰犬と云ふやうな荒

々しい罵詈の言を放つて其子供を教育する、サウ云ふやうな荒い言葉を以て教育されるものですから其教育された子供が今度大きくなつて人に對する時分には又自分のされた通りに繰返すと云ふ譯て實に淺ましいものです、次に商業上の事に就ても話したいと思ひますがそれに就て私は明治三十四年の十一月十八日に前に話しましたダーチリンにて知合になつた所のツァールンバと云ふ商人に託して書面をダーチリン及び故郷へ送ることにしました、此ツァールンバは政府の命で印度カルカッタへ鐵を買ひに行くのです、此鐵はドウするかと云ひますに鐵砲を拵へるのです、其鐵砲を拵へるのは拉薩府の南方に在るキーチュ河の向側にチエ、チヨ、リンと云ふ處があつて其東のデブと云ふ所に鐵砲製造所がある、此

鐵砲製造の事業

は其時より八年許り前に起つたのでソレ迄は西藏では鐵砲を製造すること

を知らなかつた所が西藏のハーチエリンと云ふ男が長らくダーチリンに住んで居つたことがある、一種變つた人間で、其男が西藏政府の命令を受けて印度地方から印度及びカシミールの回々教徒で鐵砲製造に従事した人間を十人許り西藏へ連れて來て西藏人にも鐵砲製造方法を教へさせた、其

十人の内死んだ者もあれば國に歸つた者もあつて私の居る時分には二人しか居らなかつたけれども西藏の鍛冶屋は其鐵砲を製造するとをスツカリ學んで其人達が教へた丈の事は總て出来るやうになつたのです、ドウも西藏では他國から鐵砲を輸入することは困難である、殊に印度地方から良い物を輸入することが出来ない、是迄は皆火繩銃許りであつたですが今度所謂新式の鐵砲が出来るやうになつてソレが大分成績が好いので尙ほ鐵を澤山仕入れて大に製造しやうと云ふ所からツアールンバが政府の命令を受け金を澤山持つて其鐵を買ひに行くことになつた、デ内々其事を私に知らして呉れた、素より確な人でありますから私は早速手紙を認めて其人に託した、其手紙はダーヂリンのサラット、チャンドラ、ダース氏に宛てました手紙で其中に故郷の方へ發する手紙も封じ込ました、西藏人が此頃交易の爲め出掛けることの最も多くなつて居る外國は英領印度で其次が支那です、其次は露西亞との關係ですけれども露西亞との通商はそんなに開けて居らない、コリヤ殆ど言ふ必要がないです政治上の關係は現今に至り益々持上つて來ましたけれども通商上の關係はマア絶えてなつたと云つても宜い位です、私は先づ始めに英領印度及び其隣國のネパールとの交易に就て少しお話ししたいと思います

第九十七回 西藏の物産

重なる輸出品

英領印度の方へ輸出する品物は羊毛が重て次が麝香、犛牛の尾、毛皮、獸皮位のもので尙ほ細な物は少し位づゝ出でるです、或は經文とか佛像とか云ふものに至つては餘程持出すやうに印度の方から求めてもサウ云ふ物は途中で見付けられると没收されるから餘り輸出されて居らない、其他日用品も多少輸出されますけれども既に支那茶の如きも西藏を経て印度地方に來て居つたのですけれどもソレすらも此頃はすつかり止めて了つた位であるから其他も推して知るべきである支那から西藏を通じて印度に茶を送ると云ふのは訝しいやうであるが此茶は印度人が飲むのでなくツてダーヂリン近所に居る所の西藏人が飲むのであるですから僅かであるけれどもソレすらも此頃は輸出を止めたです、羊毛はカレンボンと云つてダーヂリンの東に在る山都會に出て來る分が毎年驟馬で以て五千駄以上六千駄位ある、ソレからブータンの方に出るのは一千五百駄以上ある、併し是はソレより以上あるかも知りませんが何分統計杯のある譯でもなし只其商人に就てドレ丈け位賣出すかと云ふことを聞質した迄の事ですから本當の事は分らない、ネパールの方に出るのが二千五百駄内外で、ラタークの方に出るのも矢張三千駄位のものと思はれる。支那の方へ出るものと

レからマナサルワ湖の西方に出て行くものはコリヤ私が通らない地方でもあり且つ又能く尋ねて置
かなかつたてすからドウも不明です

麝鹿 ジ麝香は實に西藏では澤山である、麝猫とて猫のやうな形の香物を持つて居る、動物も
あるとうてすけれども西藏のはサウでなくて一種の鹿の類です、矢張草計り喰つて居りました其大
きさが猫の二倍半或は三倍位ある、形は一寸鹿のやうであるが那んなに脊が高くなく、可愛らしい
狎兒のやうなものであつて其毛色は濃鼠で誠にサバ／＼した極軽い毛である、其顔の愛らしい事と
云つたら實に一見して其動物の性情の愛すべきことが分るです、殊に下顎と上顎から二本づゝ曲つ
た美しい牙が出て居る、ジ麝香は臍に在ると云ふやうな説がありますけれどもサウではなく、彼香
は陰部即ち墨丸の後に膨れ上つて附いて居るです、ですから雌には勿論ない、之を殺すには月の十
五日に殺すと麝香が一番餘計あると云ふ、勿論其麝鹿の大小に依つて幾分か其量を異にして居りま
すけれども兎に角陰曆の十五日は麝香の満つる頂上ださうです、其時麝鹿のした小便を嗅ぐと非常
に麝香の匂ひがして居る、十六日十七日と段々月末になる程、減つて行くと云ふ、又月が變ると月
初めからポツ／＼と殖えて十五日になると充分満ちて了ふといふ譯で丁度日に關係をして居る、て
すから成るべく十三日から十五日の間に取つて居るです、取るのは鐵砲で殺すのですが併し西藏に
は殺生禁斷の場所が澤山あつて其場所には殊に又澤山麝鹿が居るです、私の住んで居つたセラ大學

の後の山杯にはナカ／＼澤山居りました、けれども其處は殺生禁斷で其處で鐵砲開放つた分には自
分の命に關はる位のものですから誰も殺生を遣ないですけれども又ナカ／＼賢い方法で取です、犛
牛の尾で拵へた所の紐で山間の草の生ひ繁つて居る處に畏を拵へて置く、スルト麝鹿が草を喰ひに
來て其畏に罹り大いに苦んで聲を擧げて鳴き出すと其處へ先生遣つて往つて殺して了ふ、サウ云ふ
方法で澤山取るのです、是れは只西藏國內丈けてなくて西藏とネパールの間のヒマラヤ山脈の間に
も澤山棲んで居る、併し最も大いのは西藏である、西藏の内でも麝鹿の本場とも云ふべきはコンボ
及びツァーリ並にローバ地方で此地方には非常に澤山居るから其地方へ行つて買へば極安いです、
マア日本で買ふ殆ど十分の一位の直段である、殊にローバの住民は極の野蠻人で只その陰部丈けを
蔽うて居る種族である、是れは西藏人とも印度人とも附かないですが其言葉に依つて見るとドウや
ら西藏の方に近い、サウ云ふ人間の持つて來る麝香は少しも混り氣がなくつて殊に大きな良いのを
澤山持つて來ますが直段は非常に安い、何を持つて往つて買ふかと云ふと小さな鏡、水晶玉、銅、
釜、庖丁類、麥焦し、西藏の菓子類、西洋品の極安い玩具類、そんな物を持つて行つて欺くらかし
て換へるのです

交易の方法 ドウ云ふ風にして換へるをと云ふと何處の野蠻人にも行はれて居るやうな工合
に向ふから麝香の輕い奴を一つ出しますと此方からも先づセルコ見たやうな物一つ遣るです、ソ

レは行けない、モツと餘計遣せと云ふとソコで水晶玉の三つか四つ位附けて遣りますと彼等は大きい悦んで交換するです、てすからそんな處から買ッて来るとまるで只貰ッたやうな譯ですけども併し其處へ行く迄がナカ／＼危ない、強盜の澤山居る中を行かなくちやアならんから首尾克く其香を買出して来た所が果して拉薩府まで持歸れるかドウか、其間に強盜の爲めに商人の殺られる者が多いさうです、安物を買ひに行ッて一番高價な自分の命を棄てなけりやアならんやうな事がありますから其處へ出掛けて行く人間は餘程稀です

麝香の輸出先

此麝香は何處へ最も多く輸出されるかと云ひますと此頃は支那よりも印度の方に餘計に輸出されて居るです、以前は雲南の商人杯は西藏から澤山此麝香を買出したものですが、印度の方へ吐口が多くなッてからして直段が大變高くなりましたので今では雲南の方へ持出しても前程儲けがないさうです、併し今でも其幾分は持出されて居るですが昔のやうではない之を雲南からして雲南麝香と云ふ銘を打ッて我國杯へ輸入して来たらしく見えるです、支那へ輸出するものゝ中で一番立派なのはシャ、イ、タクラ即ち

寶鹿の血角

であります、此の血角は支那では身體を壯健にして壽命を長くし尙ほ顔の艶を好くする利目があると云ふので所謂支那の仙藥を拵へる爲めに西藏から澤山買ひ出して行くです、ナカ／＼其の直段は高いもので極良い血角になると其の價も亦非常に高い其の角一雙の價が西藏で

支那人の買ふ直段が日本金貨に換へて五百圓位のものがあるです、併し極悪い者になると二三圓しかしない物もあるです、ナゼかと云ふと極く悪い者は藥にならない、只飾りになるに過ぎない、其悪いのと善いのとを見分けるのはナカ／＼困難です、西藏人の大抵は血角と云ひさへすれば何でも金の高いものゝやうに、五百圓も千圓もするかの如く思つて居るですけれども決して黒人の間ではそんなものでない、如何に大きくツても藥にならないのは極安いです、此寶鹿と云ふ鹿は何處に多く居るかと云ふと西藏の東南部に最も多く居るです、又西北部の曠原にも大分に居ります、其大きさは殆ど極大な馬程ある、其形は全く普通の鹿のやうであるが鹿よりも餘程肥えて居るです、其毛色は少しく灰白色を帯びて居る、尙ほ外の色のものもあるさうです、

角の新芽

コ、に不思議なるは此血の角は毎年陰曆正月からして新芽を出すのです、其新芽の外部は一面に毛の皮で被はれて居ッて中は全く血で骨も何もない(師の携帶品中に在り)其芽が月々成長して三四月頃になると一つ位枝が生えるです、枝が發すると下の方は少しく堅くなッて骨のやうな工合に變ずるけれども上の方は全くの血である、其芽が段々大きくなッて枝に枝を生じ其枝が成長して九月頃になると全く成長の極に達するので、最も大なる寶鹿の角は其長さが一丈二尺程ある、私は實際其角を天和堂と云ふ藥屋へ賣りに来たのを見ましたが其根元から尖まで量ッて見ました所が今云ふ通りありました、デ是れが一番大きな角だと云ふ話、其幹の太さは圓り一尺七

八寸あつて詰り血が骨の如き角になつて居るのですけれども其角の全體は根元から尖の方まで悉く毛の皮で包まれて居る、其角は十月から十一月に掛けて段々枯れたやうな状態を現はして十二月中旬頃になると根元からポツキと落ちて了ふのです毎年斯う云ふやうな例で其角は出来ては枯れて落ち、落ちては又新芽を出す云ふ實に奇態な角であるです、テ其血角を取つて藥にする一番好い時期は四月か五月頃である、其時分には土民が其時を計つてからして巧に銃殺するです、其弾丸は首筋へ中て、チキに殺して了ふやうにせなければ其動物を殺した所が間に合はない

血角を碎いて死す ナゼならば若し外の處へ彈丸が中りますと其動物は自分の呼吸のある中に其頭の血角をば四邊の岩へ叩き付けて貴き血を振棄て、了ふか或は土地へ摺付けて了ふか兎に角其血角丈は必ず失くして死んで了ふです、ですから餘程旨く撃殺しないと其血角を取るとが出来ない、又此實態は四月五月の間は自分の頭の血角を能く保護する爲にそんなに遠い處に遊びに出ないけれども土人は巧に此血角實態を撃止めるです、此獸は極優しい質ですけれども尊い血の角を持つて居る爲めに度々銃殺の不幸に遇ふです私も一番好い血角を求めて來ましたが併し其角は餘り大きくなつて居らんものですから直段も少し安かつた、併し藥としては非常に効能があるさうで西藏の血角を商ふ大商人に鑑定して貰つて其後に買ひましたのですから確かなもので御座います

第九十八回

輸出入品と商賣

輸出品 ネパールへ輸出する品は羊毛、犛牛の尾、鹽、硝石、羊毛布等の種類です、西北方の支那地方及びモンゴリア地方へ輸出するものは多く羊毛布の種類である、其種類はナンブ（羊毛製の下等厚地布）ブーック（羊毛製上等縹珍やうの物）チンマ（中等羊毛厚地布）チンチー（中等薄地羊毛布）デーマ（堅織羊毛薄布）コンボチエリー（渦巻羊毛布）ツクツク（羊毛擬ひの段通）等て其他モンゴリアへの輸出品中最大部分を占めて居るものは經典である、次に佛像、佛畫、佛器等も輸出して居るです、併し此頃西藏で出来る佛像佛畫は美術的としては實に詰らぬものである、昔のは餘程好いですが段々衰へたものと見え佛畫とは名ばかりで殆ど型のやうなものです、現に西藏の立派な寺に行いて新しい佛畫或は佛像を見ると實に嫌になるやうなものが澤山ある最も嬌狼な佛或は明王とか金剛族とか云ふやうな佛法を守護する神さん達までも矢張夫婦合體であるから實に見苦しい私が西藏に居りました時分に是れが西藏人の短所であらうと考へましたのが先づ四つ御座います、

一は不潔、二は迷信、三は不倫理の習慣（多夫一妻の類）四は不自然の美術、斯う感じましたがソレに對する何か良い長所を見附けたいと思つて餘程捜しましたけれども餘り良いものを得られな

い、強ひて求むれば拉薩府或はシカチエ邊りの氣候の實に好い事、次に誦經の聲の剌院として實に
開心地の好い事、問答の方法の活潑なる事古代美術の稍や自然的であると云ふこと先づ是等のご
いませう、マダ此外にも輸出品はありますけれども略します

輸入品 は印度から輸入されるのが一番多い、其中でも無地羅紗が多い、即ち青、黄、赤、白、
黒、紫、緑の七色、此等は餘り澤山賣れる方てなくッてお寺の本堂の飾りとか云ふものに多く用ひ
られる、最も賣行き多く從ッて多く輸入されて居るのは黒蝦色の羅紗です、けれども餘り上等の品
は向かない、安物ばかり輸入されて居る、ソレから絹ハンケチ、ビルマ縮緬、メナレス金襴、薄絹、
木綿類此木綿の中には帆のやうな厚地の物もあれば又薄い物もある、色は白地が多く又は淺黄其中
でも餘計賣れるのは黒蝦色の無地の大幅木綿晒紗の花模様或は縞模様も可なりある、其他印度か
ら人物、樹、お寺杯の書いてある晒紗が大分入ッて居る、此等の品で印度へ來て買ひます時分には
勿論英國政府の尺度で買ふのですけれども拉薩府で賣る時分には其切布を四角に折曲げて之を西藏
語で「カ」と云ふ、デ「カ」一個で幾らと云ふことで賣ります、併し西藏の羊毛布杯を賣ります時は折
には妙な事をして賣ることがある

奇なる賣買 ソレは自分の手を一ぱいに擴げて是れて幾らと云ふ賣買の仕方です、大きい人
でも小さい人でも直段は同じですから大きな人が買ひに行くと此方が得をする代りに商賣人が損を

する、又脇節から指の先までの長さ一つが幾らと云ふ賣買の仕方もある、是れも矢張大きな人は得を
する譯で我々如き者が買ひに行くと損です、サウ云ふ物を買ひに行く場合には大きな人を雇ッてサ
ウして先方で尺度を取らして買ふと大變得をする、けれども印度から入ッて來た者へはサウ云ふ事
をして賣る者が先づない、ソレから西藏人はナカ／＼懸直を云ふ、始めから一定の直段で賣る杯と
云ふことは拉薩府では何處の店にもない、必ず懸直を云ふに極ッて居る、信用ある店ですと一割か
二割位の懸直ですが其以下の店では倍、三倍或は相場に分らん物は五倍、六倍にも云ふことがある
です、デ其品物を賣買する時のモンラム(願ひ事)が面白い

モンラム 此品を貴方がお求めになッて病氣もなく又煩ひもなく無事月日を送り家運ますく
繁昌して斯の如き品を澤山お求めなされて遂に多くの家倉を建てらるゝやうに成らんことを願ひま
すと云ッて品物を渡しますソレは普通の事ですがお經を賣つた時のモンラムは尙更ら面白い、經文
は大抵僧侶に賣るのですから僧侶に對して其書物を恭々しく自分の頂まで兩手で持上げ「貴方が此
經文をお求めになッて此經文の眞意を能く解するのみならず其正しき意味の如く實行せられ而して
其智慧と道徳とを益々進めて遂に一切衆生の大歸依主となり此經典に依ッて益々一切衆生を利益せ
られよかし」と熱心に願ひ立てゝ其品物を渡しますと客人は例の垢だらけの銀貨を一寸舐めソレか
ら自分の襟で其銀貨を拭いてサウして一應其貨を能く檢めてから左も惜しさうに渡します、そんな

事をするのはドウ云ふ意味かと云ふと詰り其錢に附いてある福運までも共に商人に附けて遣ることを願はぬと云ふ所から其福運だけ吸ひ取り並に拭き取って而して其福運のない殼の錢を渡すと云ふ意味である、勿論大きな商賣をする茶商人はそんな手間の掛ることはしないけれども普通の人は皆斯う云ふ事を遣るので其習慣は地方に至る程一層甚だしいです

支那の輸入品 支那から多く輸入されるものは絹布類が最も多い、其の中でも金襴、羽二重、縮緬、緞子、縞珍、綾縮、綸子、縞子、モミ、唐縮緬、白地薄絹、絹絲、絹打紐其他銀塊、藥種等も

多く輸入されます、支那の輸入品中の大部分を占め而して西藏に於て輸入品に對し一番洋山金を費やす所のものは茶である、併し此茶はドノ位西藏國中へ入って居るか、計算をして見ることが出来なかつたです、拉薩府へ出て來る丈けても二十五萬圓程のものであらうと思はれる、確實な事は無論分らんです、東部西藏即ち西藏半部に賣込まれる茶は拉薩府に輸入されるものより尙ほ餘計あらうと思はれる、ナゼならば東部地方には住民が最も多いから餘程多いだらうと思ふ、元來西藏人はソんな貧乏人でも茶がなくては一日も居られないと云ふ有機で大抵茶を買ふことになつて居るが其茶を買ふことの出來ん者は富貴な人の飲み洋を貰つて其洋を煎じて飲むです、デ茶二斤を固めた所の長方形の茶塊(長さ一尺幅六寸五分厚さ三寸)一個が我々が拉薩府で買ひます直段が二四七十五錢、ソレは番茶の極く悪いのである、枝のない葉ばかりの茶は五四、時に依ると五四五十錢位する

ともある、拉薩府で二四七十五錢の茶は西北原に行くと大抵三四七十五錢程になつて居ります、次に

ブータン其他の輸入品 ブータン或はシツキム地方から山藪で採へた布、羊毛の廣幅布、

木綿絲の廣幅布類が大分輸入されます尙ほ印度、カシミール及びネパールの方から穀類、乾葡萄、乾桃、乾棗及び藥種其他寶石類では金剛石、珊瑚、琥珀、瑪瑙、琥珀、琥珀、琥珀類であるが就中其大部分を占めて居るものは珊瑚珠と瑜と云ふ物を飾る寶玉である、品の良いものは金剛石より尊まれて居る、其代り良い石になりますと小指の頭程の大きさのものでも一千二百圓もするです西藏へは金剛石の極く良いものは餘り來て居らん、貴族の家でも普通の中の上等を用ひて居るに過ぎぬ、珊瑚珠は澤山輸入されて居るが日本のやうに無瑕の物は少なく虫の喰つたやうな物が多い、ソレでも西藏人は好んで附けます、色は日本婦人の最も好まない赤色、薄桃色もあるがソレは勅任官と云ふたやうな者が髻の飾りに用ひる、ナカク立派なもので大きいのは一個百二三十圓もする、併しサツ云ふ良いのは印度の方から來ずに支那の方から來るです、印度から入って來る珊瑚珠は皆な虫の附いたやな物許りて其外極く安い枝珊瑚珠を一寸切ツテ先を固めたやうな細長い玉を繋ぎ合はした珠數も澤山入つて來るです、年々西藏に入る珊瑚珠は大變なものは是れ程といふ豫算は取れないが其多くはネパールとカルカッタの方から入つて來る、下等社會では珊瑚珠が高いものですからガラス

玉を澤山買入です、其ガラス玉は珠數にするのていろ／＼の色合の珠數が拉萨府の露店に晒されてあります。夫等は田舎の人が出て来て澤山買って歸る、ソレから日本で拵へた賈珊瑚珠も澤山入る、此珠には初め随分人が欺されて金を澤山出したてすけれども今では餘り澤山来て居て本珊瑚珠と分ち得ることが出来るものです。から人も欺されなくなつて相場も下落しました、けれども矢張相當の直段に賣れて居るものと見えて續々商人がカルカッタから買入れて來るです、又印度から銀塊、銅、鐵、眞鍮の類が澤山輸入され此外に西洋小問物と日本機寸も多く入るです、デ、經濟上から云ふと輸入品が非常に多くつて輸出品が少ないからドウしても西藏では金がなくなつて困難であらうと思はれるのに其實決してサウでない

西藏の財源 は蒙古の方から餘程來た、其金は蒙古人が只物を買ひに來るよりカラマに上

げに來たのが多い、其澤山な金が詰り西藏の國のものになつたのでソレで幾分か是迄補ひを付けて居つたのです。西藏は政治上の鎖國を嚴格に守つて居るけれども通商上に於ては決して國を鎖すことが出来ない。今突然通商上の鎖國をすれば西藏は必ず大饑饉を來たすか或は内亂が起るかするであらうと思ふ、ナゼならば是迄は蒙古から輸入される金が澤山ありまして其金に依て西藏の財政と經濟が維持されて居りましたけれども近頃は蒙古から餘り金が來なくなつたてす、ソレは日清戰爭以來餘程少なくなつた其上に各國聯合軍が北京侵入後は殆ど西藏に來る金はなくなつて了つたてす、既



僱 商 群 牛 駝 荷 物 を 背 ぐ

に西藏に留學して居るモンゴリアの僧侶すらも自分の家から送らるべき等の學資金を送られんので非常に困って一時學業を中止せねばならんと云ふ位に立至って居る者も澤山にある、従って昔はモンゴリア人は學問ばかりして決して他の俗人社會の業務を取ると云ふことはなかつたですけれども此頃は西藏の僧侶と同じやうに俗人社會の事業に従事しなければ食を得られないと云ふ哀れな境遇に立至って居る、夫位ですから西藏へ入るべきモンゴリアの金は無論入って來ない、加ふるに生活の程度が段々進んで來て今より廿年以前は貴族と雖も餘り奢らなかつたものが段々他國と貿易するに従って外國の事を見習うて幾分か體裁を繕ひ便利を謀るやうになつたので自然金も餘計に掛るやうになつたです、けれども商賣をしないと金を得ることが出來ない、其商賣も只内地だけで遣つて居つた分では到底いかない、多くの利益を得るには外國に出なくてはならんと云ふ所から少し有力の資産家及び僧侶杯はドシドシ支那、印度、ネパール地方へ交易に出掛けて行く

通商上の鎖國の利害　　ですから、突然通商上の鎖國を遣りますと此頃は支那から仰ぐ所の物品よりか印度より仰ぐ物品が最も多いのですが其品が全く止まつて了以第一日用の需用品に差支へるです、ソレはマア辛抱するとした所で自分の國の内には有り餘る所の羊毛を賣捌く道が附かなくなるです、是は兎も角一番の大得意は英領印度です、カシミールの方にも行くけれども是れも矢張英領です、通商上印度と絶つて了ふと云ふことは到底出來ない、其有り餘る羊毛を自分の國丈

けて使ふと云ふことになれば又以前の如くに直段が下つて來るてせう、直段が下れば遊牧民は金を得ることが出來ない、左なきだに此頃一體に食物が高價になつて居るのに最も多い遊牧民が金を得ることが出來んとあつては其結果は知るべし必ず饑饉が起るに違ひない、だから到底通商上英領印度と絶つとは出來ないです、ソレでも前の如くにモンゴリアから金が澤山來ますればソレは随分通商を遮断しても立行かんこととありますまいけれども今云ふ通りモウ此金の來る見込は殆どなくなつて了つた、ですから繰返すやうですが到底西藏其者は通商上鎖國を遣ると云ふ譯には行かん、只政治上鎖國を守つて居ると云ふ丈けに止まるです、斯の如く西藏では段々商賣の必要が起つて來た所からして此頃は西藏人の凡て、鹽とか鹽とか盲目とか云ふ不具者或は子供位を除くの外は大抵商賣人と云うても宜い位、そんなら百姓でも商賣をするかと云へば矢張します夏の間は百姓をして居ますけれども冬は別段用事がないから北方の沼鹽地へ鹽を買ひに行つてソレで其鹽を又南方のネパール地方或はブータン、シッキムの方へ賣りに出掛けるんです、僧侶も商賣をするとは先にも申した通りである、一個の僧侶として商賣をするのみならず又一大寺院が其寺院の資格で商賣をする、其時分には大分大きなもので商隊を組立て、或は百疋乃至二百疋の馬に二十人乃至三十人の人が附いて其馬に載せ得らるゝ丈けの荷物を積んで交易に出掛けるです、

政府其者も亦商賣　　をして居ますので政府の商隊は多く北京或はカルカッタの方に出掛け

る、けれども商隊に属する人間等は決して自分達は政府の商業家であると云ふことを云はない、詰り一人の商業のやうに云うて居るけれども其政府の商業家は西藏國內では非常な勢力を持つたもので到る處で馬を徴發し食物も亦地方々々から皆納めさせながら商ひに出掛けて行くです、サウてすから普通商業家よりも政府の商賣の方が餘計儲かる譯である、華族も矢張商賣をする、ソレは商隊を他國へ出すのもあり又全く商賣をせずに自分の領分から上つて來るものだけで衣食して居る者もある、併し此等の人でも全く賣買ひをしないかと云ひますと矢張遣ります全體西藏には餘程奇態な風があつて私共が華族の家杯へ行き何か珍らしい物でも見て之を欲しいと思ふと無遠慮に「幾らですか」左様此品は幾ら々々です」そんなら之を私に賣つて下さるまいか」と斯う出掛けると「イヤ直段が極まれば賣らんこともない」、「ソレぢやドノ位まで負けて下さるか」、「イヤそれは可けない」と押問答の末直段が極まるとデキに自分の家に飾つてある道具を平氣で賣るです、尋ねた人も別段其人に耻を搔かしたのドウのと云ふ考もない、「イヤこりや私の處では要る物だから賣れない」、「ア、さうですか」と云つたやうな調子で一向平氣です、何處の家へ行つてもサウ云ふ風ですから小僧までが矢張賣買を遣つて居る一寸拉薩府へても行つて何か西洋小間物の奇態な物でも見付け出して買つて來ると其品を寺へ持歸つて外の小僧を欺かして賣るとか外の物と取換へるです、サウ云ふ風で誰もが商賣をする、只商賣をしないのは所謂不具者位の者である、其商賣も誠實に遣るのでなく前

に云ふた通り懸直を云つたり人を欺いたりすることが多い、ドウも西藏一般の人民は至極狡猾な氣風に養成されて居るです、尤も未開の所では眞實の佛教が盛に行はれて居らんから斯んな風になつて居るんでもあらうけれども兎に角商賣しなくては安樂に月日を送つて行くことが出來んと云ふ氣風が西藏一般の人民に行渡つて居るです

第九十九回 貨幣と版木

貨幣は銀貨一種

其賣買の遣方は物品交換もあり又銀貨で買ふこともある、西藏ではたつた

二十四錢の一種の銀貨がある丈けてすから買物をするには小さな買物は出來ないソレで切つて使ふのです、半分に切つたのが十二錢で、三分の二と一とに切分け其一方が八錢で他が十六錢、ソレ丈けしか分けられない、所が其切方が餘程面白い、半分に切つたからと云うて半分眞的にあると云ふのは餘程珍しい、多くは中の部分を繰抜き又外側を幾分か削つて了つたもので三日月形にしてあるものが矢張半分に通用します、所て一番細な買物は幾らかと云ひますと四錢の買物が出來る、其四錢の買物をするには三分の二の十六錢の銀貨を持つて行つて向ふから半分の銀貨即ち十二錢の釣を取るので、所がドウかすると其半分の銀貨が賣手にないことがある、スルと今度は自分の方で半分

の銀貨と三分の二の銀貨(十六錢)と二つ持つて行く、デ向ふから一タンガー即ち廿四錢の圓銀を取
 ッて四錢の買物をして来る、八錢の買物なれば向ふへ一タンガー渡して十六錢の奴を此方へ請取る
 ソコで西藏では四錢をカカン、八錢をカルマ、十二錢をチエーカ、十六錢をシヨカン、廿錢をカー
 チエ、廿四錢をタンガー、チクと斯う云うて勘定をして行くですが法王領の西藏では是より外に遣
 方がないのです、けれどもカカン即ち四錢の買物をするのも拉薩府とシカチエでは出来ませけれど
 も外へ行ッては全く出来ない、モウ外の土地に行けば半分の買物も出来ない、即ち一タンガー(廿四
 錢)以下の買物は少しも出来ないです、此貨幣の外に金貨もなければ銅貨もない、又是れより大き
 い貨幣もなければ小さいものもない

其地方通用の銀貨

所が西藏の西北原で英領印度に接し而して法王領でもあり又印度領で

もあるやうな地方に於て其地方に王様杯がありますと矢張半分の銀貨を發行して居るです、其貨は
 其地方で通用して居る丈けて法王領の西藏では通用しない、ソレは平圓の形である、斯う云ふ貨幣
 ですからナカ／＼買物をするにも餘程暇が掛ッて不便で御座います、商賣の事は此位にして、
 十一月下旬前にお話しましたバーラー家の公子でダーチリンで遇ッた人、其人が金がなくて餘程困
 ッたものと見えて私の處へ金を借り人に人を遣しました、餘り澤山云ふて来たものですからドウせ還
 して呉れないに極ッて居ると思ッて其半額だけ手紙を添けて下僕に持たして遣りますと大變怒ッた

さうです、私は乞食に使を遣ッたのではない、金を貰ふ爲めに遣ッたのではないのに金を呉れるとは失
 敬千萬だ、そんな物は要らんと云ふて突還して来たです、要らなければ何も遣る譯はないと思ッて打
 棄ッて置きますと今度又手紙を遣して先きに云ッた丈け入用だから是非貸して呉れると云ふ、詰り
 威張ッた事を云うて居ますけれども矢張餘計貰ひたいのです、仕方がないから貸して遣りました、
 其後程なく其下僕は私の日本人たることを知ッて居るものですから五十圓と云ふ金をネゲりました
 けれども私も其主人がダーチリンに於ける身持の悪い事を知ッて居り升から彼は私の事を許いて
 害を加へるやうな事も能うしなかつたです、ソレから十二月頃は私はお經を買ふこと許りに掛ッて
 居ッたです其前から勿論經文の買収を遣ッて居りましたけれども十二月になッてからは金が餘程出
 来たものですから外の者を買ふ必要はない、只お經を澤山買ひたいと思ッてお經許りを買ひました、
 併し普通の經文は本屋で賣ッて居るけれども少し参考書にしたいとか或は込入ッた六箇しい書物で
 あるとソレハ本屋には決してない、然らばドウして買ひ整へるかと思ひますと

各寺秘藏の版木

其版木は寺々に別々に在るんです、例へば文法上の學者の出た寺には文典

の版木があり又修辭學上の學者の出た寺には其人の著述された版木が残ッて居ると云ふやうな譯
 で歴史も論部も皆サウ云ふ風で保存されてある、斯様に版木が別々に有るものですから其寺々へ版
 摺人を遣はして刷らせなくちやアならん、先づ紙を買ひ整へる其紙は紙の樹で拵へたのでなく草の

根で拵へるのです、其草は毒草で根も矢張毒です、其根は白い色で繊維が澤山ある、其繊維で以て紙を製造します、紙質は随分強いが眞ッ白な紙はない、少し黒くツツて日本の鹿紙のやうなものである、サウ云ふ紙を澤山買整へて版摺にカタ（進物用の溝絹）と版代とを持たして遣ります、版木の借賃は寺に依て高い處もあり安い所もあれども大抵百枚刷ッて一タンガー即ち二十四錢或は四十八錢最も高いので一四二十錢位の所もあるです、サウ云ふ風にして三人なり或は六人なりの人を遣はして版を刷らせるのですが版摺は大抵二人で一人は刷上げたのを纏める役目である、版摺と云つた所が日本の人やうにナカ／＼手早くは行かんです、ソレに茶を喫みながら仕事をするのですから極く呑氣なもので仕事は一向拂取らない、ですから割合に入費が餘計掛る、デ版摺一人の手間賃が向ふ扶持で五十錢づゝ遣らなければならん、ですからナカ／＼書物は高く附くけれどもチャンと摺本になツて居るものは極安いです、其代り紙も悪し中には版の悪い所が澤山ある、そんな書物でも賣ツて居れば宜いが大抵本屋で賣ツて居るのは祈禱のお經と僧侶學校で用ひる問答の教科書です、其外少し面白い傳記とか或は茶話のやうな本がある丈けの事で少し學者の欲しいと思ふやうな書物は一つもないです、ソレは今西藏では博士になる爲めに僧侶學校に入ツて教科書を學んで居るけれども左ればとて参考の爲めいろ／＼の書物を調べると云ふやうな面倒な事を遣る學者が少ないからでありませう

本屋は皆露店 其本屋なる者も自分の家て店を出して居ると云ふものはない、チヨーカーン即ち大釋迦堂の前に廣場がある、其廣場の石の上に十人許りの本屋が大きな風呂敷を廣げ其上へ本を列べて店を出して居る、ソレも日本のやうに擴げて見せない、皆積立てゝ列べてある、此外に拉薩府では本を賣る



慧海師元且に朝嶽の蔵を祈る

處はない、シカチエでは市場に二三人サウ云ふ露店を出して居る丈けて其外にあるかないか知りません兎に角私の行つた都會では此二つしか見なかつたです、版摺に任しても其版木を摺ることを許されん場合には自分が他から紹介状杯を貰ひワザく出掛けて行つて刷らして貰ふやうにしてソレで漸く書物が整ふと云ふ始末ですからナカく六ヶしい、マアさう云う風にして大分書物も集つたです、デ其書物は皆セラの寺に置いてあるものですから私の居る舎の近所の坊さんは呆れ返へつて「讀まない書物を那んなに澤山ドウするだらう、實に那の人は遠い國から來て居るのだから那れ丈け澤山な書物を持つて歸ることは出來やしない、博士だつて那の人の持つて居る書物の三分の一も持つて居るものはありやしない」と云つて非常に怪まれた位、サウ云う話を聞きましたから其後買つた書物は皆大臣の宅へ持つて行つて自分の部屋に集めて置いたです、扱十二月も末になつて所謂大晦日となりました、其夜は特に支度をして先づ拉薩府の釋迦堂へ指して燈明を上げに自分の小僧を遣りました、ソレはバタの油を拵へて拉薩の釋迦牟尼如來の前に列んである黄金の燈明臺に其バタの油を注いで上げるのです、別段黄金の燈明臺へ上げたからと云うて非常に御供養になると云ふとも御座いますまいけれども詰り釋迦牟尼如來に對してデカに燈明を上げますには黄金の燈明臺に入れなければ上げることが出來ない、デ釋迦牟尼如來に供養の燈明を上げる時には其燈明臺を借る代として二タンガー納めなければならん、デ私は自分の舎に在つて先づ釋迦牟尼如來の掛物を掛け

其前に釋迦牟尼如來の佛舍利を納めてある舍利塔を置き大きな銀の燈明臺を三ツ列べてバタの燈明を上げ其他澤山な供養物を供へ佛名を唱へて禮拜を致し最早や十二時過ぐると思ふ頃から法華經を唱へ始めました、デ午前四時に至つて

祝聖の儀式

を擧げました、祝聖の儀式と云ふのは神聖なる明治天皇陛下萬歲萬々歳皇后陛下の萬歲萬々歳並に皇太子殿下の萬歲萬々歳を祝願し次で日本國家の威力が旭日の輝く如く萬國に光被せんことを祝願するので實に芽出たい願文である、嚴肅に其式を行ひ其願文を讀み立て、後に自分一人で感じました事は西藏の拉薩府に於て神國の天皇陛下、皇后陛下並に皇太子殿下の萬歲萬々歳を祝願したのは大日本帝國發まつて以降殆ど三千年を経ましたけれども今始めてかと思ひますと何となく有難き感に打たれて我れ知らず涙が溢れました

高原におとす涙は日本の
天が下なる草の露かも

デ残りの法華經を讀みながら窓から外を見ますと初日が東の雪峯の間から昇り掛けたです雪に映ずる初日の美しさに加へて我窓の向ふなるセラ大寺の廣庭には幾羽の鶴が徐に歩みつゝ幾聲となく叫んで居る其景色の壯麗なるとは景色好きの我國人に見せて遣りたい程の心地がしました、殊に法華經を讀んで居る曉に鶴の聲を聞き實に芽出たいと云ふ所から

第 百 回 願 文 會

うたひつる聲に明けゆく高の原
 あづまの君の千代やことぶく
 たへづるや妙のみのりの花の庭に
 妙のこゑもてみのりことぶく
 と詠じましてソレで一月一日を芽出たく過ごしました

幾萬の燈明 一月四日即ち西藏曆の十一月二十五日からサンジョエと云ふことが始まつたて
 す、此日は新教派の開山デエー、ソンカーワのお逝れになつた日で大變な騒ぎ、西藏人は皆家屋の
 上て百の燈明、千の燈明を供養するのですから拉薩の市中、セラの大寺、ガンデンの大寺ソレから
 其間の村々の家の屋根には幾千幾萬の燈明が上つて居て其美しさは喩へやうがない、此日は澤山御
 馳走を拵へてサウして晝の中は皆遊び戯れて踊りを踊る歌を詠ふ、それは誠陽氣な日です、
 併しソ、に一つ随分困ることがある、此サンジョエを行ふ爲めに拉薩府の人達は大抵自分の家へ出
 て来る目上の人に對して金を呉れとそれは此十一月十日過から乞ひますのでサンジョエの爲めに乞

食をするのは當り前だと云つて随分立派な家の人が金を呉れと云ひ出す、私共も彼方此方に知つて
 居る人があるので随分金を取られました、彼方で一タンガー此方で二タンガーと云ふ風で丁度五圓
 許り入りました、マタ來年になつたならば其倍も三層倍も掛るだらうと或人が云つて居りましたが
 サウかも知れませんが、知つて居る人が殖えれば殖える丈け餘計取られるのですから、サンジョエ
 と云ふのは西藏曆の十一月二十五日の夜の十二時から始まりますので其意味は普賢菩薩の願文會と
 云ふ意味です、二十五日の夜から十四日間其事を遣るので毎夜十二時から朝までお經を讀みます、ソ
 レは誰かが詣らなければならん、私も誠に結構な事ですから參拜に參りましたがナカ〜本堂の中
 は靜肅なもので普通の時から見ますと僧侶も夜分て來る人も少なしソレにお經の唱へ方の優しい事
 と云ふたら音調が何となく嚴格であつて自ら人の心を鎮めるやうな力がある、サウ云ふ處を見ると
 如何にも極樂世界の菩薩達が集つてお經を讀んで居るかのやうに思はれる、

堂内の粧飾 何故なれば普通の時と違つて本堂の内は綺羅錦繡で飾り付けられて居る五色の
 支那縮緬で捲立てられた柱もあれば又或る大きな柱は赤地に青と白との唐草模様の羅紗で捲立て、
 ある、デ常には何も掛つて居らなかつた壁の上にも又柱の上にも西藏では最上等に位する佛畫の軸
 が澤山に掛けられて居る、其他いろ〜の飾物があるのみならず本堂の中には三千五千のバタの燈
 明が燈つて居るです、バタの光と云ふものは菜種油の光よりも非常に白く一寸瓦斯の火に似て餘程

明るいです、サウ云ふ中でお經を讀んで居ると何となく自分は有がたい觀念に打たれるです、大抵人は境涯に化せられるものであつてドウも其處へ行つて見ると自然に有がたくなりなくちやならんやうになつて来る、尙ほ其讀みつゝあるお經の文句の意味杯を考へると坐ろに涙の出づるを禁め得ない、斯る有がたい普賢菩薩の願文會に於ても悪い奴はドウしても化せられぬものか、随分妙な事が澤山ある、夜が明けて僧侶が外へ出て来る時分には信者が布施をすると云つて「ケ」を出します、一タンガーづゝ出すこともあれば半タンガーづゝ呉ることもある、僧侶は出掛けにソレを貰ふのですが悪い奴はソレを一遍貰つて又クルツと裏から廻つて来て又一遍、都合が好ければモウ一遍、デ三遍取つたとか四遍取つたとか云ふやうな人間がある、ソレは成べくサウ云ふことをしないやうに警護の僧を附けてある、所が其警護の僧が訝しい、自分が見張をして居りながら成べくソレを取らせるやうにする、取らして其金は自分が取つて了ふです、小僧杯は其見張に吩咐けられて旨く人の間を潜り抜けクルツと廻つて又一遍取つて来て私は是れ丈け取つて來ましたと云つて其人に渡すです、スルとモウ一遍遣れなかつたか位の話、若し小僧が吩咐けられた時分に嫌がつて遣らないと何かに托けて太い棒でブン擲ぐられる小僧は擲ぐられるより盜をする方が樂ですから其命に従つて盜を遣る、其事が知れてブン捉まつてブン擲ぐられても平氣です、尤も擲ぐられる丈けの事で夫れが爲めに寺から追出されると云ふことも何もない、寺ではサウ云ふ時分の盜人に對しては極く寛大です

素より是れは本當の盜人とは云へませんが併し人の家に在る物を一つでも取つたと云ふ場合には其僧侶は直ちに退寺を命ぜられるのに兎に角斯う云ふ場合に限り二度取つても三度取つても擲ぐられる位の事にて濟むのは妙です、併し私の居つた寺では酒に對しては極く嚴しいもので、酒を飲んだ事が知れると寺を追出されるです

壯士坊主の奇粧

サウ云ふ悪い事をするのは壯士坊主に最も多いのですが壯士坊主と云ふ

のはスツカリ頭を剃つて居るのもあり鬚鬚の毛を奴のやうな工合に見せて居るのです併しソレを嚴い僧官に見付けられる、デ其毛を下に垂らして吊鬚のやうな工合に見せて居るのです併しソレを嚴い僧官に見付けられますと其鬚鬚に生えて居る所の毛を引抜かれて了ふ、一時に澤山の毛を抜くから血が出るです、誠に酷たらしい有様が見えて居るけれども常人は却て平氣です、否なサウ云ふ風にして如何にも勇氣凛乎たる有様を人に示すのであると云ふ、併し成べく僧官に見附からないやうに本堂杯に來る時分には其毛をクルツと耳に巻いて居る奴もあれば、顔一面に銅炭とバタを塗付けて毛のあるのを分らん様に隠して居る奴もあるです、一寸見るとお化のやうですが毎日そんな者を見て居ると又何ともなくなつて了ふ、そんな事までして少し許りの毛を蓄へて置くのはドウ云ふ譯かと云ふとソレが壯士坊主仲間では非常に意氣だ粹だと云つて羨やまれるからです、尙厭な事は斯う云ふ嚴肅の法會の時に當つて兎に角金を澤山貰へるものですから貧乏な壯士坊士の常として旨い肉を餘計喰ふ奴も

あり又小僧を慕ふ壯士坊主もある、デ夜の十二時頃に本堂に出掛けて行く所の小僧を捉まへて泣き喚めく口を塞ぎながら何處かへ引張って行くと云ふやうな事も折々ある、其事が知れた所で別段罪にならん、大抵其儘打棄つてあるです、ソレはみんなサツ云ふ事を遣るのですからソレを餘り喧しく言ふと却つて其喧しく言出す僧官が不首尾になつて来るものですから其儘打棄つてある、多い小僧の中には面白半分其處へ行く奴もある又旨い物を呉れるとか玩具を呉れるとかお金を呉れるからと云ふて慾得から好んで行く小僧もある、甚だしきは少し金でもあるとか或は豊に暮して居る美しい僧侶を見ると其小僧は出来得る限り小ざつぱりと奇麗に支度をして来て其金持の僧侶を誘ふ奴もあるです、サツして袈裟杯を拵へて貰ふ、誠に穢はしい話ですけれども實際に行はれて居る事ですから…サツ云ふことが澤山行はれるから屢々喧嘩や決闘が生ずるので實に見苦しい譯です

破戒僧の表裏 斯う云ふ大罪を犯して恬として愧ぢない所の人間がです、却て虫を殺したり虱を殺したりすることを大いに恐れてしないやうな事もあるです、ソレから又何でもない寺の規則とか云ふやうな事を一生懸命に喧しう云ふて守つて居る、兎角小さな事に許り拘泥して「イヤ着物の着方は斯う云ふ風に遣らないではならんとか或は物の言ひ方は斯うだとか喧しく言うてソレを守るのが道徳を積んだかのやうに思つて居る、ソレから又堂とか或は塔へても參詣した時若し其堂又は塔を右へ廻らずに左廻りをして行くとモウ大罪を犯したかのやうに喧しう言ふてすから人を殺す

程の悪い男でも矢張堂や塔のある處へ行きまますと必ず右廻りをして決して左からは行かない、一寸した石瓦のやうな佛様の破片でもあると必ず右へ指して廻つて行く、ソレは決して悪い事ではない、コレには因縁のあります、なれども、併しそんな小さな事に非常に注意するに拘らず人の小僧を夜中擔げて往つてからして破戒な事を行つて平氣で居ると云ふ其眞意が分らない、朦朧と云つて宜いか馬鹿と云つて宜いか、所謂是れが顛倒衆生と云つて全く逆な行ひをして居る者であらうと思はれる

西藏の 一休和尚

之れに就て面白い話がある、丁度日本の一休和尚のやうな方が西藏にも

あつて其人の名をツク、ニヨンと云うて居るです、是れはツクバーの國に生れた氣狂ひと云ふ意味ですが實は氣狂ひではない、非常に尊いラーマであつて詰り世間がいろ／＼の事に迷うて居るのを悟らせやうといふので一休和尚のやうな工合に行脚していろ／＼の面白い事を遣つたのです、ですから此人の傳記は丁度一休和尚の傳を讀やうである、西藏と日本とは勿論人情が違つて居るからソリヤ幾分か違ふ處もあるですが人を笑はせるやうな事をして導くと云ふ點に至ては全く一致して居る此ツク、ニヨンが或時新教派のラーマと道連になつたところがある、其時にツク、ニヨンは途に小さな石があるのを見て其石をばツザ／＼避て遠くを廻つて向ふの方に行つたです、所が又大分大きな石遭遇ひました、此は是非廻らなくては行ない石ですのにはせせずしてバツと飛躍て向ふに行つ

た、スルと新教派のラーマが不思議に思つて「何でそんな馬鹿な真似をするのか大きな石は廻らなくちやア危ないぢやないか、小さな石はヒヨツと飛躍しても平氣なものぢやないか、ドウも馬鹿な事をする人だ」と理屈詰りに問ひますとツク、ニヨンは笑つて「併しお前達の宗派のラーマ達は俺の遣つて居る通りの事をしてるではないか、是れが馬鹿ならお前達も皆馬鹿だ」ソリヤ又何故か「能く考へて見るが宜い、虱を殺す位の小さな罪を非常に恐れてからして遠廻りする位の事を遣つて居ながら男色に耽るとか牧畜を遣つて生物を殺すやうな仕事をして居るではないか、サウ云ふ大罪を犯すを何とも思はずにヒヨイと飛躍して了ふてはないか、ソレだから俺もお前の方のラーマのする通り遣つた」のだと斯う云ふた所が連れのラーマは大いに耻入つたと云ふことです、デ、サンジヨエ(普賢菩薩の願文會)と云ふものは表面は非常に有がたい裏面だつて矢張心ある人には實に有がたいものですけれども其有がたい事までが悪い奴の爲めには悪い事をする機會、悪事を行ふ場所に使はれて居るんです、

第一百一回 法王政府

政府の組織

次に法王政府の組織に移ります、法王政府は非常に錯雜して居りますので充分に

述べることは困難である、殊に私はサウ云ふことを専門に調べたのでない、假令専門に遣るとした所が若しサウ云ふことを専門に取調へると云ふと如何に親しい私の知己の大藏大臣でも屹度疑ひを起すに違ひないです、ですから成るべくサウ云ふことは此方から特に質問しないやうにして何か大藏大臣と話しつゝある間に折に觸れて少しづつ尋ねて見たり疑ひの起らない範圍内に於て研究したんですからドウせ充分な事はない、デ、彼方此方と尋ね得られる限りは大分尋ねて見たですが尙ほ細な部分に至つては不明の點も大分にあるです、此事は始めから斷つて置きます、偕て法王政府の組織は俗人と僧侶とに依つて成立つて居る、其數は殆ど均しいので先勅任官の僧侶が百六十五名ある、俗人も亦百六十五名もある、僧侶の勅任官をチエ、ツンと云ひ俗人をツン、コルと云つて居る其勅任官を一般に統轄して居るのは僧侶の方ではツン、イク、チエンモと云ふ四人の大書記官である、四人の内でも其實權を持つて居るのは其中で一番古く官に就いたものである、俗人の勅任官を總轄して居る者はシャツペー(總理大臣)で是れも四人である、此四人の中でも矢張一番早く其官に就いた者に其主權があるので他の三人は只相談に與かる丈けて専ら其相談を決定するのは先任の總理大臣である、

内閣

は總理大臣四人と三人の大藏大臣、二人の陸軍大臣、一人の宮内大臣、一人の教務大臣、一人の司法大臣と僧侶の大書記官とに依つて形造られて居る、此僧侶の勅任官の出で来る家筋は大

抵極つて居りまして決して平民から出ることには出来ない。先づ多くは華族から出ますので、折には眞言族、ボン教族、金剛族から出ることがある、其制度は郡縣制度か、封建制度かどっちとも名を附け難いです、是れから其譯を述べます

華族と人民の關係

一寸見ると封建制度になつて居ります、ソレは華族の祖先と云ふ者は皆國家に功勞のある人で或地方を自分の領分に貰つてある、謂はゞ其地へ封ぜられたやうなもの

て其處には其地に屬する所の平民がある、デ其華族家と家屬及び平民との關係は殆ど國王と人民との關係のやうなもので其平民を生殺與奪する所の權利は勿論其華族に在るんです、又此華族は平民から人頭税を徴収します、其人頭税は極貧乏人でも一タンカー位出さねばならぬ、其上の人になると十タンカーも百タンカーも納むるものがある、例は非常に出世したとか或は澤山な財産があるとか云ふ人はサウ云ふ大金を納めなければならん只人頭税を納める丈ではない、其華族に對しては自分土地を其華族から貸して貰て居ることになつて居るですから、其租税を納めなくてはならん、ソレで此人頭税と云ふものは随分苦しい税ですけれども、納めなければ擲ぐられた上に自分の財産を沒收されて了ひますから非常な苦しい思ひをしても歳暮には人頭税を納めなければならん、其税を納むる苦しさには堪へずして坊主になる者も澤山ある、坊主になると人頭税を納むる必要がないからです、税を免かれる爲めに坊さんになる位ですからドウせ學問をする者もなければ佛教を學ん

て人の爲めに働きをせやうと云ふ考のあるべき筈もない、或時私の師匠のチーリンボチエと云ふ方が言はれたとに「此節我國では坊主の數が澤山あるから佛法が盛である」と云つて大に悦んで居るがドウだらう、ゴロ／＼と要らない石瓦が澤山あるより金剛石が二つ三つある方が尊いではないか、ドウも困つたものだ」と歎かれた事がある、ソレは其譯なんで多くの坊主の目的が既に人頭税を免かれると云ふに在るのですから……併しながら一方から考へると實に西藏は殘酷な制度で貧民は益々貧に陥つて苦まねばならぬ、其貧民の苦しさ状態は僧侶の貧學生より尙ほ苦いですドウ云ふ有様に在るかと云ふと僧侶の貧學生は喰つたり喰はなったりして居つても兎に角月に一遍づゝ學祿を貰ふことに極つて居るし又折々は布施物もあるです、デ自分一人の事ですからドウやら斯うやら其日々々々を過して行かれるですが俗人の貧乏人は女房がある、ソコへ小供でも出来たら夫れこそ大變です、どんなに其子供を育てても多少の金は掛る、其金は何處から借るかと云へば地主から借る外はない、借りた所で滅多に返せるものでない、返す見込のない金をドウして地主(華族)が貸すかと云ひますと其子が大きくなつた時に其家の奴隷にするのです、ソレを見込に金を貸して遣るので、と云うた所でドウせ澤山な金は貸さない、無論少しづゝ貸して十圓位になり其子供が十歳位になると其十圓の金の爲めに十五年も二十年も只使ひをする」と云ふ譯です、ですから貧乏人の子供は生れながらの奴隷 誠に可哀さうなものです、華族と其華族に屬して居る所の平民との關

係は先づ斯う云ふ風ですから其點から見ると封建制度で其華族家なる者は所謂諸侯の位置を占めて居るやうに思はれる、併し又其他の點から見ると又郡縣制度であると思はれる事もある、何故なれば華族なる者は大抵拉薩府に住して居って自分の領地に行つて居らないのが多い、縦んば其地に家はあつても留守番だけを置いて自分達は拉薩府に居るサウかと思ふと政府から命令を受けて或郡を治めに行く者もある、デ華族に管轄されて居る平民の外に又政府へ直接に屬して居る人民も澤山ある、尙ほ華族に屬しつゝ又政府から幾分の税金を徴収されるですすから人民は二重の税金を拂はなくてはならん、人頭税まで混ぜますと随分澤山な税金を納めなくてはならん、其勅任の僧侶兩官は法王の命令を受けて三人なり或は二人なり司法行政の權力を握つて地方へ租税を取立てに行くです、地方から取立てた租税は勿論中央政府へ納めるのです、其税は物品もあれば或は銀貨もある、殊に金銀杯から納まる所の税の中には黄金もある、ソレから輸入品に課した税金杯も矢張中央政府に納めるです、

租税の費途

中央政府は其集つた物品及び税金を何に使用して居るかと云ひますと其大部分は僧侶を養ふことに使用するです、即ち拉薩府に居る二萬四五千の僧侶と各地方に散在して居る僧侶を保護して居るのです、併し其寺々の坊主なり何なりを凡て政府で引受けると云ふ譯ではない只事のあつた時分に政府で半分出すとか何とか云ふ譯で所謂其寺の財産に應じて政府が補助をするの

です、其次が佛堂を普請するとか或は佛陀に供養する其爲めに随分金が澤山掛る、サウ云ふやうな處に多く用ひられて居る、ソレから親任、勅任及び其以下の官吏に矢張年俸を與へるです、其金は僅なもので、總理大臣其人でも年に麥が六百石内外、大藏大臣が麥三百六十石、ソレもキツチリ貰ふかと云ふに餘程妙です、貰はずに打棄て、置くのもある、私の寄寓して居つた現任大藏大臣は大藏大臣になつてから丁度其時分が十年目位ださうでしたけれども一石も貰はなかつたさうです、「一鉢ドウ云ふ譯か、義務的に遣つて居るのか、ソレとも外に何か収入があるか」と云ふと「自分の家に屬してある屬領から上つて来る物があるからソレで澤山だ、別段に法王に御厄介を掛けてソレなに澤山貰ふにも及ばぬ」と斯う云つて居るです、併しみんなサウ云ふ風に遣つて居るかと云ふと「否キチン」と請求して受取る者もあるけれども少し家の樂な者は大抵は貰はぬことにして居る」と云ふ、尤も中にはサウ云ふ好い顔をして居つて内實賄賂を澤山取る方もある、しかし私の居つた大藏大臣杯は賄賂をドレだけ持つて來なければ事をせぬと云ふやうな事は決してなく、只向ふから好意上で持つて來る物を請取つて居られる丈けて外の總理大臣のやうに澤山取らないやうでした

僧俗官吏の職務 デ此百六十五名の僧侶の勅任官は平生何をして居るかと云ひますと地方の知事のやうな者に派遣される、尤も其時は俗人一人と僧侶一人と二人づつ出て行くです、又何か六ヶしい裁判事件でも起りますと地方へ指して僧俗組合つて二人或は四人づつ派遣されるともある、

ソレは向ふて取調をして裁きを付けて来る丈の實權を待つて出掛けて行くのです、是迄の例に依ると向ふて取裁くと云つても詰り賄賂の多少に依て事を決するやうになつて居たさうですが現今の法王はナカ／＼遣人てサウ云ふ事を遣つて来たことが知れるとデキに其者の財産を没收し其地位を奪ひ取つて了ふものですから大に恐れて近頃は十分に能く裁斷を下すやうになつたさうです、併し大事件に是非共法王でなければ行けないとか又大變な惡漢を重き刑罰に處するとか云ふ場合には必ず法王の處に持つて来るです、スルと法王は其事を裁斷して命令を下すのですが斯う云ふ所から考へて見ると法王の資格と云ふものは餘程面白いものです、一私人を刑罰に處して或は之を殺せとか又は流罪にせよとか云ふ命令を下すと云ふことは政治上俗人の上から云へば當然の事で少しも不思議はないのです、けれども法王と云へば具足戒を備へた比丘である、此戒法の上から云ふと事の善惡如何に拘はらず人を殺せと云ふ命令は出來ない筈です、假令に殺しても宜い者にしては、小乗教の二百五十戒を受けて居る者は決して人を殺すことの命令を下すことが出來ない、法王は固より其具足戒を受けて居る人である、だから其戒法の上から云つたら勿論人を殺せと命令する事が出來ない譯です、然るに法王はソレを遣つて居る、然らば法王は俗人であるかと云ふに決して俗人ではない、妻君もなければ又酒も飲まずしてチャンと小乗の比丘の守るべき事を守つて居らるればこそセラ或はレポン或はカンデンと云ふやうな大きな寺の僧侶が皆此法王の具足戒を受けるのです、私

も法王から具足戒を受けると云うて大變に勧められましたけれども私はドウも其行の間違つて居る人から其戒法を受けることが出來ないと云ふ考へをしたからとら／＼受けなかつたです、假令に王様でも佛法の法則に違つた事をして居る以上は王様であるからと云つて具足戒を受ける譯に行かないです、併し私は此法王から秘密の法だけは受けました、ナセかと云ふに秘密の法は具足戒に係した事でないからです、法王其者が既にサウ云ふ怪しい者ですから其下に及んでは僧侶か俗人か譯の分らない者が澤山ある、俗人て僧侶の眞似を遣つて居る者もあり又僧侶は大抵俗人の眞似をしない者はない位です、前にも申しました通り耕作、商賣等よりして牧畜に至るまで遣るのですから全く俗人と云つて宜い位、只其違ふ所は頭を剃つて法衣を着けて居る丈けである、ですから自然僧侶の中にも壯士坊主と云ふやうな者が出來て軍人の遣ることを日課として尙ほ且つ僧侶の名を保つて居ると云ふ譯です、斯う云ふ譯ですから萬事が非常に紊れて居つて西藏佛教の現今の状態は全く新教派の開山デモンカーツが敷かれた趣意とは反對のものになつて實に見るに忍びない有様になつて居るのです

第百二回 婦人の風俗

拉薩貴婦人の盛粧 西蔵の婦女子の内て一番粹である所の拉薩府の婦人の風俗、容貌、品格、習慣、性質、欲望等に就てお話致します、是れはナカ〜大切な事て婦女子は未來の國民を造るのでありますから其國の婦女子の事を輕々に看過することは出来ない、獨立心の強い賢母の下には米國を獨立せしめたるシーヨジ、ワシントンの出たことを見ても分ります、ですから西蔵の外交政略の事を述べます前に此國人の獨立心の如何にあるかを見ますのが必要で、又これを知るには先づ此國婦女子の事に就て説明する必要があります、始めに風俗の事を述べます、けれども委しい事を云ひますればナカ〜一席のお話では盡きませんから大體を申します、着物の着方は餘り男子と變らない、只幾分か優しいやうに着こなす丈けてあつて着物の仕立方は同じ事である、帯は幅一寸五分位丈は八尺位、マア細帯のやうなものです、ソレは決して結ぶと云ふことはないの、其帯の先の織出しの糸が房のやうになつて居りましてクル〜と巻付けて端切を中へ挟み込んで置くので、ソレから髪を結ひやうですが是れはシカチエ或は他の部落の婦人と違ひ拉薩府及び其附近の女は支那製の大髻を入れて中央から左右へ分けず、實は西蔵婦人の髪は短い方ですから髪を澤山に用ゆる程宜いとせられて居ります、左右へフツサリと犂牛の尾を束ねたやうに分けてサウして其分けた毛を後へ下げて四ツ組に組むのです、デ其兩端は房の附いて居る赤色或は綠色の絹打紐で括り其紐との繋ぎ合せには眞珠の紐を七つ許り連ねた根掛のやうな紐を用ひて兩端の絹括りにして

あるです、ソレから其眞珠の紐の真中には大眞珠或は瑜(綠玉)を入れて飾りにしてある、デ頭の頂には高價な瑜、珊瑚珠、眞珠等で飾られてあるバツク(頭飾環)を巻き其中央にはムーチク、ギ、シャーモ(眞珠朝)を戴いて居る、耳にはエーゴル即ち黄金耳飾塔(平たい黄金塔にて中に綠玉の飾りあるもの)を掛け胸にはドーシヤル(瓔珞)を掛けて居る、此瓔珞は一番高價なものであると三千五六百圓もするさうです、時に依るとソレ丈け金を出しても買調へる事が出来んさうです、ソレからケーター(首飾り)是れも寶玉を集めたもので、其首飾りの真中(胸の上部に下つて居る處)にはセルキ、カーウ(黄金籠子)を附けてある、其籠子一つでも二百圓以上三百圓位するさうです、デ右の腕には小さな法螺貝の殻の腕環、左の腕には銀の彫物のしてある腕環を掛けて居る、ソレから前垂は誰でも掛けて居る、前垂でも好いのは一個三十六圓位するのがある、其筈です西蔵最上等の羊毛段だら織ですから、實に立派なものです、けれども指環は貴族の婦人を除くの外は大抵銀が多いのです、履は皆赤と綠色の羅紗で縫はれた所の美しい履を穿きます、サウ云ふ立派な粧ひであるに拘はらず顔には折々煤黒い物を塗つて、見るからが實に厭な粧ひです、けれども其國の慣れて居る人間の眼には其煤黒い下に赤味のあるのが非常に粹とか意氣とか云ふのださうです、是れかマア婦人の身廻りに就ての風俗と云つて宜い、其容貌はナカナカ美しいのも澤山ある、少し色は黒いけれども先づ日本の婦人と殆ど同じやうな顔容をして居る、併し日本の婦人よりは強壯で身體が餘程大

さい、迎も日本の小さな婦人のやうなのは西藏では見ることが出来ん位です、デ身體の大きな所へ緩かなる大きな着物を着て居るものですから其様子が如何にも寛大に見えて居る、貴族の婦女子に至ては其色の白さと云ひ其美しさと云ひ日本の美婦人に對して殆ど譲らない位である、

カムの美人と拉薩の美人 殊にカム地方の婦人の多くは色も白く又ナカ／＼美人が多い、けれども極愛嬌が少なく些ツとも愛くろしいと云ふ顔を見ることが出来ない、誠にツーンとして情ない云ふ有様が見えて居る、又其言葉の使ひ方もケン／＼して如何にも女らしくない風がある、併し悪い心は少ないやうですけれども兎に角愛の容貌を備へて居らない、其點に於ては拉薩の婦人は實に愛嬌者です、否な寧ろ愛嬌者と云ふよりも愛くるしいと云ふ方で敬ふべき點は少し缺けて居るやうですけれども兎に角拉薩の好色男子否な普通の男子をして其心を惱殺せしむるに足る丈の容貌を備へて居るです、併し品格は普通下品な方です、物を喰ひ／＼道を歩いて居る所杯を見ると如何にも下品である、中等下等の婦女子に至ては何れも小商人根情があつて些細な事に醜態する心が其品格までに現はれて何となくコセ／＼したやうな様子が見えて居る、貴族の妻とても矢張同様で高尚なる品格所謂華族の妻として備へて居るやうな品格のある人を見ることは極く少ない、全くないとも云へませぬが、先づ普通は藝者上りの奥さんのやうな者が多い、尤も藝者上りでも長く経てば奥さん社會の風習に慣れて品格の好くなる人もありませうけれども西藏ではサウ云ふ品格の悪

い女許りが貴族社會に居るのですから何時まで経つても改る氣遣ひはない、極く人には好かれ易いが扱入から敬せらるゝと云ふ品格のないのは如何にも缺點である、是れは大方一人の婦人て多くの夫に仕へるからして斯う云ふやうな氣風になつたのであらうと考へました

婦女子の習慣 の中で一番宜くないと思ふのは酒を飲むのと不潔な點である、日々の仕事の勤め振はドウかと云ふと日本の婦女子に比すると如何にも怠惰で足元にも寄付けないけれども、他の國の婦女子に比しては餘程働くと云うても宜からうと思ふです、殊に拉薩の下等社會及び中等社會の婦人は商賣するのが自分の習慣のやうになつて居るものですから何でも商賣の掛引で遣つて居る、自分が夫を定むるにも矢張サウ云ふ風である、デ前にも云ふ通り西藏人は婦人とても極く不潔です拉薩府の婦人はマア顔を洗ひ手を洗ふ事は知つて居るけれども其膚を見ると眞黒である、詰り人の見る所だけ一寸能く洗つて置くのと云ふ位のもの、上等社會はまんざらサウでもない、ナゼならば上等社會の婦女子は何にも仕事がないのです、只髪を洗ふとか鏡を覗いてお粧りをするのが自分の仕事である、其外の仕事と云うたら夫の仕事の助けをするのか、邪魔をするのか知らんが喧しく言立てるのが仕事なんです、ナカ／＼上等社會だからと云つて黙つて居る妻君は極く稀で、何事にも妻君が口を出すです、所が夫は其口を出した事を唯々諾々と肯く許りてはない、却て夫の方から妻君の意見を尋ねると云ふことが多いのです、所て上等社會の婦人は幾分か奇麗であるとは云

ふもの、一番座の冷める話はお便に行ッて其儘も越しになると云ふ秘密を思ひ出すとドンな美人でも一遍に嫌になつて了ふです、一體西藏婦人は裁縫と云ふやうな事は決してしないです、細くりする位の事でも矢張裁縫師を頼んでして貰はんければならん、其裁縫師は男であつて女の裁縫師はない勿論西藏では機織をする女はある、又糸紡ぎをする者もある、糸を紡ぐと云つた所で紡車が有る譯ぢやない、細い竹の棒の先に圓い獨樂のやうなものが附いてある、其竹の棒へ練付けた羊毛を巻いてサウして口で以て段段繰出して好い加減に長くなつた所で撚を掛けると云ふ工合にして糸を拵へるのですから太い糸しか出来なない、程餘鍛練して上手になつた人が先づムシのない細い糸を拵へる位のもので其細い糸と云つた所で紡績糸のやうなものは夢にも見ることが出来ん、其外に糸を拵へる方法は西藏には全くないです

第三百三回 婦人と産兒

婦人の業務 地方の婦人は耕作にも出れば牧畜もやるのです、第一婦女子は乳を煮てバターや何かを製します、其製し方は煮た乳を好い頃に冷ますと其上にクリームが出来、其クリームを取除けて了つて其中へ酸乳を入れて蓋をして一日も寝かして(温かに保つての意)置くとシヨー(酸乳)即ち

固まつた豆腐の様なものになつて了ふ、其酸乳を長い桶の内に入れ其上へ少し許り微温湯を入れてサウして棒の先に圓い蓋の附いたもので上げたり下げたりして充分摩擦すると段々バターとタラー(バターを取つた後の實ある乳なり)とが分かれて行く、其分れ加減に従つて微温湯を加へ尙ほ二時間許りも摩擦して居ると其中にすつかりバターとタラーとが分解されてバターはバターへ取收めることが出来る、所で跡に残つて居る其タラーを能く煮ると今度は酸い水と其實とが二つに分かれて了ふ、其實と云ふのは丁度豆腐を漉したやうなもので西藏語でチユーラと云ふあカラ(豆腐滓)よりはマダ柔く全く豆腐の碎けたやうなもので非常に旨い、併し其タラーの水も無駄にはならん、ソレを飲むと喉の渇きを止めるには極く都合が好い、少し酸味はあるがナカ〜味の好いものです、チユーラは生でも喰ひますが澤山出来るものですから乾し固めて置きます、ソレが即ち乾乳である、婦女子は多くサウ云ふ仕事を遣る、ソレから羊追ひ犂牛追ひに出掛ける、だから地方の婦人の働きは敢て男に劣らない、此働きの上から云うても地方は男女同等であり又家族の關係から云うても**家族の主権者は婦人**である、餘所へ雇はれて行つた時分ても男女同じ給金です、別段女だからと云つて安いと云ふことはない其代りに働くことも同じやうに働く、是れは矢張西藏婦人が身體が強壯で如何にも勞力に堪へることが出来るからです、ソレから其性質は一寸見ると極く温和でナカ〜愛嬌があるです、斯る婦人は決して人に仇を加へたり或は劇しく怒ると云ふことはある

まいと思はれる程であるけれども、時として怒ると非常なものでナカ／＼容易に承知しない、自分の良人が頭を地に附けて詫言つても肯がないと云うて居るのを私は度々見ました、サウ云ふ點になると實に我儘極まつたもので魔女か夜叉としか思はれない程恐ろしい有様が見えるです、だから西蔵婦人は或は猫と云つて宜いかも知れない、常には優しくしてイザ斯うと云ふ時は猫が鼠を捕る如く恰も虎のやうな勢を現はして良人を辟易させるです、又極めて我儘で良人を踏付けて他に男を拵へるのを何とも思はんです、實に色慾に耽ることは甚だしい、少し活計の思はしからぬ家の婦人杯はワザ／＼他の男の處に出掛て行きソレが知れた所て一向平氣なもので良人に向ひ何を云ふかと思ふと「お前は私を能う養はんから私は錢儲けに行つて遣つた」と云ふやうな口を利く、實に酷い有様です、ソレから又小利に醜態する心が極く鋭い、斯うすれば將來ドウ云ふ事が起るとか或は一村一國に斯う云ふ關係が起らう杯と云ふことは夢にも思はない、婦人にサウ云ふ注文をするのは少し無理でもありませんが少なくとも他人に對する利害の關係を思つて呉れれば餘程宜いのです、ところが他人はドウでも構はん、甚だしきは自分の良人が利益を失うても自分さへ利益を得れば宜いと云ふやうな有様が見える實に其點に於ては鋭い、其鋭い氣質が餘程自分を害して居る、ナゼならば自分の利益を得る爲めに自分の良人を害すると云ふのは詰り自分をも併せて害するのであるから、ですけれどもそんな事には一向頓着なく一生懸命に眼前の小利を謀ることに汲々として居る、ですか

西蔵婦人の臍線金 と云ふたら有名なもので奥さんよりお内儀さんに至るまで臍線金のな

い人は殆どないです、どんな詰らない婦人でも大抵臍線金を持つて居る、何時離線されても「へエ左様なら」と云つて出られるやうにチャント支度をしてあるです、併しサウ云ふ悪い點許りかと云ひますと決してサウでない、又自分の氣に入つた人に對する時分には誠に行届いたものでソリヤもう文明の婦女子と雖も及ばない程細な事に能く氣が付いて何から何まで能く世話をする、デ他の人の心を悟り知ること實に早い、此方で何も云はない中から氣轉を利かして人の慾望を満足させるやうにするです、斯う云ふ所を見るとナカ／＼立派な女であると思はれるに拘はらず前に云つたやうな反對した性質を備へて居る、要するに西蔵婦人は自家撞着の性質を一身に備へた奇妙奇態な婦人であると思はれたです

慾望 は先に云つたやうに小利を見ることに急であるからして他を顧みるに暇がない、併し其利益を得る爲めに自分が自立して遣るか云ふに決してサウでない、ドウしても他に頼らなくては行かないと云ふ考を始終持つて居る、コリヤ恐らく西蔵婦人の缺點であるかも知れませんが自分一人で商賣をして充分衣食住を爲し得る力があるに拘はらず尙ほ他人に依て其上の利益を得やうと云ふ事ばかり始終心掛けて居るです、先づ或家に嫁入して後不幸にして良人に死なれても幸に財産が自

分の手に入ったからと云うて安樂に自分の子供を育てながら後家を守って行くと云ふ婦人は西藏では殆ど見ることが出来ん、極のお婆さんとか極の醜婦でなければ後家で居る者は稀である、モッ少し買口のあるやうな女なれば必ず良人を持つ、西藏では四十或は五十位までは嫁入をするです、と云ふのは必竟獨立心に乏しく只他に依つて自分の幸福を全うしやう、今得て居る状態より好い状態を得たいと云ふ慾望、是れはマア人として當り前の事でサウあるべき筈でもあり又其心掛がなくてはならんのでせうけれども、と云うて其操をも守らず自分の身分をも考へずに良人が死んでマダ四十九日経たぬ中に最早お代りが出来て居ると云ふに至ては實に呆れ返らなければならぬのです、餘程教育ある婦人でも後家を立通すと云ふやうな美しい意氣を以て世を過すと云ふ婦女子は西藏には殆どないです、是れて西藏婦人はどんな者かと云ふ極く大體は分りましたらうが扱此婦人が結婚の禮式は先に説明した通りですから今度は此婦人が子供を産んだ時の取扱に就て少し説明をしたいです

産兒の命名式

西藏では男の子が出来れば誕生の禮式を擧げますけれども女の子の生れた時分には其禮式を行ふと云ふことはマア稀です、其禮式も地方に依て少しづつ、違ひがありますけれども大抵男子の生れた時分には三日経つて命名式を行ふ、最も奇な事は其子が生れたからと云つて決して洗ひもしなければ拭きもしない、母の胎内から出て來た儘で少し汚れ物を外へ取つて置くだけ



出 産 命 名 洗 禮 式

の話、尤も産婆と云ふやうな者もありません、勿論生れてから日に二度位づゝは身體の各部殊に頭へ餘計バタを塗付ける、それが(バタ)で沐浴すると云ふても好い位です、デ三日目の命名式の日になると先づ灌頂式を行います、ソレは或僧が秘密の法に依て加持した所の淨水中に鬱金香の花を入れた純粹の黄色な水を其頭に注いで佛名を唱へ禮拜して居ります中に重なる僧侶が其子供に名を命けるのです、所が其名の告げ方が實に奇態である、大抵生れた日柄に依て名を命ける、例へば日曜日に生れたものなれば男女共にニマ(日曜)と云ふ意味)と云ふ名を命け、月曜はダアワ土曜はペンバ、金曜はバーサン、と七曜に依て名を命けるのです、所がサウ云ふ名丈けても同じ名が澤山あつて間違ひが起るものだから、其上か下へ名を付けて區別する、即ちニマ、チエリンと云ふと日曜長壽、ダアワ、ブン、ツオクと云ふと月曜圓滿と云ふ名になる、サウ云ふ風に名を分つて、是れは其時其場に立會つたラーマが名を與へることもあり又神下が名を與へることもあり或は其親が斯う云ふ名を附けたいと云つて直に命けることもある。或は七曜日に關係せずに全く抽象的の名だけ附けるのもあり又動物の名を其儘附ける者もある、いろ／＼になつて居ますが通じて見ると日本の坊さんの名のやうな抽象的の名が多い、若し其子供が成長の後寺に入つて坊さんになると更にチヨエ、ミンと云つて法名を命ける、ソレから命名式の當日は其親族、朋友等からして酒肉或は衣服又は銀子等の贈物をして來る、デ其祝賀の爲めに來た所の人々には此方でも茶、酒、米飯、肉等いろいろ

ろの響應をします、併し斯う云ふ風に祝賀又は響應をするのは都會及び其附近の地方丈けて邊鄙の土地では富貴の者でなければしない、扱此命名式を擧げりますと其式に臨んだ僧侶は其村の神様及び家の神様に對し今度斯う云ふ名の子が此家に誕生しましたから此後は尊き神達の守護の下に保育されんことを希ふと云うて讀經供養をする、此讀經供養は新派の僧もあれば古派の僧もあり或は又ボン教の僧侶もあつて一定して居りません、若し神下の家に子が生れた時分には僧侶を頼まず神下自身に命名の禮式を擧げるです、序に此子供が大さうなつて就學する時と女の子が飾冠を戴く禮式に就て少しくお話致します

第百四回 兒女と病人

兒女の祝儀 男の子が成長して八九歳になると學業に就かしめる爲めに自分の師匠の許へ送るです、大抵師匠の宅に住んで居りますので、極近い處なれば或は通學する者もある、デ就學の始めの日には朋友親戚に報らせませす、すると朋友親戚の者は出て來て其子供に例の「カタ」を與へ子供は其「カタ」を首筋へ掛け兩端を胸の處へ下げて置く、是れは其子供が必ず學業を成就するやうにと祝願するの意味ださうです、デ、此日子供の家では酒宴を開いて馳走をなし又其子供が學業成就し

て最早や學校を退くと云ふ時分には先づ芽出たく事が濟んだと云うて又祝宴を開き其後若し官に就くやうな事がある時分には吉日を選んで大なる祝宴を開きます、此時には朋友親戚等よりもナカく澤山な贈物をして来る又自分の方でも立派な御馳走を調へて人を饗應するので、女の子は八九歳になりますと始めて吉日を選んで頭飾冠式は頭髪飾を付け此日又親戚、朋友等は「カタ」その他の贈物をして祝意を表し少女の家では同じく酒宴を開いて馳走する頭飾りと云つた所で大きな人の附けるやうな工合にするのではなくって極く單純なカムの婦人のやうな工合に總ての髪の毛を後へ一纏めに下げてサウして四組一筋に垂れる、デ其辮髪の上に美しき珊瑚珠及び(綠玉)瑜の混ぜ合せになつて居る飾りを極く可愛らしく列べるのです

小供の遊び

此子供等が拉薩の野でドウ云ふ風にして遊ぶかと云ひますと矢張何處の子供でもアドケない、先づ冬なれば雪の投合ひが最も楽しいので夏は角力と石投げ、どっちが餘計遠くまで投げたとかドレ丈け大きな石をドノ點まで投げたとか云ふ事、ソレから又向の方へ的を拵へて置いて其的へ大きな石をブン投げて落して了ふと云ふやうな遊びもするです、悪い子供は大きな人の博奕を見習つて博奕を遣るものもある、ソレは日本て云へばメンコのやうな一種の土塊を拵へて其塊を遠く投げるのを此方に居て打つと云ふ遣方ソレから又線を描いて置いて其中に銀貨を入れて置くサウして其銀貨を叩き出すと云ふやうな事も遣つて居るです、是れは日本の遊びと同じ事である、

ソレから繩を一筋持つて自分一人て頭の上から足の下へ掛けて廻しては飛び廻しては飛ぶといふ遊びもある、此遊びは又十人許りて行ふ事もある、例へば二人の子供が長い繩の端を持つてクルクル廻すのを十人の子供が足拍子を描へてヒョイヒョイと巧く飛び越えるです、是れも日本の子供と同じて其飛越える間に若し一人が繩に引掛つて躓くと今度は自分が繩持になつて其繩を廻すことにして居るです、此遊は男の子許りてはない、女の子も随分遣つて居る、其外にアゼ、ハアーモと云つて男女混合して河原乞食の芝居のやうな真似をして遊んで居るものもある又鞠を投げて遊ぶことも稀に行はれて居りますけれども是れは澤山にありません、西藏人は馬に乗ることが非常に嗜すから貴族の子供は馬の駆競を遣つて始終遊んで居るけれども貧乏人の子供はサウは行かんから野邊へ出掛けて行つて馬の形をして居る岩に捉つて一生懸命走つて居る積りて其岩の上で焦つて居る、今記憶に浮んで來たのは是れ位ですから男の子の遊びは是れ丈けにして

女子の遊び

は何うかといふに是れも他の國と同じく男の子に比べると矢張優しいです、日本の雜事と云ふやうな物祭の遊びソレから又アゼ、ハアーモの歌を謡ひ或は喇嘛摩尼と云つて佛のした行ひ或は昔の高僧の歴史又は大王が行うた事蹟に就ていろくの説明の繪が描いてある、其繪をば、哀れな聲、面白い聲、活潑な聲、いろくの聲で説明する調子が歌のやうに聞える、一人の女の子が壁の際に立つて歌を謡ふ調子で説明の真似をすると外の女の子は謹聴しながら其音頭取の

聲に和して西藏風に念佛を唱へるですソレが如何にも可愛らしく見える、此喇嘛摩尼と云ふのは西藏にはナカク澤山居りますが拉薩府には冬分は餘り居らない、と云ふのは冬分は皆地方へ出稼ぎに行くからです丁度五月頃になりますと地方の方は農業或は牧畜の事が忙しくなつて喇嘛摩尼は地方に居つた所が錢儲けが出来ないからソコで拉薩府に集つて来る、其時分が丁度拉薩の野邊に小さな赤蜻蛉の飛び交ふ時節で、其赤蜻蛉が青い草の間を飛ぶやうになると喇嘛摩尼が出て来るものですから其赤蜻蛉を稱して喇嘛摩尼と云ふて居るです、デ小供等は其喇嘛摩尼(赤蜻蛉)を捉まへに行くのも一つの遊びです、野邊へ出て彼方へ走り此方へ走り時には水の中に没り込んで濡鼠になつた其着物を脱いで乾かし自分は裸體で走つて居る子供を折々見ると、サウ云ふのが一番子供に取つて愉快な遊びである子供の遊びは是れ位にして茲に

病人の取扱方

に就ては西藏婦人は實に感心な點がありますからして其事に就て少しお話をしたいです、大抵西藏では其習慣としてドンな病人でも晝、身體を横にして寝ると云ふことは出来ないて、少し後に凭れるやうな物を拵へてソレに凭れて居る、デ其端には必ず一人の婦人が附き切て看護をして居て決して其病人の側を離れない、此看護の婦人は無論晝と夜とは代るです、貴族杯になりますと何遍も交代する、デ二人なり三人なり附いて居ることもあるけれども餘り騒しく話をしたり又病人の心を動かすやうな話は決してしない、ソレから病人が何か必要に迫られて心の中

に望むことがあれば殆ど其容子振でチキに悟つて決して病人には口を利かせないやうにして小便をしたいと云ふ様子が見えれば早速便器を當てがひ水が欲しけりや水を當てがふです、デ普通の時には決して小便をしたからと云ふて拭くと云ふことがないですけれども病氣になるといらく汚ない物が付く、スルと臭い匂ひがするに拘らず少しも厭ひなく拭き取つたり何かする、併し大抵マア西藏の病人の室に入ると日本人杯の病室と違つて一種異様な臭い匂ひ、逆も辟香か何かを持つて行かなくては堪えられないやうな嫌な臭ひがして居る、サウ云ふ中で其病人を看護して居ますので、全く附切りでなくても宜さうな譯であるけれども西藏では病人が晝寝ると云ふと其病人が必ず發熱して治るべき等の病氣も治らなくなつて了ふと云ふ信仰がナカク堅いのです、デ看護の婦人は詰り睡らせぬ見張をして居るので、又看護の婦人の外に睡らないやうに特に見張人を附けて居るのもある、其見張人はナカク注意をして病人が今少し睡りを來たさうかと云ふ氣味になると聲は掛けないけれども豫て自分の前に茶碗を一つ置いて其茶碗の中には非常に冷かな水と齒楊枝のやうな物を入れ置きまして其冷たい水を齒楊枝見たやうなもので病人の顔へビョイと振撒くですサウすると顔が冷たいものですから不意と氣が付く、病人其れ自身も寝ては行けないと云ふことを信じて居るものですからサウされても別段腹も立てないです、能く見て居て呉れる、私の爲めに介抱して呉れると却て喜んで居る位である、ソレでも尙ほ睡るやうになつて來ると其番人が立つて行

ツて後の方から少し擦り氣味に押へてサウして其病人に少し斯う壓迫を感ぜしめて眼を覺させます、又時に聲を出して覺ます事もある、斯う云ふ風に我々の眼から見ると極く酷虐な取扱のやうに思へるけれども西藏人は決して病人を苦める趣意からサウするのではなくして眞實其病人が一時も早く癒るやうにと斯うやうして居りますので此習慣と云ふものは實に非常な勢力があるので、診察に行きまして日中睡るかドウかと云ふことを尋ねる、少なくとも睡り掛けて可けませんと云ふと「ドウも睡っては仕様ががない、必ず睡らないやうに爲なけりやアならん」と注意しソレから病人に向つて「お前死たければ寝るが宜いけれども死たくなければ日中決して睡つちやア可けない」と云ふて第一病人の守るべき戒條として日中の睡眠を忠告するので、又人が病氣見舞に出て來ると先づ見舞の物品或は銀貨を與へてソレから病人に對して「日中寝ては可けません、睡ると貴方と私とモウ一遍遇つてお話することが出來ないやうな嫌な事になつて了ひますから是れだけは確にお氣を附けるやうに願ひます」ソレから看護の人に向つて「貴方がたは充分注意が行届いて居ませうけれども何分長々の病氣でも疲れが出るでせうから其邊は能く注意して下さい、病人は仕様がなから貴方がたが睡らせないやうに用心しなくちやア成りません」と云ふことを眞實に述べるです尙ほ外の家族の者にも其通り忠告して行きます、若し其病人が案外早く死てもすると「ナアに向ふの家では宜くない、大體兄弟も親達も日中睡らさないやうに心掛けなかつたからア、云ふ事になつた」

と云つてちんだ處に罪を歸することがあります、斯う云ふ堅い習慣の出來て居るのは何か此國には此事に就ての道理がなくてはならない、只馬鹿な爲めに斯う云ふことを遣つて居るのぢやアあるまいと思ひましたから餘程其事に就て調べて見たてす幸に私は葺醫者を遣つて居つたものですからサウ云ふとを調べるには極く都合が好かつた、いろ／＼の病人に接している／＼研究を重ねた結果大抵其原因が分りました、西藏では或種類の病人は日中睡つた爲めに段々發熱が増加して危殆に陥るところがある、其病氣は大抵風邪と云ふ類、ソレから西藏の水腫病と云ふ病の如きは日中睡つて居る中に發熱を醸して死んで了ふ、併し私共は風邪を引いたからと云つて日中睡らない譯に行きませんから矢張り暖かに寝て居るですが却て能く治つた事が度々あつたです、西藏人はサウ云ふ區別を知らずに只一二の例を以て凡ての病人を規定しまして病人の日中不眠が介抱の第一主要なる部分となつたらうかと思はれました

第百五回 迷信と園遊

病根は惡癘 西藏では病人の全癒を謀るには醫藥が重なる部分でない、最も主要なる部分即ち病人に對し最も有効なりとせらるゝ部分は祈禱である、彼等の信仰に依ると病氣は大抵惡魔、厄

鬼、死靈等の害悪を加ふるに依るものであるから先づ祈禱の秘密法に依つて悪魔を拂はなくては假令者婆扁鶴の藥と雖も決して利くものでない、デ如何なる悪魔が今其病人に對して禍を加へて居るか云ふことは普通人間の知らない所であるから先づ之を知る爲にはラーマに尋ねなければならんと云ふのでラーマの所へ指して書面を持たして尋ねに遣るとか或は使を遣つて尋ねるとか又は自分で行つて尋ねるです、スルとラーマはいろく其事に關する書物等を見て判断を下し是れは即苦刃鬼の祟りであるとか或は鳩槃陀鬼又は夜叉鬼の害であるとか或は死靈、惡魔、其地方の惡神等が祟りをして居るとか云ふことを能く見定めてソレに對する方法として何處のラーマに何々のお經を讀んで貰へと云ふ、尤もラーマの名を書いてある事もあれば又書いてない事もある、ソレは誰でも遣れる方法である時は名は書かない、少し六ヶしい方法になると誰某と云ふ指名をするのです、ソコでも醫者さんとは云うた時分に先づ此秘密の法を三日なり四日なり修めてから何處のお醫者さんを迎へると云ふこともあり又此法を修むると同時に迎へると云ふこともある、或は此病人は藥は要らない、今まで飲んで居つた藥は止して只祈禱だけして治ると云ふ様な説明もある、ソレはいろくになつて居ますが先づソレを尋ねに行きまして口で答をするのはソレに高等のラーマではない、中等以下のラーマが遣ります、中等以上のラーマですと其方法書を自分の侍者に書かせてラーマ自身に實印を捺し而して其書面を尋ねに來た人に渡すです、デ、今日醫者を迎へれば助かるべき等の病人

でも其方法書に五日の後に誰某を迎へて治療を頼めと書いてありますと西蔵人は病氣はドウあれ先づ惡魔を拂つて了はなければ假令お醫者を迎へて藥を服んだ所が到底治るものでないと堅く信仰して居るから先づ祈禱をする、それで其日に病人が藥を得ない爲めに死んで了つても其家族等は決してラーマなり或は神下なりを不明であると云うて怨むこともなければ惡口を云ひもしない、却て「成程エライ喇嘛だ」モウ今日死ぬことが分つて居つたからお醫者さんを迎へる必要はないと云うて態と五日の後と書かれた、流石に感心なものだ」と云つて感心して居る位、若しもサウ言はずに理屈の分つた者が「ドウも彼のラーマは詰らない事を云ふものだ、彼の病人は彼の時に藥を服まして置けば助かるべき筈であるのにア、云ふ馬鹿な方法書を書いて呉れた爲めにトウく病人が死んで了つた」杯と云ひますと世間では却て其人を非常に罵倒し「彼は外道である、大罪惡人であるラーマに對して惡口を云ふとは不届である」と云うて非常に怒ります、其怒られるのが怖さに能く分つて居つても何も云はずに辛抱して居る人間も澤山あると云ふことは私が確に認めた所です、尤も醫者と云つた所て殆ど病氣を治す方法を知らない、極く古代の印度の五明中の醫學が傳つて居る丈けて其醫學も極く不完全なものである、併し不完全な醫學丈けても心得て居れば病人に對して幾分の助けを爲すことが出来るでせうけれども彼等は其醫學の何んたるを知らずに只聞き傳へ位で遣つて居る者が多いのである

藥劑中の草の毒

西藏の醫者の用ふる藥の中には總てツアー、ツク(草の毒)の入って居らぬ

ものは少ない、此ツアー、ツクと云ふのは草の根の毒であつて之を多量に喰へば死んで了ふです、詰り興奮劑のやうであるけれども少し多量に入れてあるのを服むを身體の各部に痺れを起すことがある、又少量でも病氣の都合に依つては非常に腹を下すこともある兎に角其藥を服て病氣の治る治らんには拘らず必ず病人に對して何かの變化を與へるせず、其變化が起ると病人に利いたやうな工合に見えるから醫者さんは利目を見せる爲めにどんな藥にもツアー、ツクを入れる、昔し漢法醫が大抵藥の中に甘草を藥の導きとして入れて居つたやうなものでせう、尤も一二の例外はあるけれども其大部分はサウですから病人は堪らない、決して自分の病氣に適當した藥を費ふことが出来ない其不完全な醫學すらも學ばずに醫者を遣つて居る亂暴なドクトル先生が跋扈して居るのですから恐らくサウ云ふ藥を費ふよりは祈禱者に祈禱だけして貰うて自分の心を安んじ而して自然療養或は信仰的療養を遣る方が却て西藏今日の狀態では大いに得策であると私は考へたです、西藏では

チヤンサ 即ち酒宴を開く仕方は種々ありますが其中でも西藏人の最も喜ぶ酒宴であつて私共が見ても一番良い有様を現して居るのが一つある、ソレはリンカと云うて園遊を試み其園で酒宴を開くのです、是れが西藏人が酒を飲む中に於て最も高尚な遣方である此外に酒を飲んだり寄集る時分には何時の場合でも大概喧嘩口論が多い、けれども此園遊に行つた時分には如何なる破落戸も餘

り喧嘩をして居るのを見ないです、全くないと云ふ斷言も出来ずまいけれども私の見聞した所ではそんな事は全くなかつた、壯士坊主杯も園遊を試みる際には随分荒い遊び方を遣るけれども扱喧嘩は餘りしないので御座います、其園遊はドウ云ふ處で開くかと云ひますと拉薩市中を離れて三四町も行くと南の方向の河のある處を除くの外西、北、東の何れにも林が澤山ある、其の林は或大家の別荘になつて居つて全く垣を廻らして中に人の入ることの出来んやうになつて居るものもあり又持主がありながら極く自由に誰もが其處へ遊びに行くことが出来るやうになつて居るものもある、其中でも殊に好いのはキーチュー河の岸に在る林であつて其林は樹の繁つて居る處もありすけれども下は皆青芝で毛氈を敷き詰めた如く至極美麗に見えて居る處もある、勿論冬の間は枯れて了つて殆ど何もないかのやうに見えて居るけれども四月末から五月になりますと餘程芽が出て極く綺麗になるです、殊に河端ではあるし日本て云ふ絲垂柳の如きものもズツと茂つて居りますし桃の樹杯も随分其間にある、殊に桃の花の開く時分は餘程美しい、西藏では冬の間は枯れ果てた岩山、秃山及び青味掛つたもの、ない所謂灰色の野原許り見て居なければならん、冬が一番の眺めは雪の降つた中に數多の鶴が逍遙して居るのを見るのですが、拉薩府では雪が降つても大抵二三日で融けて了ふ其雪も一尺以上積ると云ふとは稀です、ですから其綺麗な雪景色も長く見て居ることは勿論出来ない、地方へ行けば何時までも雪の積つて居る處もあるが拉薩府では決してそんな事はない、デ

冬の間は何時も枯れた景色許りを見て居るので人目も草も枯れ果つる許りでなく心まで如何にも生
氣がないやうな鹽梅に其樂みがなくなつて了ふです、折から野原は一時に青草で満たされサウして
其間に綠葉菁菁と生茂るのであるから人の心も何となく長閑になつて野外の散歩を試みずには居ら
れない、錦々思ひ／＼に或は三々伍々隊を成して酒を入れた皮袋又は酒の瓶を持つて出掛けるので
す

園遊に用ふる酒

其御馳走は小麦の焼麴麴、小麦粉の油揚、乾乳、乾葡萄、乾桃、乾肉の類
て其家の下僕が其食物と敷物及び野邊で茶を沸かす道具杯を持つて行くです、デ朝九時頃から出掛
けて午後四時頃或は六時頃までも其處で酒を飲み戯れ遊ぶのですが其酒はネーチャン(麥酒)ヘーチ
ヤン(米の酒)を用ひ米酒は極く少ない、或は全く用ひない者もあつて多くはネーチャンを飲みま
す、此麥の酒の製方はビールなどのやうな譯ではなく極く單純な方法で拵へて居る、ソレは先づ始
めて麥を煎じます、其麥も黒い儘洗ひもせずデキに水を入れて能く煮たのを攪げて冷す其冷す間に
麥芽を入れて能く之を攪き混ぜ壺に入れて麴を寝かすやうな工合にして三日位経ちますとソレが全
く麴に變じて了ふ、其麴の中へ水を汲込みソレを能く攪せて置きサウして其上澄から段々汲んで行
くもあれば又其滓を絞取り取つて汁だけ賣るのもある、ソレでマア麥一升から酒を五升位取るので
すから其薄いことは實に甚だしい、特別に良いのを拵へる時分には二升位しか取らぬさうです併し

そんな良いのは通常賣つて居る處にはない、今云うた通りの拵へ方で三日も経つと酒が出来、チ
ヤンとソレを絞り分けて六七日を置きましたのはソレはモウ貴族が飲む酒として非常に尊いもの、
やうに思つて居るです、ナカ／＼長くは置かない、一月も置いたのはモウ餘程古い酒として尊ばれ
て居るので、其酒をガブ／＼飲むのですがドノ位飲んでもそんなに酔ふと云ふことはない、餘程
澤山飲まなければ酔はない、殊に寒い處ですから酔ひの醒め方も早いやうです、だが朝から晩まで
又晩から朝まで飲み續けに飲んで居ることもありますから其場合には随分彼等も沈酔して前後不覺
になつて居るやうな事も随分あります

第百六回 舞踏

綠林の園遊

先づ園遊て林の木の下の毛氈を敷いたやうな青草の上へ花段通を敷き其上へい
ろ／＼の御馳走を列ベンソレを喰ひつゝ酒を飲み或は謠ひ或は舞ふ、デ舞踏を遣る時分には其舞に和
して謠ひますので、西藏婦人及び男子は其舞踏程面白いものがないやうに思つて居るらしい、大抵
此舞踏を嫌ふ人は西藏には殆ど無い位です、尤も邊鄙の地に行きますと舞踏はナカ／＼六ヶしいの
で、ソレを學ぶことが出来ないからといつて能う遣らない處もあります但し自分が遣れなくて

も見ると丈けは大に好んで居るです、随分我々から見るとそんなに興味のあるやうには思はれませ
 んけれども面白いと云ふ點には確に賛成が出来る、マア面白笑止しく歌を謡ひ踊を跳り或は酒を飲
 み常に得難い美食をするのが既に無上の樂みなんで其上に一層の樂みを添へるのは此邊の景色、或
 はキーチエ河から野邊へ引かれてある誠に清らかな小河の邊に子供が遊び戯れて居る、其子供と
 同じやうに大きな者までが、ウロ付き廻つて遊んで居る有様は眞に無邪氣で見るからが如何にも樂
 しさうに見えるです、テ遙か遠い處には緑の滴る如き峰の頂に千古の雪を戴きたる所謂雪峰が泰然
 たる雄姿を現はして居る様は得も云はれぬ、斯う云ふ時にこそ拉薩即ち神の國と云ふ名詞が非常に
 適當したやうに思はれる、此園遊は中等以上の者のする遊びですがそんなら下等社會の者は園遊に
 は行かないかと云ふと矢張同じやうに行きます

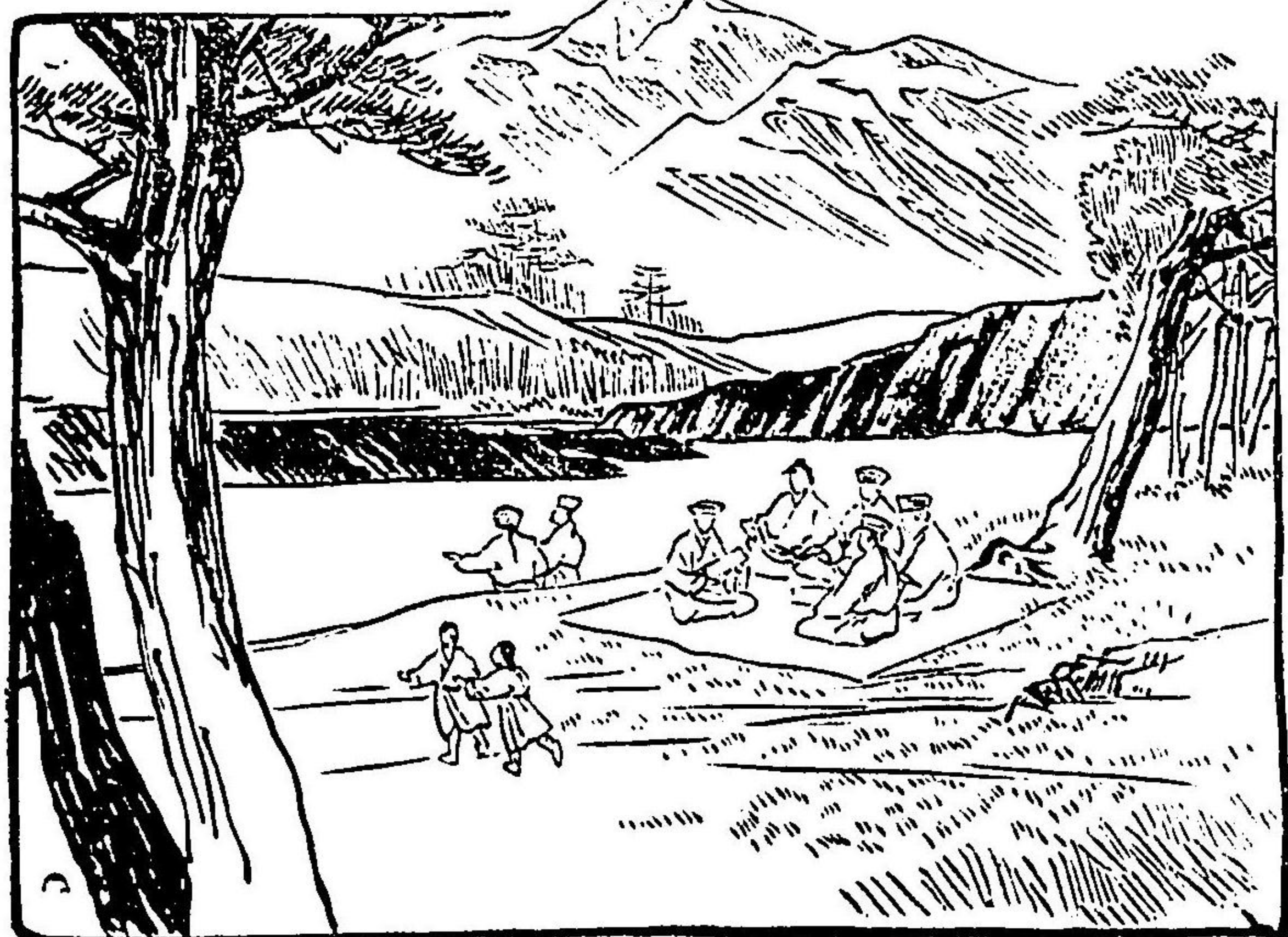
賤民の園遊

併し下等社會の遣ることはマア酒を飲む間に博奕をやるとです、ソレから角力、
 角力と云つた所で日本のやうな工合に取るのではなくて極く離れ々々になつてマア腕の押し競と云
 ふやうな工合に遣るので相手を倒すと云ふやうな事はないのです、ソレから壯士坊主の遣る石の
 投げひ、折には走ることの競争を遣つて居るものもある、下等社會の人達はマサかそんな事もしな
 い、矢張西藏人の最も好きな舞踏を遣る、其の舞踏は上流社會も下等社會も通じて一ツですが上流社
 會の人の遣つて居る方は品が好く見え下等社會の人の極く下品で見るから嫌な感情を喚起すやう

舞

踏

な氣味合があるです、併し西藏の下等社會の婦
 女子及び大變喧嘩好きの下等社會の男子が寄集
 つて園遊會を催して居るのですから何れ喧嘩か
 何か起るべき筈であるがソレの起らんのは全く
 今まで述べ通り彼等は確に知らずく境遇に感
 化せられて自分の日頃の行狀から云へば爲すべ
 き筈の喧嘩までもせずに愉快に暮して居るので
 あううと考へられたです、尙ほ此他にチャンサ
 (酒宴)の事は澤山御座いますけれども是れが一
 番良い酒宴であつて其他婚禮の事は此間述べた
 如く又自分の親の死んだとか云ふ場合にも酒宴
 の開かれる事が澤山ありますけれども夫等は折
 々財産争ひと云ふやうな事があつてなか／＼園
 遊のやうな清淨な遊び方は出来ないの御座い
 ます、酒宴の事は先づ是れて止します



四 人 無 上 の 樂 娛 な る 園 遊

西藏の外交

外交政略 此事に就て述ぶる前に國民一般の獨立心がドウ云ふ風になつて居るか云ふことを述べて置く必要があり、西藏國民は其國民各自の利害を先きにして國家の利害と云ふことを考へて居る者は極く少ない、寧ろ一己の利害を見ることは知つて居るけれども國家の利害を見ることを知らない、大體國家の存在杯と云ふことは西藏人の腦裡には殆ど無いと云うても宜い位です、政府の人とか何とか云ふ者はソリヤ國と云ふ觀念位は多少持つて居るですけれどもソレとても國の利益を謀るのが大事であるか自分一己の利益を謀るのが大事であるかと云へば無論自分一己の利益を謀ることを先きにして國の利益は先づ打棄て、置くです、否々ソレ許てなく國家の利益を犠牲に供しても自分一己の利益を謀ると云ふのか今日の西藏の多くの政治家の常である、中には眞に國家を思はいても此國に存在して居る佛教を維持しやうと云ふ爲めに自分の利益を犠牲に供しても盡さうと云ふ考を持つて居る人も幾分か無いではありませんけれども私の見た所ではソレは極く少數で或は口でサウ云ふ事を唱へて居る者も其實佛教其者よりも先づ己れの家を肥さうと云ふことに掛つて居るのが多いです、上の者が既にサウですから況して下の者に至ては益々甚だしいです、只下の者は自分の國は佛教があるから尊い佛教は即ち我國の名物であるから之を維持しなくてはならん、之

に反對する者は誰でも殺されて了ふと云ふ位に佛教に重きを置いて居る、ですから政府が何か事を遣る時分にはデキに彼は佛教に對して宜くないと云ふて佛教を土臺として他の者を攻撃する材料に使ふてす、其實政府の言ふ事が眞實西藏佛教の爲めになつて居るか居らんかは問題外で、殆ど政府の遣ふことは佛教を害する方が多い位です、けれども其政府は人民に對し佛教を云々しなければ人民を心服せしむる事が出来んものですから政府の遣ふことは寧ろ佛教を害するのですけれどもソレを知覺せず矢張斯するのが佛教の爲であると謂つて佛教の名を以て却て國民を虐げる場合が澤山あるサウされる時分には人民は最早泣寝入てす或は斯んな事なれば寧ろ佛教杯はなくても宜といふ考を起す人間もありましたやふけれ共マア大抵ソんな事を口先に上せる者もない既に西藏の婦女子の事に就て述べた時分に婦女子は自分の利益を謀ること許りを先きにして少しも他の利害を見ないと申し置きましたたが一般國民は詰り其婦女子から養成されたのですからソレより以上の考の出ることは餘程困難でせう、だからモウ婦女子の事を述べた時分に一般國民の氣風も分つて居る譯ですけれども又男は男だけに幾分かエライ考も起すかと思つて觀察したてす、けれども矢張男子も婦女子と餘り變らない、只少しく友達が大事であるとか何とか云ふて自分に利害の關係ある者を受することを知る位で國家と云ふ大きなものに至ては自分と利害の關係あることを能く知らないで度外に置いて居るやうに見受けました、ソレで斯う云ふ國に對して外交政略を施さうと云ふ外の國は此弱點に附

込んで其大臣等を旨く籠絡すれば略ぼ外交上の事が成立つやうな工合になつて居るです、ナゼならば其大臣なる者は自分の國家を犠牲に供しても自分の家が盛になりさへすれば宜い、外國から金を澤山貰つて自分一人が旨い汁を吸へば宜いと云ふ考ですから國民に難義を掛ける位の事は一向平氣です、ですから西藏の外交政略は殆ど政略と云ふよりは

感情問題　て總て利害の感情の上になつて事が定まるのです、夫故之に對する外國は必ずしも賄賂を遣つて其大臣を擒にしたからと云うてソレで成功すると云ふことも保し難いナゼなれば感情なるものは主義と一貫して飽くまでも貫くと云ふ性質を持つて居らない、從てグラ／＼變りますからドウせ當てにはならない、ですから斯う云ふ國と交際して外交上旨く成功しやうと云ふには尙ほ外に方法がなくてはならんのでせう

露國の外交政略

所て露西亞が西藏を手に入れて居る事は今に始めぬ事では、是れは最早や卅年も以前からポツ／＼遣つて居るのです、或はモツと前から遣つて居つたかも知れないけれども其形跡の著明に顯はれて來たのは三十年以前から、着々成功の歩を進めたのは誰に依て遣り來つたかと云ひますと西藏の北に當り西比利亞の中でモンゴリヤ人の住して居る處がある、即ち青海湖より少し北、東に當つて居る處に素と支那領のモンゴリヤのブリヤットと云ふ部落があつたソレを露國が征服して今は露西亞領になつて居る、所て露西亞政府は希臘教と云ふ國教があつて自分の本國

に於ては、殆ど宗教上の自由を許さない程壓制して鞏固な主義を實行して居るに拘はらず、此邊の佛教徒に對しては極く寛大な主義を執つて、彼等をして充分に佛教を信ぜしむるのみならず又其寺々に保護を與へて尙ほ佛教を盛にせしめる方針を執つて居るです、ソレは露西亞政府が必ずしも佛教を信じて居るのではなく、只其佛教を盛にせしむるやうに見掛て其僧侶を旨く心服せしめたものであらうと思はれる、此部落からして澤山なラーマが西藏の大學校へ修行に來ますがソレはガンデン、レホン、セラ、ツアン洲のタシルフンブー寺にも居るです、今は確かに何名程居るかは分らないが凡そ百五十名以上二百名まで居るかも知れぬ、斯様に露西亞領のモンゴリヤの僧侶がソレだけ澤山來て居る中で近來大變な遣手が出たです、

露國の秘密探偵

其家傑は西藏でツアンニー、ケンボの位階を貰つて今の法王の問答の師匠となつたドルチェと云人ですツアンニーとは即ち定義を問答すると云ふ意味でケンボと云ふのは教師と云ふ意味です、此ツアンニー、ケンボが今の法王と非常に昵懇になり現にツアンニー、ケンボとなつたのも今より十八九年以前の事です、即ち法王が子供の時分から問答の遺方を教へて行つて充分法王の、氣に入るやうに仕向けてサウして自分をして信用せしむるやうに充分方法を廻らしたものと見える、ナカ／＼